第十一條　學習院ノ生徒ニシテ未タ學科ヲ終ラサル者陸海軍學校ニ入學セントスルトキハ其試驗合格ノ後ヲ待テ退院ヲ許スヘシ

第十二條　他ノ小學校又ハ相當ノ教師ニ就キ小學ノ教育ヲ受クル者ハ戶主又ハ後見人ヨリ每學期其科程ヲ具ヘ華族局長官及學習院長ニ届出ヘシ

第十三條　專門學校及陸海軍學校ニ入學スル者及外國ニ留學スル者ハ戶主又ハ後見人ヨリ每學期其科程ヲ具ヘ華族局長官及學習院長ニ届出ヘシ

第十四條　紀律ヲ犯シ退學ヲ命セラレタル者ハ其情狀ニ從ヒ併セテ懲戒ノ處分ヲ被ムルコトアルヘシ

第十五條　退學ヲ命セラレタル者一年ノ後親屬連證シテ學習院ヘ入學ヲ請フトキハ宮內卿ハ其事情ヲ審査シ之ヲ許可スヘシ

第三十二章　乘馬

第一節　乘馬飼養令

◎明治十七年八月一日太政官達第六十六號

乘馬飼養令左ノ通相定候條此旨相達候事

第一條　勅奏任文武官ハ乘馬ヲ飼養スヘシ

但陸軍武官幷ニ警視官等ニシテ乘馬本分ノ職ヲ本スル者ハ其本分ノ馬匹ハ各其規則ニ依ル海軍武官ハ海上勤務本職中ノ者ヲ除クノ外

第二條　文武官飼養ノ馬匹ハ戰時若クハ事變ニ際シ軍用ニ供給スルノ義務アルモノトス

第三條　勅奏任官ハ年俸ト月俸トヲ問ハス一箇月俸給百圓以上ヲ受クル者（出仕御用掛モ包含ス）ニ限リ左ニ掲クル馬數ヲ飼養スヘシ

但各自ノ便宜ニ依リ定數以上ノ馬匹ヲ飼養スルコト及乘馬ヲ馬車馬ニ換フルコトハ妨ケナシ

同	三百圓以上四百圓未滿ノ者	乘馬一頭
同	四百圓以上五百圓未滿ノ者	同　二頭
同	五百圓ノ者	同　三頭
同	六百圓ノ者	同　四頭
同	八百圓ノ者	同　五頭
同		同　六頭

第四條　乘馬ハ各自ノ望ニ任セ陸軍省ヨリ官馬ヲ拂下ク可シ
但百圓以上貳百圓未滿ノ俸給ヲ受ク者ニ限リ其代價ハ月賦ニテ
上納セシム
第五條　事故アリ定數ノ乘馬ヲ飼養スルコト能ハサル者ハ飼料トシ
テ毎一頭一箇月金十圓（百圓以上百五十圓未滿ノ俸給ヲ受クル者ハ七圓）ノ割合ヲ以テ毎月本官廳ニ
納メ本官廳ハ其金額ヲ取纏メ翌月之ヲ陸軍省ニ送付スヘシ
但飼養料ヲ上納スル者ハ臨時陸軍省ヨリ官馬ヲ借用スルコトヲ
得
第六條　陸軍省ニ於テハ第四條ノ官馬拂下ケ幷ニ第五條ノ飼養料ニ
充ツ可キ馬匹ヲ備ヘ置キ拂下ケ及臨時貸與ノ方法ヲ定ム可シ
第七條　各自乘馬ヲ飼養スル準備ノ爲メ本令頒布ノ日ヨリ左ニ掲ク
ル年月間其飼養ヲ猶豫スルコトヲ得
但本令頒布ノ後新ニ任官シタル者若クハ百圓未滿ヨリ百圓以上
ノ俸給ニ昇進シタル者ハ其新任若クハ昇進ノ日ヨリ起算ス又海
軍武官ノ海上勤務ヨリ陸上勤務ニ轉シタル者ハ其轉職ノ日ヨリ
起算スヘシ
俸給百圓以上百五十圓未滿ノ者　一箇年
同　百五拾圓以上貳百圓未滿ノ者　十箇月
同　貳百圓以上三百圓未滿ノ者　六ケ月
同　三百圓以上四百圓未滿ノ者　二ケ月
同　四百圓以上ノ者　一ケ月

第二節　同上ノ分地方稅免除

▲明治十七年十月八日太政官達
第八十三號
本年八月第六十六號達ニ依リ飼養スル乘馬ハ地方稅ヲ賦課スルノ限
リニ在ラサル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

第六編　刑法治罪法

第三十三章　刑法（令則）

第一節　主刑處分

○死刑ヲ受ケシ者犯由掲示
茨城縣伺　明治十六年九月十二日付
第一條　茲ニ死刑ノ宣告ヲ受ケタル犯人アランニ其裁判言渡ニ對
シ上告棄却セラレタル後死刑執行シタル時犯由ヲ榜示公告スル
ニハ原裁判言渡ノ全文ヲ掲ケ（上告ニ對スル判文ハ公告セス）明治

十五年御省丙第三號御達ニ依リ掲示方取扱可然哉

第二條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル者前條ノ如ク上告ヲ爲シ其上告ニ付キ原裁判言渡ノ幾分ヲ破毀セラレ死刑ヲ執行シタル時ハ原裁判言渡書及ヒ大審院判決書ノ全文ヲ掲ケ公告スル儀ト相心得可然哉

右ハ死刑ノ宣告ヲ受ケタル後上告及哀訴ヲ爲シ其上訴總テ棄却セラレ已ニ裁判確定シタル者有之ニ付刑ノ執行ヲ爲シタル時ハ取扱方差閊候條至急御指揮有之度此段相伺候也

指令　同年九月十八日付

書面伺之通

○死刑ヲ執行スヘキモノ病痢ニ罹リ人事ヲ辨セサルモノ

群馬縣伺　明治十六年二月四日付

茲ニ死刑ヲ執行スヘキ者當時病痢（室扶私或ハ腦膜炎ノ類）ニ罹リ更ニ人事ヲ省ミサルカ如キ受刑者アラン此際直チニ執行ヲ爲スハ却テ刑罰ノ本旨ニ悖ヒ少シク妥當ナラサルヲ覺フ因テ右ノ場合ニ於テハ其執行ヲ停止シ假令痊治ニ至ラサルモ幾分ノ本復ヲ待チ執行スヘキ儀ト相心得可然哉法章上明文無之ニ付相伺候也

指令　同年十二月廿四日

伺ノ趣死刑ノ執行ヲ受ク可キ者疾病ニ罹リ人事ヲ辨セサル時檢察官ニ於テ其執行ヲ爲スヘカラスト認メタル時ハ伺之通

但執行ヲ爲スニ差支ナキニ至リ之ヲ執行スルモ檢察官ノ指揮ニ依ル儀ト心得ヘシ

○刑期限内死亡シタル遺骸葬式

德島縣伺　明治十六年十二月廿八日

刑期々限内ニ死亡シタル囚徒ノ親族等ヨリ其遺骸ヲ請フニ依リ之ヲ下付致シ候上ハ式ヲ以テ葬儀執行候共不苦儀ニ候哉

指令　明治十七年一月十九日

伺之通

○科料ヲ拘留ニ換ヘタルモノ警察署ニ於テ執行

盛岡始審裁判所檢事伺　明治十七年二月八日付

若松始審裁判所檢事ヨリ人民徵喚不參ノ科ニヨリ罰金科料ニ處セラレ納完スル能ハス勾留ニ換ラルヽ者ノ儀ニ付別紙寫ノ通リ伺ニ對シ朱書ノ通御指令相成候當裁判所管轄ニ於ケルモ同樣數十里外ヨリ引致若手縣監獄署又ハ警察署ニ於テ執行致サヽルヲ得サル

ニ付縣聽ヘ協議之上各警察本分署ニ於テ勾留執行爲致不苦哉

（別紙）

若松始審裁判所檢事伺

當裁判所ニ於テ徵喚不參ノ科ニヨリ罰金又ハ科料ニ處セラレ納完セスシテ勾留又ハ輕禁錮ニ換ヘラルヽ者不少是等ハ概テ欠席ニ係リ逃捕狀ヲ以テ數十里外ヨリ引致福島縣監獄署若松支署ニ於テ執行致來候得共右ハ尤モ微罪ナルヲ以テ斯ク手數ヲ要セス其住所ヲ管轄スル各警察本分署ノ勾留所ニ於テ執行セシムル方官民ノ便宜ニ付自今右樣取計可然哉

朱書

伺之通　但輕禁錮ハ監獄ニ於テ執行スヘキモノトス

指令　同年三月七日

伺之通

第二節　附加刑處分

○遺捨品其他犯罪ノ證憑トスヘキ物件公訴期滿免除ノ期限ヲ經過シタルトキ行政處分

櫟木縣伺　明治十六年九月八日付

遺捨品中賍物其他犯罪ノ證憑トスヘキ物件アリ警察官ヨリ之ヲ檢事ニ送致セシニ犯人未タ捕ニ就カスシテ公訴期滿免除ノ期限ヲ經過シタルトキハ其物品ハ行政官ノ處分ニ屬スルモノニ候哉果シテ行政官ノ處分ニ屬スルモノトセハ前顯ノ物品ハ勿論犯罪搜査ノ爲メ檢事ニ於テ直チニ勾收シタル物件事主不分明ナルモノニシテ期滿免除ノ期限ヲ過キタルモノモ檢事ヨリ警察官ヘ引渡シ相成ヘキ筋ニ之レアルヘキ哉此段相伺候條至急御指揮ヲ仰キ候也

指令　同年九月十九日

伺之通

○盜難ニ罹リ日ヲ經テ其物品ヲ拾得屆出

長崎縣伺　明治十六年八月三十日

爰ニ數種ノ物品盜難ニ罹リタル者數日ヲ經テ其物品ヲ拾得テ之ヲ屆出タル場合ニ於テ司法警察官ハ本犯誰タルヲ知ルニ由ナク到底就縛ノ目的ナクシテ假渡ヲ爲スモ結局事主ノ迷惑ニ相成ルヘクト思料スルカ又ハ物品數十日ヲ經過スレハ腐敗ノ恐アル者ト見認ムルトキハ其物品ノ數及ヒ價格品類等詳細登錄シ置キ之ヲ他日ノ證據物ト爲シ物品ハ直チニ事主ヘ下渡シ候テ不苦ヤ右差掛リタル事件

モ有之候條至急御指令相成度此段申伺候也

指令　同年九月十九日

伺之通

○賍金ヲ以テ買取シタル物品及ヒ賍品ト交換シタル物品ハ賍物トシテ處分

於三次治安裁判所廣嶋輕罪裁判所檢事請訓

明治十六年九月十七日付

刑法第四十三條同第四十八條末項ノ旨趣ハ渾テ現ニ得ル賍ヲ指稱スルモノト了解能在候處客年七月當裁判所ニ於テ賍金ヲ以買取シタル物品ヲ沒收セリ然ルニ當時檢事代理ハ之ヲ不當トシ被害者ヘ下付スヘキ趣意ヲ上告ス大審院ハ本年七月上告ノ如ク第四十八條ニ據リ裁決アリ右ハ凡ソ裁判例トナルヲ以テ之ニ倣フハ勿論ト雖大ニ疑團不少抑モ金ハ品ニ變化スルモ猶間接ノ賍トシ品ハ金ト同視スルモノトセハ何度其種質ヲ變スルモ同ク源賍ト同視セサルヲ得ン爰ニ一例ヲ擧ンニ農甲吉商乙吉カ賣品タル反物數拾ヲ盜ミ以農甲牛馬數頭ヲ所有セハ之ヲ押收シテ乙吉ニ還付スヘシ然ルニ被害者タルモノヽ常情ハ素ヨリ源賍ノ返還若クハ相當ノ要償ニ可有之

右牛馬還付セラルヽ如キハ迷惑僅少ナラサレハ之ヲ辭退セン乎判官ハ已押收還付ノ宣告ヲナシタレハ如何ニスヘカラス其他言フヘカラサル障害アルニ至ラン右ハ法理上甚タ了解致兼候間何分ノ御訓示ヲ仰キ候也

内訓　同年十一月二日

請訓ノ趣贓金ヲ以テ買取シタル物品ハ勿論賍物ト交換シタル物品ト雖モ仍ホ賍物トシテ處分スヘキモノトス但還付ノ處分ヲ受クルモ被害者ニ於テ其物品ヲ領収セスシテ別ニ損害ノ賠償ヲ求ムルハ其隨意ナリトス此段及内訓候也

第三節　刑期計算

○舊法處斷ノ者ニシテ償役アル者原役内ニ算入

新潟縣伺　明治十六年十二月廿五日

第一條　舊刑法處斷ノ者ニシテ改定律例第五十條ニ依リ償役アル者現今服役中ニ在ル者ハ新刑法ニ比準シ其償役ヲ宥メ原役限内ニ算入シ可然哉

第二條　前條ノ者改定律例第四十四條ニ依リ償役アル者現今服役中ニ在ル者ハ前條同樣處分シ可然哉

指令　十七年一月十九日

第一條第二條　伺ノ通

○暦ニ從フトハ十二月ヲ以テ計算

京都始審裁判所檢事請訓　明治十六年九月廿六日付

第一條　刑法第四十九條ニ（前略）一年ト稱スルハ暦ニ從フトアリ右ハ平年ハ三百六十五日閏年ハ三百六十六日ヲ以テ計算スル義ニ有之候哉果シテ然ラハ一年ノ刑ヲ言渡サレタルモノ平年ト閏年ト岐リタル時ハ受刑ノ年ノ日數ニ從フ可キヤ滿限ノ年ノ日數ニ從フ可キ哉ノ疑團ナキ能ワズ何トナレハ受刑ノ年ノ日數ニ從フ時ハ例セハ平年三月五日ニ一年ノ刑ヲ言渡サレタル時ハ翌年三月五日滿限六日ニ放免スヘキ者ニ相成又滿限ノ年ノ日數ニ從フトキハ平年二月十日ニ一年ノ刑ヲ言渡サレ翌年閏年ナル時ハ翌年二月十日滿限十一日放免スヘキモノニシテ初年閏年ナレハ翌年二月八日滿限ト相成刑期區々ニ渉リ不穩當ノ樣ニ有之抑右暦ニ從フトハ十二月ヲ以テ計算スル儀ニテ平年閏年ヲ論セス當年三月五日ニ一年ノ刑ヲ言渡サレタル者ハ翌年三月四日ヲ以テ滿限ト相心得可然哉

第二條　重禁錮一年ノ刑ヲ受ケタル六十日役過シテ逃走シ捕ニ就キタル時ハ一年ノ日數三百六十五日ヲ內ヨリ右六十日ヲ扣除シ殘ル三百五日ヲ更ニ役セシムヘキヤ將タ已ニ役過セシ日數二月ナルヲ以テ一年ノ月數十二ケ月ノ內ニテ二月ヲ扣除シ殘ル十ケ月ヲ更ニ役セシメ可然哉

內訓　同年十月十三日

請訓ノ趣ハ第一條第二條共後段見込ノ通

京都府伺　明治十六年十月廿六日付

本年九月廿六日付京都輕罪裁判所檢事請訓其第二條ニ重禁錮一年ノ刑ヲ受ケタルモノ六十日經過シテ逃走シ云々ニ對シ本月十三日付請訓ノ趣ハ第一條第二條トモ後段見込ノ通ト內訓有之候處當府ニ於テハ刑法第四十九條ニ據リ斯ノ如キモノハ一年ノ內ヨリ六十日ヲ扣除シ殘ル三百五日ヲ執行致來候處右內訓ノ通ニテハ一年ノ刑ヲ受ケタルモノ六十日經過シテ逃走スルキハ其逃走スルカ爲メニ已ニ確定シタル裁判ノ刑期五日ヲ減縮スル義ニテ稍々不穩當ニ被考候如何相心得可然哉

指令　同年十一月八日

伺ノ趣暦ニ從フトハ一年ヲ三百六十五日トスルニ非スシテ暦ノ年月日ニ從ヒ計算スルヲ云フ即チ年ノ平閏ニ拘ハラス禁錮一年ニ處セラレタル者本年十一月一日ヨリ執行シタルトキハ明年十一月一日ニ之ヲ放免スヘシ明年一月二日ニ逃走シ同五月一日ニ捕ニ就キタルトキハ明後年四月廿日迄ヲ一年ト假定シ其内ヨリ前ニ執行ヲ經タル二ケ月一日ヲ扣除シ平年ナルトキハ明後年二月廿七日ヲ以テ滿期トス依テ京都始審裁判所檢事曾根誠藏ヘ前訓示ノ通心得ヘシ

○禁錮ヲ減盡シ拘留ニ處セラレタルモノ上訴

岐阜始審裁判所檢事請訓　明治十七年十月一日

刑法第五十條刑ハ裁判確定ノ後ニアラサレハ之ヲ執行スルヿヲ得ストアリテ総テ刑ノ執行ハ上訴期限經過ノ後執行スヘキモノナルモ違警罪ノ如キハ明治十四年第四十四號公布ニ依リ上訴ヲ許サレサルモノナレハ裁判宣告ハ即日ヨリ執行スヘキモノナラン依テ思考スルニ茲ニ輕罪犯ニシテ宥恕減輕酌量減輕等ニテ禁錮ヲ減盡シ拘留ニ處セラレタルモノハ勿論縱令減シテ其長期一月以上ニ在ルモ其短期十日以下トナリ其短期ヲ以テ拘留ニ處セラレタルモノハ其現ニ受ケヘキ刑ハ即チ違警罪ノ刑ナレハ該四十四號ノ公布ニ基キ上訴ヲ許サレサルモノトシ裁判宣告ノ即日ヨリ執行スヘキモノト心得可然哉仰内訓候也

内訓　同年十月十八日

請訓之趣禁錮ヲ減盡シテ拘留ニ處セラレタル者ト雖モ尚ホ上訴スルヲ得ルヲ以テ上訴期限經過ノ後ニアラサレハ其刑ヲ執行スルヲ得サル儀ト心得ヘシ此旨及内訓候也

○收監審理中又ハ已決囚ニシテ餘罪發覺又收監セラレタルモノ刑期計算

京都府伺　明治十六年六月廿一日付

茲ニ一人ノ未決監ニ收監セラレ審理中餘罪發シテ又收監狀ヲ發セラルヽモノアリ而シテ第一ノ所爲ニ對シ刑ノ言渡ヲナシ數日ヲ經テ第二ノ所爲ニ對シ放免ノ言渡ヲナシ又ハ刑ノ言渡シヲナスモノアリ此場合ニ於テハ未決監ニ收監中ト雖モ第一ノ刑期ハ刑法第五十一條ノ通計算シ可然哉前顯果シテ伺ノ通ナルトキハ已決囚ニシテ餘罪發シテ未決監ニ收監セラルヽトキハ其餘罪ノ罪トナルト否トヲ論セス其日數ハ刑期ニ算入スル儀ト心得可然哉差係リタル義有之候條至急伺分ノ御指令相成度此段相伺候也

指令　同年六月三十日

伺之通

○甲裁判所ニ於テ欠席裁判ヲ受ケタルモノ乙裁判所ニテ他ノ事件ト欠席裁判ナリシ罪ト二罪俱發一ノ重キニ問ヒタルモノ刑期計算

石川縣伺　明治十六年九月十四日付

愛ニ詐僞取財之犯罪人アリ其所在不分明ニ付甲地裁判所ニ於テ八月四日缺席ノ儘重禁錮三ケ月罰金四圓監視六月ヲ言渡サレタリ然ルニ本犯ハ乙地ニ於テ毆擊創傷ノ事件ニ付七月廿五日同地監獄署ニ勾禁セラレタル事甲地裁判所ヘ和知レ八月十七日右欠席裁判言渡書ヲ乙地ヘ送致シタルニヨリ即日本犯ニ告示シタリ然處同月廿七日乙地裁判所ニ於テ毆擊創傷事件ト前罪詐僞取財ト二罪俱發一ノ重ニ問ヒ重禁錮二年ノ刑ニ處セラレタリ右刑期計算方後判二罪ヲ併セタル處分ナルヲ以テ前判ニ不關後判言渡ノ日ヨリ起算シ後判ノ刑ニ併テ重禁錮二年ヲ執行候儀ニ候哉差懸リ候義右之候條至急御指揮被成下度此段相伺候也

指令　同年九月廿六日

後段伺之通

○檢察官ノ上告ニ係リ保釋ヲ得タル犯人又罪ヲ犯シ審問ノ爲メ拘留セラレ刑ノ言渡ヲ受ノ後上告事件判決トナリタルモノ刑期計算

水戸始審裁判所檢事ヨリ請訓　明治十六年八月廿日付

第二條　檢察官ノ上告ニ係リ保釋ヲ得タル犯人又罪ヲ犯シ審問ノ爲メ拘留セラレ尋テ刑ノ言渡ヲ受テ其執行ヲ終リタル後上告ニ係ル事件判決トナリ其刑重キヲ以テ已ニ役過スル日數ヲ扣除スル時右審問ノ爲メ拘留セラレタル日數モ亦刑期ニ通算スヘキ哉

刑法第五十一條第二項上告中拘禁ヲ受ケタル日數ヲ刑期ニ通算スルハ畢竟犯人原裁判ニ服從シ上告中原裁判言渡ノ爲メ拘留セラルヽハ犯人ノ自ラ求ムル所ニアラサルヲ以テノ故ナラン然ラハ則上告中他ノ犯罪ノ爲メニ拘留セラルヽハ素原裁判言渡ニ因ルニアラス毫モ上告ノ事件ニ關セサルモノニメ即犯人自ラ求ムル所ナリ尋常上告中拘留セラレタルモノトハ大ニ性質ヲ異ニシ其日數ハ刑期ニ通算スヘキモノニアラサル樣思考致候得共疑義ニ渉リ候條此段仰請訓候也

右内訓　同年九月十八日

第二條　前段見解之通

山形始審裁判所米澤支廳檢事請訓　明治十六年九月廿六日付

例ヘハ茲ニ重禁錮三月ニ處セラレタル者アランニ該言渡檢事ノ上告ニ係リ其後滯監二月ニシテ保釋ヲ許サレタリ然ルニ保釋中餘罪發覺シ又ハ更ニ罪ヲ犯シタルヲ以テ大審院ノ判決ヲ待タス直チニ重禁錮五月ニ處スルノ裁判言渡アリタル場合ノ如キハ上告ニ係ル事件ノ刑期ニ拘ハラス其執行ヲ爲スヘキハ勿論ナリト雖モ被刑者ハ前裁判ニ於テ已ニ二月ノ滯監アルヲ以テ此滯監二月ヲ扣除シ執行官ハ餘ル三月ノ執行ヲ爲スヘキ裁將タ上告ニ係ル事件ト本件トハ全ク別物ナルニ依リ之ヲ扣除スルノ限ニアラサルヤ若シ扣除スヘカラサル者トセハ後發ノ罪ニ依リ受ケタル刑執行濟ノ後大審院ニテ上告ヲ棄却セラレ又ハ前判ノ刑期ヨリ輕キ重禁錮二月ニ處スルノ言渡アリタルトキノ如キハ前後併セテ七月ノ拘束ヲ爲スニ至リ被刑者ニ於テハ其不利益尠カラス且刑法第百二條ノ精神ニモ戻ル樣被考疑議決兼候條此段請訓候也

内訓　同年十月九日

請訓ノ趣前段見解ノ通

○被告人自ラ上告シ檢察官亦附帶上告ヲナシタル場合

刑期計算

茨城縣伺　明治十六年十月廿三日付

刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シタル後檢察官ヨリモ又附帶ノ上告ヲ爲シタリ然ニ大審院於テハ二者ノ上告棄却シタリ右刑期ハ原裁判言渡ノ日ヨリ起算シ可然哉法律ニ正條ナキヲ以テ此段相伺候也

指令　同年十一月十日

伺ノ趣後判宣告ノ日ヨリ起算スヘシ但上告期限檢察官ヨリ上告シタルモノニ係ル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算スル儀ト心得ヘシ

和歌山輕罪裁判所檢事請訓　明治十七年七月十七日

刑ノ言渡ニ對シ被告人自ラ上告シ檢察官亦附帶ノ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ二個ノ上告共ニ棄却セラレタルトキハ刑法第五十一條第一ノ後段ニ依リ後判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀ト存候得共同上ノ場合ニ於テ被告人ノ上告旨趣ハ原裁判ヲ破毀スルノ理由ト爲スニ足ラサルモ他ニ不法ノ點アルヲ以テ大審院之ヲ破毀シタル

ハ又ハ檢察官附帶上告ノ旨趣ニ依リ原裁判ヲ破毀シタルトキハ到底原裁判不法ナリシモノニ付被告人ノ之ニ服セスシテ上告セシハ不當ナリト爲シカタク且原裁判ノ破毀ト爲リタルハ畢竟被告人ノ上告ニ因ルヲ以テ此二個ノ場合ニ於テハ刑法第五十一條第一ノ前段ニ依リ前判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀ト相心得可然哉

内訓　同年七月三十日

別紙請訓ノ趣ハ見解ノ通此旨及内訓候也

○哀訴シテ棄却セラレタルモノ刑期計算

茨城縣伺　明治十六年十一月十二日付

刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲナシ上告者ノ主意相立サルモ大審ニ於テ原裁判ノ幾分ヲ破棄セラレタル節ハ原裁判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀トハ思料候得共其判決ニ服セス哀訴ヲナシ棄却セラレタル節モ亦原裁判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算シ可然哉此段相伺候也

指令　同年十二月廿一日

伺之趣原裁判宣告ノ日ヨリ起算ス可シト雖モ大審院ニ於テ破毀ノ言渡アリタル翌日ヨリ哀訴棄却ノ言渡迄ノ日數ハ除去スル儀ト心得ヘシ

○准流十年ノ言渡ヲ受ケ再度逃走シ懲役終身ニ處セラレタル後減一等同十年トナリタルモノ刑期計算

大分縣伺　明治十七年十月二十一日

本年八月御省第三八一〇號内訓千葉縣第一條ニ對シ云々御指令有之候處茲ニ明治四年七月廿一日準流十年ノ言渡ヲ受ケ處刑中逃走外ニ在テ又犯罪ニ依リ六年十二月十七日從新拘役十年加役七十日ノ處刑中仝十年四月二日再ヒ逃走セシニ依リ棒鎖二日ノ上懲役終身ニ處セラレ服役中仝因ノ逃走ヲ報シタルニ依リ減一等懲役十年トナリタル者アリ右ハ千葉縣伺トハ事情相違ノ廉モ有之候ヘトモ矢張該内訓ニ基キ刑法第五十二條ニ從ヒ逃走棒鎖等ノ日數ヲ除キ最前受刑ノ日（明治四年七月廿一日ニ溯リ已ニ役過セシ日數四年三百十九日（自明治四年七月廿一日至仝六年二月十八日數一年二百十三日自仝六年十二月十七日至仝十年四月一日數三年百六日合セテ本文ノ如シ）ヲ徵役十年ノ内ヨリ扣除シ刑期ヲ計算致可然哉

指令　同年十一月二十日

伺ノ趣明治十年四月二日卽チ懲役終身ノ宣告アリタル日ヨリ刑期ヲ起算スル儀ト心得ヘシ

第四節　假出獄

○舊刑法受刑期限中新法實施後重輕罪ヲ犯セシモノ假出獄

宮城縣伺　明治十六年八月廿三日付

刑法第五十七條ニ曰刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サストアリ就テハ舊法ニ處セラレ該刑期中新法實施後ニ至リ重罪輕罪ヲ犯セシ者モ亦假出獄ヲ許ルサヽル儀ニ可有之哉將タ許スヿヲ得ヘキ哉若シ是レヲ許スモノトセハ其刑期四分ノ三計算方ノ如キハ舊刑殘日數ト新刑ニ處セラレタル日數トヲ合算スル儀ト相心得可然哉此段相伺候也

指令　同年九月四日付

伺之趣前段見込ノ通

第五節　親屬例

○戸籍ニ登記セサル犯罪處分

水戸輕罪裁判所檢事請訓　明治十六年十月十八日

婚姻又ハ養子養女ノ取組整ヒタル上ハ明治八年第二百九號御布告ニ基キ速ニ戸籍ニ登記スヘキハ勿論ナレヒ遠土僻隅ノ愚民ニ至テハ其手續キヲ盡サヽル者往々有之然ル内其妻ト稱スル者姦罪ヲ犯シ或ハ養子女ナル者祖父母父母ト稱スル者ヲ毆打ナシタル等ノ節ハ何レモ戸籍上登記ナキヲ以テ姦罪ハ夫ト稱スル者ヨリ告訴スルモ處女ト見做シ不問ニ措キ毆打罪等ハ凡人ヲ以テ論スル義ニ可有之哉將タ假令戸籍ニ登記セサルモ親族近隣ノ者モ夫婦若クハ養父子ト認メルニ於テハ明治十年本省丁第四十六號御達ニ基キ處分可然哉

内訓　同年十月廿六日

養子女戸籍登記以前犯罪處分ノ義請訓ノ趣ハ後段見解ノ通此旨及内訓候也

第六節　官吏ノ職務ヲ妨害スル罪

○官吏ノ職務ニ對シ文書ヲ送致シテ侮辱

山形始審裁判所酒田支廳檢事伺　明治十七年三月十二日

官吏ノ職務ニ對シ文書ヲ直チニ其官吏ニ送致シ以テ侮辱シタル者法律ニ明文無之候處右ハ筆記セシ言語ナリトシ又直接之ヲ送致シタルヲ以テ目前ニ於テ爲セルト同一ナリトスル時ハ刑法第百四十一條初項ヲ以テ論ス可シト雖モ已ニ紙上ニ移シタル上ハ即文書ノ名ヲ命ス可クシテ之ヲ言語ト云フ可カラス又假令直接之ヲ送致ス

ルモ其身全ク外ニ在レハ之ヲ目前ノ所爲ト云フ可カラサレハ該項ニ依ル可キモノニ非サル可シ然ルニ同條ノ次項ナル其目前ニ非スト雖ヒ刊行ノ文書ヲ以テ侮辱スト云ヘル其刊行ノ文字ハ即チ印刷發行ノ二事ニシテ必ス印刷シテ以テ世上ニ公行スルモノヲ云フカ如クナリト雖ヒ文書ハ必スシモ印刷ヲ要セス手書シタルモノモ亦之ニ含蓄セハ又必スシモ廣ク世上ニ發行スルモノノミナラス直ニ其官吏ニ送致スル者モ亦含蓄シタルモノニシテ該項ニ依リ論ス可キモノニ候哉又ハ假令其官吏ニ送致スルモ唯双方間ニ在ルノミニシテ他人ニ漏泄セサルモノナレハ該項ニ含蓄セス到底刑法第二條ニ依リ論スルヿヲ得サル儀ニ候哉

指令　同年三月廿八日

伺ノ趣刑法第百四十一條第一項ニ依リ處分スル儀ト心得ヘシ

第七節　私印私書ヲ偽造スル罪

○子孫父祖ニ對スル偽証書

岡山始審裁判所檢事請訓　明治十七年四月十日

刑法第二編第四章第四節中別ニ親屬ニ係ル不論罪ノ特例無之ニ付假令其祖父ヲ欺瞞シテ金圓ヲ騙取センカ爲ノ目的ノミニ出タル偽

印偽証書ノ所爲ト雖ヒ猶且之ヲ罰スヘキノ律意ナルヤ抑偽印偽証書ノ所爲タルヤ窃取詐取ノ如キ特ニ父子間ノミニ直接スルノ類ニ異ナリ之ヲ他人ニ公示シ之ヲ訟廷ニ提出スレハ則社會ニ公使シタルモノナルヲ以テ即チ社會ノ信用ヲ害スルモノト謂ハサルヘカラス且父祖モ亦社會ノ一部ニ屬スルヲ以テ假令父祖ノミノ信用ヲ害スルニ於テモ亦以テ社會ノ信用ヲ害スルヿノト謂ハサルヘカラサルノ理アリ況ヤ之ヲ公衆ニ公使スルヲヤ故ニ本案一ハ信用ヲ害スル罪ニシテ一ハ財産ニ對スルノ罪ナルニ付其所爲自カラ二罪ニ判カレ彼此立法ノ主義相異ナルヲ以テ詐欺取財ノ罪ハ之ヲ問ハサルモ偽印偽證書ノ罪ハ猶之ヲ罰スヘキ所以ナル乎

或ハ本節ハ偽造官印ノ條ニ異ナリ其起因タル偽造ノミヲ以テハ之ヲ罰セス必其結果タル使用行使ヲ合スルニアラサレハ罰トナラサルモノニシテ而シテ其結果タル使用行使ハ即チ刑法之ヲ問ハサルノ詐欺取財ニ係ルヲ以テ元來其罪ノ成リ立ツヘキ因果ノ結合セサルモノニ付父祖ノ金圓ヲ騙取センカ爲ノ目的ノミニ出タル偽印偽證書ニシテ敢テ他人ヲ害スルニアラサル以上ハ之ヲ罰スルノ限ニアラサル乎本案疑義ノ事實ハ左ノ如シ

茲ニ甲乙丙ノ三人アリ乙ハ甲ノ養子ニシテ丙ハ其朋友ナリ乙放蕩ニシテ品行修ラス自カラ養家ノ意ニ適セス早晩必離絶セラルヘキヲ知リ之カ準備ヲナサントヽ欲シ竊ニ甲ノ印影ヲ盗用シ以テ甲カ丙ヨリ金若干圓借用シタル証書ヲ偽造シ丙ニ其情ヲ告ケ事成ルノ後ハ該金ノ幾分ヲ與フヘキヲ約シ丙ナシテ之ヲ出訴セシメタリ於是乙其引合人トシテ出廷シ該証書ハ甲ノ嘱ニ因テ之ヲ代書シ其金圓ハ卽チ甲ノ借用シタルニ相違ナキ旨證狀シ遂ニ甲ノ敗訴トナリタリ甲其裁判ニ服セス未タ執行セサルニ際シ會其罪發覺ニ及ヒ甲亦之ヲ告訴シタリ如此キ場合ニ於テ乙ヲ處スル如何ノ疑團ニ係ルモノナリ

右疑義仰内訓候也

内訓　同年五月十四日

子孫父祖ノ借用証書ヲ偽造シ金圓ヲ詐取セントシタル者處分ノ儀ニ付請訓ノ趣右ハ第二項見解ノ通此旨及内訓候也

〇公務ニ關セサル詐偽ノ疾病証書

山形始審裁判所酒田支廳檢事伺　明治十七年六月廿八日

戸主ヲ癡スルカタメ又ハ被告人召喚ノ際或ハ保釋中呼出ノ節又ハ其他ノ事ニ因リ醫師嘱託ヲ受ケ詐偽ノ疾病証書ヲ造リタル者ハ公務ヲ免ル可キタメノ一元素ナキカ故ニ刑法第二百十五條ノ犯罪ニ非サル可シ然レトモ不應爲ノ事タルハ勿論爲ニ害ヲ生スルモノナレハ刑法第二百十條二項ノ犯罪ニシテ該條ニ依リ處スヘキモノニ候哉

内訓　同年七月三十日

別紙伺ノ趣ハ後段見解ノ通此旨及内訓候也

第八節　身分ヲ詐稱スル罪

〇新法實施以前属籍氏名ヲ詐稱シタル娼妓營業鑑札

根室輕罪裁判所檢事請訓　明治十六年十月六日付

茲ニ新法實施以前ニ在テ属籍氏名ヲ詐稱シ娼妓營業免狀鑑札ヲ受其鑑札ハ一旦上納シタルモ又其前詐稱セシ属籍氏名ヲ名乘リ同シク又新法實施以前娼妓營業免狀鑑札ヲ受ケ其營業中卽チ新法實施後ニ至リ該鑑札面ノ属籍氏名字形等ノ既ニ消滅ニ歸セントヽ慮ハカリ再度其筋ヘ書替改貰ヒ受ケタル後チ該属籍氏名等ハ全ク是迄詐稱シ居タリト自首スル被告事件ノ如キハ一寸繼續犯罪ノ如シト雖モ之ヲ熟考スルニ於テハ固ト其属籍氏名ヲ詐稱シ其他詐欺ノ所爲ヲ以テ免狀鑑札ヲ受クルノ罪ノ如キハ既ニ其鑑札ヲ受タルトキ其罪

〇私ニ醫業ヲ爲ス罪

ノ成立タル者ニシテ何ソ新法實施後ニ及ホシテ娼妓營業シタルト否トニ關スルノ理アランヤ又其新法實施ノ以前ニ在テ受タル免狀鑑札面ノ文字等新法實施ノ後ニ至リ殆ト其消滅ニ歸サンコトヲ慮カリ其筋ヘ書替改付受ケタル所爲ノ如キモ固ト惡意ヲ以テ更ニ屬籍氏名ヲ詐稱シ書替改メヲ爲シタル者ニアラサレハ敢テ新法ヲ以テ論ス可キノ限ニ非ストセン歟果メ然ラハ則繼續犯罪ニ非スメ刑法第三條ニ依リ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從フテ處斷可然ト考量スルモ如此犯罪ハ繼續犯罪ナルヲ以テ新法ノミニテ罰ス可キモノナリトノ論アリ疑義ヲ生シ候間相伺候條何分ノ御訓示相成度此段御內訓奉仰候也

內訓　同年十一月九日

請訓ノ趣ハ前段見解ノ通

但新法實施後詐稱ノ氏名ヲ以テ鑑札書替願出タル齎ハ刑法第二百三十一條ニ依リ處分スヘシ

第九節　私ニ醫業ヲ爲ス罪

○獸醫ハ醫業ニ包含セス

宮城縣請訓　明治十七年八月廿日

刑法第二百五拾六條ニ官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者云々トアリ該醫業トアルハ獸醫ヲモ包含セシヤ將タ包含セサル儀ト心得可然哉哪疑議ヲ生シ候條至急何分ノ御訓示有之度候也

內訓　同年九月三日

別紙請訓之趣刑法第二百五十六條ハ獸醫ヲ包含セサル儀ト可心得此旨及內訓候也

第十節　官吏人民ニ對スル罪

○官吏公務ノ餘暇身躰財產ヲ妨害スル犯人アル報告

根室輕罪裁判所檢事請訓　明治十六年十月五日付

刑法第二百七十七條身體財產ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ豫審判事檢事警察官吏其報告ヲ受ケテ速ニ保護ノ處分ヲ爲サヽル者ハ云々トアリ右ハ公務ノ餘暇則登樓ノ如キ場合ト雖ヒ該報告ヲ受ケタル以上ハ無論職權ヲ以テ其保護ノ處分ヲ爲ス可キモノト心得可然哉將タ公務ノ餘暇ナルヲ以テ治罪法第百五條ニ依テ通常凡人ノ資格ヲ以テ其處分ヲ爲ス可キ歟

第二條右第二百七十七條ニハ治罪法第六十條警視警部區長郡長治安判事警部ノ在ラサル地ノ戶長等モ該條ヘ含蓄シ居ル無論ノ儀ト

心得可然哉

内訓　同年十月三十日

請訓ノ趣左ノ通心得ヘシ

第一條　職務外ノ時間ト雖モ相當ノ處分ヲ爲スヿヲ得但之ヲ爲サヽルモ刑法ノ問フ所ニ非ス

二條　見解ノ通

○四人放免時日誤算

青森縣伺　明治十六年六月廿八日付

刑法第二百七十九條ニ司獄官吏程式規則ヲ遵守セスシテ囚人ヲ出獄セシムヘキ時ニ至リ之ヲ放免セサル者ハ云々トアルハ卽チ故意擅行ニ出ツルモノニ限ルハ勿論ナリト雖若シ故意擅行ニ非スシテ放免スヘク時日ヲ誤算スル者ハ本屬長官ニ於テ懲戒例ニ據リ處分スルニ止マリ刑法ニ於テ論スルノ限リニアラサル儀ト心得可然哉

此段相伺候也

指令　同年七月十三日

伺之通

第十一節　毆打創傷ノ罪

○罪ヲ免カルヽ爲メ人ヲ傷シ死ニ致シタル者處分

大分輕罪裁判所撿事請訓　明治十六年十一月五日付

茲ニ庖丁ヲ携帶シ人ノ邸内ニ設ケアル米搗水車場ヘ忍入リ米ヲ窃取セントスル際看守者ニ覺知セラレ看守者ヨリ捕リ押ヘラレタルニ依リ免カルヽ爲メ携帶シ居ル庖丁ヲ以テ看守者ノ兩手ニ疵ヲ負ハセ終ニ死ニ致シタル者アリ右ハ故殺スルノ意アツテ傷ヲ負ハセタルニ非ス捕リ押ヘラレタル故免カルヽ爲メ傷ヲ負ハセタリト陳述スルモ之ヲ證明スル能ハサル以上ハ故殺シタル者トシ刑法第二百九十六條ニ問フヘキモノナルヤ將タ同法第三百三條ニ問フヘキモノナルヤ此段仰御内訓候也

内訓　同年十一月五日

犯罪ヲ免カルヽ爲メ人ヲ傷シ死ニ致シタル者處分ノ件請訓ノ趣右ハ故殺ノ証憑ハ原告官ヨリ之ヲ擧示セサル可カラス若シ其証憑ナキ片ハ刑法第三百三條ニ依リ處分ス可キ者トス此旨及内訓候也

第十二節　幼者ヲ略取誘拐スル罪

○二十歳以上ニシテ不腦力者略取誘拐

熊本縣伺　明治十六年七月九日付

二十歳以下ノ者ヲ略取誘拐シタル者處分方ハ刑法第三百四十一條以下ニ明瞭ナリト雖モ二十歳以上ノ者ヲ略取誘拐シタル者ヲ罰スルノ明文ナシ右ハ已ニ知力備ハルヲ以テ欺罔又ハ略取セラルヽモ被害者ノ自爲ト同視シテ不問ニ置カルヽ所以ナラン歟然リト雖二十歳以上ニシテ或ハ不腦力ニシテ欺罔以テ誘拐セラルヽナキ能ハス譬ヘハ白痴ノ者ヲ誘拐シテ力役又ハ賣淫等ノ爲ニ他人ヘ賣ルノ類如斯ハ其歳二十歳以上ト雖不腦力ノ點ヨリ見ルトキハ長幼ノ別ヲ以テ論シ得サル者ノ如シト雖モ其年齢明記有之上ハ刑法第三百四十一條以下ノ各條ニ比擬處分スルヲ得サル儀ト心得可然哉聊疑議ヲ生シ候條至急何分ノ御指令相成度此段相伺候也

指令　同年七月廿四日

伺之趣二十歳以上ノ者ニ付テハ刑法ノ問フ所ニ非ス

第十三節　竊盜ノ罪

○土石ヲ竊取シタル者處分方

愛媛縣伺　明治十六年九月三日付

道路堤防河川或ハ田圃山林等ノ土石ヲ堀取リ（刑法第百六十二條第四百十一條第四百十二條第四百十九條ノ如キ甚タシキニ至ラサルモノ）他ニ賣却シ利ヲ圖リタル者アリ之ヲ法律ニ照ストキハ刑法第三百六十六條人ノ處有物ヲ竊取シタル者ヲ以テ論スヘキ乎果シテ然ラハ第三百七十二條及第三百七十三條ノ田野又ハ山林ニ於テ產物ヲ竊取シタル者ト權衡其當ヲ得サルカ如シ如何トナレハ一ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニシテ一ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ナリ產物ヲ竊取スルモノハ輕キニ處セラレ土石ヲ竊取スルモノハ重キニ處セラレ其輕重ヲ失スレハナリ若シ又之ヲ第三百七十二條第三百七十三條ニ該ルモノトナス乎其明文ナキヲ如何セン然リト雖トモ之ヲ不問ニ付スヽキハ取締ノ道相立タサルハ今更言ヲ俟タサル儀ニ有之依テ右田圃山林ハ第三百七十二條第三百七十三條ニ包含シタル者ト解釋シ道路堤防河川ハ本縣ニ於テ違警罪ニ相加ヘ可然哉將タ總テ違警罪ニ差加フヘキ儀ニ可有之哉疑岐相生候ニ付此段相伺候至急何分ノ御指令相成度候也

指令　同年九月廿二日

伺ノ趣盜情ニ出タル者ハ第三百六十六條產物タル可キ土石ハ第三百七十三條ニ依リ處分スヘキモ其所爲些少ニシテ盜情ニ出テサル者ハ違警罪目ニ加フルモ妨ケナシ

第十四節　强盜ノ罪

○強盜共犯者ヲ傷シタル處分方

神戸始審裁判所檢事請訓　明治十六年十二月廿日付

茲ニ甲乙丙者共謀シテ丁者ノ家ニ侵入シ脅迫シテ財ヲ奪ヒ去ラントスルニ際シ追捕者ト誤認シ甲者丙者ヲ傷シタリ而シテ斯ク人ヲ傷スルノ原因ヲ探究スルニ若シ追捕スルモノアル時ハ殺死セントスルヤ既ニ犯前互ニ共謀シタルモノナリ

此場合ニ於テハ甲乙丙者共ニ强盜人ヲ傷スルモノトシ論ス可キヤ又ハ甲乙者ノミ强盜人ヲ傷スルノ共犯トシ負傷シタル丙者ハ單ニ强盜罪ヲ以テ論シ可然哉又ハ共犯ナルモノハ合體一人ト見做スヲ以テ單ニ自己ノ身体ニ傷ケ候モノト同一ナルヲ以テ甲乙丙者共單ニ强盜罪ノミ論シ可然哉處分上聊疑義ヲ生シ候間仰內訓候條至急何分ノ御指揮有之度候也

內訓　十七年一月八日

請訓ノ趣中見段解ノ通此旨及內訓候也

第十五節　家資分散ニ關スル罪

○身代限ニ際シ財產藏匿脫漏

長崎始審裁判所平戸支廳檢事請訓　明治十七年二月廿五日

茲ニ身代限ニ際シ財產ヲ藏匿脫漏シ而シテ其所爲告訴ニ罹リ孫審中ナル處相當ノ手續ヲ經テ其身代限ヲ取消ス者アリ斯ノ如キハ財產取調ノ際一時之ヲ藏匿脫漏スト雖既ニ其負債ヲ悉皆辨償シ毫モ債主ニ損害ヲ與ヘスシテ身代限ヲ取消シタル以上ハ之ヲ家資分產ト謂フヘカラス隱テ藏匿脫漏ノ結果ナキ者ナルヲ以テ刑法第三百八十八條ノ問フ處ニ非サル乎將タ一旦藏匿脫漏セシ以上ハ假令家資分產ノ取消ヲ爲セシト雖也該條ニ照依シ問罪スヘキ乎

內訓　同年三月廿四日

身代限ニ際シ一時財產ヲ藏匿脫漏シタル者處分ノ件請訓ノ趣右ハ掲示中ニ負債償却シ身代限ヲ取消シタル時ハ刑法第三百八十八條ヲ適用スル限ニ在ラス此旨及內訓候也

第三十四章　刑法附則

第一節　監視

○刑名宣告謄本

福岡縣伺　明治十六年十二月十一日

刑法附則第二十三條犯人ヲ警察署ニ護送スルトキハ刑名宣告書ノ謄本ヲ附スヘシトアルヲ以テ是迄裁判所ヨリ送附シタル刑名宣告書

ノ謄本ハ監獄署ニ止メ置キ之ヲ謄寫シテ警察署ヘ差回シ來リ候處監視ハ監獄署ニ於テ謄寫シタル宣告書ヲ以執行スルハ穩當ナラサル樣思考シ少シク疑惑ヲ生シ相伺候條至急何分ノ御指揮候也

指令　同年十二月廿八日

伺ノ趣監視執行ハ裁判所ヨリ送致シタル刑名宣告書ノ謄本ヲ以テ之ヲ爲スヘシ但監獄署ニ於テハ之ヲ謄寫シテ止メ置ク儀ト心得ヘシ

茨城縣伺　明治十七年三月五日

監視ニ付セラレタル犯人ヲ警察署ニ護送スル時當縣ニ於テハ是迄裁判所ヨリ送致ヲ受ケタル刑名宣告書ノ謄本ハ監獄署ニ止メ置キ同署書記ヲシテ之ヲ復寫セシメ其謄本ヲ以テ執行致シ來候處昨十六年十二月廿八日福岡縣ヘ御指令ニ據レハ監視ノ執行ハ裁判所ヨリ送致シタル刑名宣告書ノ謄本ヲ以テ之ヲ爲スヘシトアレハ其犯ノ被告人數名ニシテ其宣告書一通ナル時ハ各其住居ノ地ヲ異ニシ又刑期ノ長短アリテ之カ執行ヲ爲スニ際シ宣告書數通裁判所ヨリ送致ヲ受ケサルヲ得サル場合アルヤ之ナラス主刑ノ終ルマテ數年間監獄署ニ宣告書ノ謄本ヲ保存スルニ散亂ノ患ナカラシメンカ爲メ簿冊ニ編纂ヲナサヽルヲ得サルニ依リ裁判所ヨリ送致セラレタル宣告書ノ謄本ヲ警察署ニ送致スルハ太タ不便ニシテ裁判所ト監獄署ニ於テハ頗ル手數ヲ煩シ實際差支ノ筋不尠ヲ以テ當縣ニ於テハ從前ノ如ク監獄署書記ヲシテ謄寫セシメ其謄本ニハ書記署名押捺シ而シテ官署ノ印ヲ用ヒ之ヲ以テ監視ノ執行ヲ爲サシムルモ不苦候哉

指令　同年三月廿五日

伺ノ趣其犯人アル場合ニ限リ見込ノ通但其旨ヲ送致ス可キ謄本ニ記載ス可シ

〇警察署ヘ往復一泊以上ヲ要スル檢印

長崎控訴裁判所檢事上申　明治十七年二月廿二日付

監視規則中一月兩度所轄警察署ニ出頭セシムルヿアリ邊地人民ノ如キハ所轄警察署ヲ距ル或ハ十數里ノ遠キニ及ヒ山ヲ隣エ海ヲ航シ日數三四日ヲ要セサレハ往復スル能ハサルモノアリ爲メニ犯則スルモノ比々有之候故ニ自今警察署ナキ地ニ於テハ監視表ノ檢印ヲ戶長役場ニ受クルノ便ヲ與フルトハ獨リ犯則者ヲ減スルノミナラス實地取締モ大ニ相立可申依テ本規則御改正相成度此段及上申候也

内訓　同年三月十八日

監視規則中改正ノ儀ニ付上申ノ概檢印ヲ受クヘキ警察署往復一泊以上ヲ要スル地ニアル場合ニ於テハ郡役所又ハ戸長役場ニ出頭シ檢印ヲ受クルモ妨ケナキ儀ト心得ヘシ

三重縣伺　明治十七年三月三十一日

交番所ニ於テ監視事務取扱ノ儀ニ付別紙寫第一條ノ通相伺朱書之通御指令有之候ニ付不得止警察署ノミニテ檢印爲致居候處長崎裁判所檢事ヨリ監視規則中ノ警察署ヲ司法警察官ト改正ノ上申ニ對シ檢印ヲ受クヘキ警察署往復一泊以上ヲ要スル地ニアル場合ニ於テハ郡役所又ハ戸長役場ニ出頭シ檢印ヲ受クルモ妨ケナキ旨御内訓相成候趣本年三月二十一日附第一四四一號ヲ以テ御省第四局副長ノ移牒ニ依リ致承知候右ハ郡戸長ハ司法警察官ト謂フノ故ヲ以テ斯ク御内訓相成候義ト相考ヘ候果シテ然ラハ當縣交番所ノ如キモ常ニ警部代理ヲ命シタル巡査即チ司法警察官ノ取扱フ巡査有之且實際上ノ景況前伺ニ具載スル通ニ付右御内訓郡役所戸長役場同樣交番所於テモ檢印爲致度此段重テ相伺候條何分之御指令有之度候也

指令　同年四月廿一日

刑法附則第廿七條ノ場合ニテ所轄警察署マテノ距離往復一泊以上ヲ要スル時ハ伺ノ通

別紙

第一條　刑法附則第二章中ニ散見スル警察署トハ警察署及其分署ヲ指稱シタルモノトハ存候得共當縣ノ如キハ該署部内延長十餘里ニ渉ルノ箇所往々有之彼監者ハ處刑人ナリトハ乍申毎月警察署ヘ往復スル困却不尠殊ニ其貧窶者ノ如キニ至テハ右往復スル時間ハ家業ヲ休止スルヲ以テ生計ニ差閊候而已ナラス又路費モ無之遂ニ不參スル者可有之然ルニ該署部内ニハ數箇ノ巡査交番所ヲ配置シ必ラス舊一等巡査ヲ派遣シテ警部代理トナシ之ニ巡査數名ヲ附屬セシムルヲ以テ名ハ交番所ナリト雖モ其實ハ隣府縣ノ分署ニ異ナラス故ヲ以テ便宜ニ從ヒ右交番所ニテ前顯警察署同樣監視ノ事務爲取扱候モ妨ケ無之哉

第二條　略ス

右相伺候條何分ノ御指令相成度候也

明治十五年八月廿三日　　三重縣令岩村定高

司法卿大木喬任殿

朱書

伺ノ趣左ノ通リ心得ヘシ

第一條　交番所ニ於テ監視ノ事務ヲ取扱ハシムルヲ得ス

第二條　略ス

滋賀縣伺　明治十六年九月廿五日

通常監視ニ付セラレタルモノニシテ他管下ヘ旅行且ツ滞在スル節取締方ノ儀ハ刑法附則第二章中明文モアリ且本縣ヨリ伺定置候次第モ有之候得共住居地管内旅行ニ就テハ別ニ取締方法無之然ルニ力役等ヲ以テ糊口ヲ爲スモノヽ如キハ其業体ノ都合ニ依リ住居地町村最寄ニ於テ其職業ニ從事スルヿヲ得ス數里外ナル他ノ警察署下ヘ數十日出稼スルモノアリ右等ノ者ニ至テハ毎月兩度居住地ノ所轄警察署ヘ謹慎ヲ表スル爲メ出頭スルハ時日ヲ費シ糊口上ニ困難スル趣ヲ以テ出稼地ノ所轄警察署又ハ分署ヘ出頭謹慎ヲ表シ度旨出願スルモノアリ右ハ事實憫然ノ至リニ付之ヲ許可シ其旨出稼先キノ所轄警察署又ハ分署ヘ通牒監視致シ候モ御差支之筋無之歟哉

相伺候也

内務省指令　十七年一月九日

伺之趣事情無據者ニ限リ許可シ不苦儀ト可心得事

○途中發病等ノ爲メ旅費欠乏救護ヲ乞ヒタルヰ費用辨償

新潟縣伺　明治十七年二月一日

監視ニ付セラレタル者刑法附則第二十五條ノ場合ニ於テ途中發病等ノ爲メ淹滯中旅費欠乏シ其地ノ警察署ニ救護ヲ乞フ者ハ刑法附則第三十二條ニ準據シ滞在地監獄署ノ別房ニ留置スヘキ旨愛媛縣ヨリ司法卿ヘ伺出タル指令ニ(十六年官報第百四號)有之候處監獄署ニ遠隔ノ警察署ヘ右等ノ救護ヲ乞フ時ニ當リ監獄署ヘ押送ニ關スル費用ハ本籍ヨリ追償スヘキ者ト存候得共赤貧ニシテ償還スルノ道無之節ハ何レノ費目ヨリ可致支辨候哉

内務省指令　同年四月九日

伺ノ趣自家親戚引取人等總テ資力無之節ハ犯人本籍ノ地方税教育費中ヨリ辨償セシムヘシ

○別房ニ留置者監視執行

長野縣伺　明治十六年七月四日付

刑法附則第二章第三拾二條ニ據リ監獄中ノ別房ニ留置シタル監視人ハ同章第二十六條第二十七條等ニ據リ警察署ヨリ監視票ヲ下附シ總テ監視執行上ニ就テハ警察署ノ管理ニ屬セシムル儀ニ候哉又ハ常ニ司獄官吏ニ於テ監督致シ候得者其儀ヲ爲スニ及ハサルモノニ候哉若シ監獄中ノ別房ニ留置シ唯ニ司獄官吏ニ於テ之カ監督ヲ爲シ警察署ノ管理ニ屬セサル場合ニ於テ逃走シタル監視人ハ監視規則違犯ノ者ト認メ可然哉右相伺候也

指令　同年七月廿四日付

伺之趣在監中ハ司獄官吏ニ於テ監督ス可キ者トス但逃走シタル時ハ監視規則違犯者トシテ罰スル儀ト心得可シ

○在籍地警察署ヘ送致セラレタル監視人

京都府伺　明治十六年九月十三日付

甲地在籍ノ者乙地（他管轄ニ於テ云ヲ）ニ於テ罪ヲ犯シ主刑滿期ノ上本人ノ申立ニ寄リ在籍地ニ於テ監視執行ノ爲メ乙地警察署ヨリ甲地警察署ヘ本犯送致セシ時甲地警察署ハ監視執行ノ爲メ其住所ヲ調フルニ本犯ハ丙某附籍ナリシカ其丙某ハ失踪シ唯戸籍ノミ存在スルモ本犯住居スヘキ家屋及ヒ引取人モ無之亦赤貧ニシテ別ニ住所ヲ定ムルヿ能ハス如此場合ニ於テハ在籍則甲地ノ監獄署ヘ引渡仝署ニ於テ刑法附則第三十二條ノ處分ヲ可爲儀ト相心得可然哉將乙地則主刑執行地ノ監獄署ヘ送戻シ同署ニ於テ同條ノ處分ヲ爲スヘキ儀ニ可有之哉目下差掛リ候事件有之候間至急何分ノ御指揮有之度此段相伺候也

指令　同年九月廿六日

伺ノ趣前段見解ノ通

○途中發病等ニテ旅費欠乏ノ者ヘ處分

愛媛縣伺　明治十六年十月十一日付

茲ニ主刑滿期后監視ニ付セラルヽ者アリ假令ハ甲警察署ニ於テ旅券ヲ附與シ丙警察署所轄即チ犯人居住地ナルヲ以テ歸路ノ際不計病ニ罹リ或ハ正當ノ事故アリ又ハ途次車ニ乘シ又ハ宿料等ニ過分ノ金ヲ要シタルトテ旅費ニ欠乏スルノ類ナリ乙警察署所轄内ニテ滯在ノ爲メ旅金ヲ消費シ進退如何トモスル能ハス終ニ乙署ニ出テ救助ヲ請フヿアルトキハ刑法附則第三十二條ニ準據シ監獄ノ別房ニ留置スルノ處分ヲ爲スヘキモノト思考候得共抑該條ニ於ケル單ニ監獄署ヨリ送致ヲ受タル節其居住地ヘ歸着スル資金ナキ場合ニ於テ處分スルノ法則ニ有之候得バ聊カ疑義ニ渉リ候條如何取扱ヒ可然哉

若シ果シテ前條ノ如ク附則第三十二條ニ準據スヘキモノトスルトキハ甲警察署ヨリ丙警察署則チ居住地ヘ送付セシ書類取扱ノ手續ハ如何取計ヒ可然哉

前條ノ場合ニ於テ若シ監獄署無之地ナレハ附則第三十二條ニ準據スルヲ得ス右ハ如何處分シ可然哉

右ハ差掛リタル儀モ有之候條至急御指揮相成度此段相伺候也

指令　同年十月廿九日付

伺之趣刑法附則第三十二條ニ準據シテ其滯在地監獄ノ別房ニ留置シ其書類ハ居住地ノ警察署ニ其事由ヲ報知シテ遞送ヲ求ム可ク若シ其滯在地ニ監獄署アラサル時ハ最近ノ監獄署ニ送致シテ同斷ノ手續ヲ爲スヘキ者トス

第三十五章　治罪法（令訓）

第一節　總則

○姦罪ニ對スル棄權

高知始審裁判所檢事請訓　明治十六年十一月一日付

茲ニ一ノ犯姦既ニ處斷ヲ經當時上告中ニ係レル者ニ對シ姦婦ノ本夫ヨリ其姦夫ニ對スル告訴ニ棄權致度旨願出タルモノアリ右ハ裁判言渡以前ト雖ヒ言渡以後ニ係ルモノハ裁判未確定ト雖ヒ無論公訴ヲ消滅スルノ力ナク又假令言渡以前ト雖モ所謂犯姦ノ如キニ至テハ卽チ二人一罪ヲ爲シタルモノニテ一半ヲ問ヒ一半ヲ措クノ理ナキヲ以テ姦夫一人ニ限リタル願下ハ棄權ノ効ナキモノト相心得候得共其分界上ニ於テ聊疑義ヲ生シ候ニ付何分ノ御指揮相成度此段仰御內訓候也

內訓　同年十一月十五日

請訓之趣姦夫ニ對シ棄權ヲ爲シタルトキハ姦婦ニ對スル告訴モ從テ消滅ス但裁判言渡後ハ棄權スルモ其効ナキ者トス此旨及內訓候也

○舊法ノ犯罪公訴私訴期滿免除ノ期限起算

神戸始審裁判所檢事請訓　明治十六年十一月六日付

第一條

期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算スト雖モ新法實施以前ノ犯罪ニ付テハ明治十四年十二月廿一日迄ハ其期限ヲ中斷シタルト同一ノモノトス但前後通算ノ法ハ治罪法第十四條第二項但書ノ通リタルヘシ云々先般上田始審裁判所ノ伺ニ對シ御指令相成且一般ヘモ御達相成候處右御指令ノ趣意ハ例ヘハ明治十四年十二月廿一日迄

ニ既ニ滿六年ヲ經過シタルモノト雖ドモ新法御實施ノ日ヨリ滿三ケ年間ハ之ヲ罰スルヿヲ得ルノ義ニ可有之哉又ハ其犯罪ノ日ヨリ新法御實施ノ日迄既ニ滿六年ノ期限ヲ經過シタルモノハ公訴ヲ免カレ候義ニ可有之哉

第二條

新法御實施前ノ犯罪公訴期滿免除ノ期限起算方ノ儀前條初項ノ解釋ノ如キニ候ハヽ被害者ノ不利稍々薄シト雖ドモ若シ後項ノ如キニ候ハヽ被害者ニ於テ俄然一大不幸ヲ被ルノ恐レ不少ト考量致シ候何トナレハ舊法施行ノ際ニ在テハ假令數年ヲ經過シ舊惡減免ニ依リ罰ヲ免カルヽモノト雖ドモ被害者其犯罪ノ爲メ損害ヲ受ケタル事實ヲ告訴シ其証充分ニシテ且贓品賊手ニアルトキハ法官追徵シテ被害者ニ還付スルノ成例ニ有之候處新法御實施公訴私訴期滿免除ノ制ヲ被設候カ爲メ舊法ノ際犯罪ニ因テ害ヲ被リタル者其物件假令賊手ニアル顯然タルモ犯罪ヲ原由トシテ之ヲ告訴スルヲ得ス何トナレハ治罪法第十二條ニ依レハ公訴私訴共ニ期滿免除ノ期ヲ同シフスレハナリ抑モ贓物返還ノ訴ノ如キハ刑事ニ附帶スルモ素民法之原則ニ從ヒ支配スヘキモノナレハ假令新法舊法ヨリ輕キヲ以テ舊犯罪ニ公訴期滿免除ヲ適用スルヲ得ルモ贓物返還ノ訴ニマテ新法ヲ適施スルハ法理上不可ナルノミナラス實際上大ニ被害者ノ不幸尠カラスト存候依テ新法御實施前ニ在テ犯罪ノ爲メ害ヲ受ケタル者ハ其贓品現存スルトキハ賊手ニアルト否トヲ問ハス（例セハ詐欺ノ手段ニ係リ奪取サレタル地所家作船舶ノ類）其証判然タルモノハ公訴ノ期滿免除ニ拘ハラス贓物追徵ノ處分總テ舊法ノ手續ニテ取扱候樣致シ度ト思考仕候

第三條

若シ前條ニ陳述セル如ク私訴期滿免除ニ付テハ新法御實施以前ノ被害事件ニ遡ラサル儀ニ有之候得ハ舊法贓物追徵處分ノ如ク刑事裁判所ニ於テ取扱候方頗ル便益ト被考候得共果シテ刑事裁判所ニ於テ處分シ可然哉

内訓　同年十一月十七日

請訓ノ趣左ノ通心得ヘシ

第一條　後段見解之通但舊惡減免例圖ニ照シ減免ニ係ル者ハ期滿免除ノ期限ヲ經過セスト雖ドモ仍ホ舊法ニ依リ減免ス

第二條第三條　舊法ノ舊惡減免ニ該ルヘキ場合ハ治罪法第三百六條ノ旨意ニ依リ私訴ノ裁判モ併テ刑事裁判所ニ於テ之ヲ爲スヿヲ得

ルモ若シ新法ノ期滿免除ニ該ルヘキ場合ニシテ本案ノ辨論終結前ニ在テ免訴スヘキ時ハ刑事裁判所ニ於テ其私訴ニ付テノ裁判ヲ爲スヿ可ラサルニ付民事原告人ハ更ニ民事裁判所ニ出訴セサル可カラス

○官吏告發

福岡縣伺　明治十六年九月廿七日付

官吏職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪アルヿヲ認知又ハ思慮シタルトキ相當ノ官吏ニ告發スヘキハ治罪法第九十六條ニ於テ命令アル儀ニ有之候然ルニ告發後若シ其被害人罪トナラサル場合其損害ノ償ヲ要ムルモ法律ノ命令ニヨリ職務ヲ以テ爲シタルモノナレハ其要償ノ義務ヲ有セス同法第十七條ニ準據スヘキモノト被存候得共同條ニハ檢察官又ハ司法警察官ト指定シ一般官吏ニ適用スルノ明文ト難認候條爲念一應相伺候也

指令　同年十月九日

伺ノ趣治罪法第十七條ニ掲載シタル官吏ト均シク要償ノ訴ヲ受ケサル儀ト心得ヘシ

○徵兵ニ關スル治罪手續

水戸輕罪裁判所土浦支廳檢事伺　明治十七年三月十五日

舊徵兵令第五十條ニ掲クル割符ヲ付與セラレ而シテ後入營ニ際シ逃走徵集ニ應セサル者アリ右ハ陸軍刑法第百七條ニ該ルヲ以テ軍衙ノ管轄タルヿ勿論ノ儀ト相心得可然哉官報第三號ニ載スル大阪府ヨリ陸軍省ヘ伺ニ來タ軍人トナラサル云々ト之アレ𪜈是ハ陸軍治罪法制定以前ニ係ル伺指令ニシテ其後陸軍治罪法御發令ニ付同法第二十一條ニ依リテ明瞭タル者ト存候得共權限上ニ關スル儀ニ付相伺候

指令　同年三月廿五日

伺之通

第二節　輕罪裁判所

○証據物品處分方

樺戸集治監伺　明治十六年十二月五日付

第一條　已決囚徒入監ノ節所持之物品ヲ情願ニ任セ司獄官吏ヨリ他ニ賣却シタル後餘罪發覺シ右物品ハ曩ニ犯罪ノ用ニ供シタルモノナルトキハ其公商公賣ニアラサルモノ之ヲ買取ルト雖𪜈沒收スルノ限ニ無之候哉

第二條　總テ証據物品裁判所ノ管轄地外ニアル時ハ其管轄裁判所ニ囑托シ送付ヲ求メ可然哉又其送付費用ハ何レノ裁判所ニテ支辨シ可然哉

第三條　前條送付シタル物品裁判廳ノ上還付ノ言渡ヲ爲シタル時其言渡ヲ受クル者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其所轄裁判所ヘ囑託シ還送致可然哉果メ然ラハ其運送費ハ何レノ裁判所ヨリ支辨ス可キ儀ニ候哉

右相伺候條至急御裁令相成度候也

指令　十七年一月十一日

第一條　見込ノ通

第二條　治罪法第六十一條ニ從ヒ司法警察官檢察官又ハ裁判官ニ囑托スルヿヲ得但送付費用ハ囑託ヲ受ケタル官署ニ於テ支辨スヘキモノトス

第三條　囑托ヲ爲ス迄ノ運送費ハ其官署ニ於テ支辨シ囑託ヲ爲シタル以後ハ運送費ハ囑託ヲ受ケタル官署ニ於テ支辨ス可シ

第三節　令狀

○令狀ニ書記署名

岐阜輕罪裁判所檢事請訓　明治十六年九月十八日付

本年第八號ヲ以テ豫審判事豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ内書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スル事ヲ得ト御布告有之ニ付書記ノ立會ナクシテ取調タル豫審事件ハ終結言渡書ノ如キハ無論書記ノ署名ヲ要セサル儀ト存候得共總テノ令狀ニハ治罪法第百三十條第二項ニ依リ書記ノ署名捺印ヲ要ス可キモノナルヤ疑義ヲ生シ候ニ付此段請訓候也

内訓　同年十月四日

別紙請訓ノ趣ハ令狀ハ勿論終結ノ言渡書ヲモ書記ノ連署ヲ要スヘキ者ト心得可シ此段及内訓候也

○拘留中ノ者期限經過

長野縣令請訓　明治十六年十二月四日

被告事件ニ付拘留狀ヲ以テ拘留中ノ者十日ヲ經過スルモ豫審判事ニ於テ收監狀ヲ不發又責付ヲモ不許依然打捨置キ候場合ニ於テハ司獄官吏ニ於テ被告人ヲ釋放スヘキ哉將タ發ス可キ令狀ヲ發セサル時治罪法第二百三十四條ノ規則ニ依リ被告人ニ於テ故障ヲ爲スヿヲ得ルニ止リ假令拘留狀期限ヨリ幾日經過スルモ依然拘束致置

ケヘキモノカルヤ疑義ヲ生シ候ニ付至急何分ノ御明示相成度此段及請訓候也

内訓　同年十二月廿日

別紙請訓ノ趣豫審判事ニ於テ收監狀ヲ發セス又責付ヲ爲サヽル時ハ司獄官吏ヨリ檢事又ハ豫審判事ニ期限經過ノ旨ヲ通知ス可シ此旨及内訓候也

○時間ニ關セス家宅捜索

京都府請訓　明治十六年八月廿日

第一條　治罪法第百三十三條ニ家宅ニ潛匿シタリト思料シタルトキ云々トアリ現ニ見認ル時ト雖モ客年第四十六號公布第五項ヲ除クノ外日出前日沒後ハ家宅捜索難致筋ニ有之候哉

第二條　仝第百八十二條第百八十二條ニ左ニ記載シタルモノハ証人ト爲ルヿヲ許サスト有之立會人トナルヿヲ得サルノ明文無之ニ付無能力者ヲ除クノ外立會人トナルヿヲ得ル儀ト心得可然哉

右及請訓候也

内訓　同年九月十一日

請訓ノ趣第一條令狀執行人ニ於テ現ニ目擊シタル場合若クハ戶主ノ承諾アルトキハ何時ニ拘ハラス家宅捜索ヲ爲スヿヲ得第二條ハ見解之通此旨及内訓候也

第四節　現行犯豫審

○既決囚訊問

京都始審裁判所檢事請訓　明治十六年十一月廿六日

第一條　司法警察官ニ於テ現行準現行犯罪人ヲ訊問スルニ其共犯者他ノ犯罪ニ依リ現ニ既決監ニ在リ訊問ヲ要スル場合ニ於テハ別ニ令狀ヲ要セス司法警察官ヨリ該囚護送方ヲ監獄署ヘ照會シ監獄署ニ於テハ右照會書ニ依リ護送スヘキ者ニ有之候哉將タ勾引狀ヲ發シ引致セシメ訊問ス可キ儀ニ可有之哉

第二條　司法警察官ニ於テ事實參考ノ爲メ既決囚ノ陳述ヲ聞カントスル時ハ該囚護送方監獄署ヘ照會ス可キモノニ有之候哉將タ報知書ヲ本人ヘ下付シタル上無論護送ス可キモノニ可有之哉

右仰内訓候也

内訓　同年十二月五日

第一條　後段見解ノ通

第二條　前段見解之通

第五節　豫審終結

○豫審終結處分

脅迫姦淫ノ如キ被害者ノ告訴ヲ待テ論スヘキ罪其告訴ニ因リ檢事ノ請求シタル事件ハ假令豫審中被害者ノ棄權アルモ豫審判事ハ通常ノ規則ニ從ヒ仍終結ノ處分ヲ爲スヘキ筋ト相心候得共意見反對ノ向モ有之ニ付此段相伺候也

但豫審判事ニ於テ未豫審ニ着手セサル內被害者ノ棄權アル場合ト雖ヒ檢事ノ請求ニ係ル事件ハ本文同樣處分スヘキ儀ト相心得可然ヤ添テ相伺候也

指令　同年九月廿九日

檢察官ノ起訴ヲ爲シタル後被害者棄權ヲ爲シタル時ハ豫審判事ニ於テ本案ノ取調ヲ要セス直チニ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キ者トス

○豫審終結言渡

大坂控訴裁判所檢事請訓　明治十六年十二月十日付

凡ソ公訴ノ豫審タルヤ每常極メテ難獻疑獄ニ係リ務メテ鄭重愼密ヲ旨トシ要スルニ被告事件ノ證據徵憑ヲ集取シ以テ充分ノ証憑アルヤ否ヲ判決スルノ一點ニ外ナラス然リ而シテ其集取シタル數個ノ證憑中必スヤ信否取捨一ナラスシテ之レカ判決ヲ與フルヤ精確ニ心證ノ資料ヲ擇ラヒ事實ノ眞據ヲ明カニシ判決ノ理由ヲ示シ以テ裁判ノ公平無偏ヲ保チ須ラク證憑曖昧ノ間ニ事實ヲ誤リ無辜ノ民ヲシテ不幸ノ害ニ陷ラシメサルヲ要ス可キ者タルヤ言ヲ俟タスシテ然ルニ當廳所轄ノ各裁判所ニ於テ間ニハ豫審ノ言渡書中證憑ノ事項ヲ明示セス單ニ證憑充分トノミ累記スル者有之是等ハ何ノ證憑ニ依テ充分ナリト判定シタルヤ漠然トシテ其必信ノ證據更ニ知了スルニ由ナク乃チ檢察官ニ於テハ犯罪ヲ證明スルノ資料ヲ擇フニ煩ハシク被告人ニ於テハ自護ノ反證ヲ照考スルノ便ヲ缺キ被告人ノ幸不幸ヲ來タス而已ナラス公衆ノ危險モ亦尠シトセス旁々不都合ヲ生スルヲ覺フ抑モ治罪法第二百二十八條末項ニ違警罪裁判所輕罪裁判所重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質摸樣證憑ノ充分ナルヿ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シト有之夫レ本條ノ精神タルヤ證憑ノ充分ナルヿヲ明示スル最モ緊要點ニシテ所謂證憑充分ナルヿヲ明示ストハ決シテ證憑充分トノミ單示スルノ謂ニ非ラスシテ必ス證憑ノ事項ヲ明確ニ臚列明示スルノ

謂ニ外ナラサルヘシ茲ニ當廳ノ所轄中ニ於テ過半ハ本議同感ノ者有之ト雖二三ノ裁判所ニ在テ清顯ノ如キ証憑畧記ノ判文ヲ用ヒ反テ簡便ニシテ適法ナリト主張スル者有之是レ必竟法律ノ見解ヲ異ニシ且手續ノ鄭重簡易ノ両主義互ニ相背馳スルニ之レ職由セン固ヨリ當廳ニ於テハ一同本議ニ異論無之ト雖ヒ他ノ各裁判所ニ在テハ議論異同有之抑亦豫審判事ノ判決ニ於テ證憑ノ取捨信否ノ異同之レ有ルハ格別ナレヒ判決ノ言渡書ニ其心證ノ資料卽チ豫審ノ必要タル證憑ノ事項ヲ明示スルト否ラサルトノ異同有之一定ノ制規無之ハ頗ル不都合ト謂ハサルヲ得ス倘シ或ハ謂ハン是等ノ異同アル法律上敢テ妨ケナシトシ猶ホ各自ノ意見ニ放任シ去ラハ恐クハ豫審ノ處分自然荒疎ニ傾キ泛濫ニ流レ如何ナル弊害ヲ生ンモ難測就テハ假令法律上明文アルニ非ラスト謂フモ前顯通治罪法第二百二十八條末項ノ精神ニ繹ヌルニ必ス證憑ノ事項ヲ明示スルヲ以テ元則トセン最モ實際ノ利害ニ試ミ以テ本議ヲ是認セサルヲ得ス就テハ前陳ノ如ク議論兩岐ニ渉リ終結一定致サヽル義ニ付御内訓ヲ仰キ候條何分御垂示被成度此段稟請候也

内訓　同年十二月廿八日

請訓ノ趣豫審ノ言渡書トハ自然其趣ヲ異ニスル者ニ付キ治罪法第二百二十八條末項ニ定メタル言渡書ハ犯罪ノ性質摸樣ノ如キハ成ル可ク明白ニ記載スルヲ要スヘシト雖ヒ證憑ニ至テハ一々明示スルニ及ハス其證憑ノ充分ナルヿヲ記載スルヲ以テ足レリトス此旨及内訓候也

第六節　豫審上訴

前橋始審裁判所檢事伺　明治十六年十二月五日付

甲裁判所ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ欠席言渡ヲ受ケタル被告人其公判前乙地ニ於テ又重罪ヲ犯シ逃捕セラレタル際欠席言渡アリタルヿヲ知リ畧言渡ニ對スル故障ヲ乙裁判所ニ爲シタル内ハ勿論乙裁判所ニ於テ之カ判決ヲ爲スヘキモノナルヲ以テ對手人ヨリ差出スヘキ答辨書等ノ期限ハ甲裁判所ヨリ故障ニ關スル一件書類ノ送致アリタルヨリ起算スル儀ト相心得可然哉此段相伺候也

指令　同年十二月廿日

別紙伺ノ趣豫審ノ言渡ハ其謄本ヲ被告人ノ住所ニ送達シタル後治罪法第二百四十七條ノ期限ヲ經過スレハ被告人ニ於テ之ヲ知ルト否トヲ問ハス確定スヘキ者ニ付伺面ノ如キ場合ハ實際甚タ少ナカルヘシト雖ヒ若シ確定前其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿアラハ十五年本省丙第七

號達ニ依リ乙裁判所ニ於テ後犯ノ罪ト共ニ之ヲ判決スルヿ得ルハ見込ノ通此場合ニ於テハ甲裁判所ニ照會シ該書類ノ送致アルヲ俟テ書記ヨリ其書類ト共ニ被告人ノ差出セシ趣意書ヲ檢察官ヘ送致スヘキ者ト心得可シ

第七節　通則

○重罪裁判言渡ノ際辨護人出廷セサルヽ取扱方

東京控訴裁判檢事伺　明治十六年十一月廿九日付

當重罪裁判所ニ於テ宣告ノ際ニ當リ被告人ヨリ選任シタル代人ニモアラス又辨護人ノ資格ヲ有スル代人ニモアラス唯一箇ノ人民ニシテ辨護人ノ代人ト爲リ辨護人ノ席ト定メタル其席ニ就カシメ裁判官モ之ヲ退ケス其儘ニシテ宣告スルヿ往々有之右ハ審法庭ヲ汚スノミナラス被告其人ノ爲メニモ利益ヲ見ス又治罪法ノ精神ニモ違背スヘシト思考セリ抑辨護人ノ職務ハ裁判ノ始ヨリ其結局ニ至ルマテ被告其人ノ爲メ辨護スヘキモノナレハ裁判ノ結果如何ナルヲ聽キ辨護ト相反シ不當ト認メタルトキハ被告人ヲシテ上告セシムルノ權アリ然ルニ裁判宣告ノ際辨護人ヲ置カサレハ被告人ニ於テ其宣告ヲ聞違ヒ又ハ聞落ナキヲ保シ難シ遂ニ多少ノ利益ヲ失フヿアルヘシ何トナレハ裁判宣告ハ被告其人ニ取リテ最モ緊要ノ時間ナリ辯護人ノ辯護モ此ニ至テ始テ有効無効ヲ知ルニ足ルモノナリ故ニ辯護人ハ唯事實辯論ト法律辯論トノミニ止マラス裁判終局ニ至ルマテ被告其人ノ爲メニ利益ヲ計リ上告スヘキハ上告モ爲サシムヘシ治罪法第三百八十一條第一項ノ明文ノミヲ以テ論スレハ辯護人ハ唯辯論ヲ爲ス時ニ限ルモノヽ如シト雖モ法廷上ノ体裁ヨリ見ルモ辯護人ノ資格ヨリ論スルモ公判終局迄ハ辯護人其席ニ就クヲ以テ治罪法ノ精神ト謂ハサルヲ得ス何等關係モナキ一箇ノ人民ヲ代人ト爲シ辯護人ノ席ニ就カシムルニ至テハ審法廷ヲ汚スノミナラス被告其人ニ取テ毫モ利益ヲ見ス故ニ裁判宣告ノ當日辯護人疾病等ニ罹リ出廷シ難キトキハ辯護人ノ資格ヲ有スル者ヲシテ代人ト爲シ出廷セシムル候得ハ治罪法ノ精神ニモ相適シ可申ト存候右ハ如何相心得可然哉至急指揮ヲ仰キ候也

指令　同年二月四日

伺之通

○違警罪裁判ニ付証人呼出ニ應セサル處分

新潟縣伺　明治十六年八月四日付

第一條　治罪法第二百九十六條(前署)檢察官之意見ヲ聽キ前キニ定メタル科料罰金之二倍云々トアル前ノ字ハ同法第九十三條之各項ニ指シタルモノナルヤ或ハ初度呼出シニ應セサリシトキ右各項ノ範圍內ヲ以テ言ヒ渡シタル金額ヲ指シタル儀ナルヤ

第二條　治罪法第二百九十六條ニ據リ二倍ノ科料金ヲ云ヒ渡ストキハ貳圓以上(壹圓五拾錢ノ二倍ノ如シ)之金額ニナルモ科料ト稱シ得ルハ勿論ノ儀ナルヤ

右ハ疑義アリ決兼候間至急何分御指令相成度此段相伺候也

指令　同年八月十五日

第一條　治罪法第二百九十三條ノ各項ニ記載シタル科料罰金ノ範圍ノ二倍ヲ云フ者ニシテ其範圍內ヲ以テ先キニ言渡シタル金額ノ二倍ヲ云フニアラス

第二條　科料ト稱スヘシ但シ刑法第七十二條第二項ニ依リ二圓四十錢以上ニ至ルヲ得ス

第八節　違警罪公判

○違警罪ヲ失入シタルトキ裁判取正

神奈川縣伺　明治十六年十月廿九日

違警罪犯トシテ科料又ハ拘留ノ刑ニ處シタル者其裁判全ク過誤ニ出テ入ルニ失シタル事確然タル時ハ便宜ノ手續ヲ以テ前裁判ヲ改正シ不苦候也

指令　同年十一月二日

伺之通

○科料ニ處セラレタルモノ上告

山形輕罪裁判所檢事請訓　明治十六年十二月三日

違警罪上告ノ儀ニ付本年六月渡邊檢事長ヨリノ伺ニ對シ單行法律規則ニ依リ拘留科料ニ處スル者ト雖モ本刑ノ長期多數輕罪ノ範圍內ニ在ルモノハ上告ヲ爲スコトヲ得ヘシ但書ハ長短多寡數共全ク違警罪ノ範圍ニ在ルモノハ見込ノ通リト御內訓相成候處例ヘハ証券印稅規則第四則第二條ニ該ルモノニシテ脫稅高壹錢ノ十倍若シクハ二十倍ノ科料金拾錢或ハ二拾錢ニ處スヘキモノナルトキハ上告ヲ許サレサル儀ニ可有之哉又ハ其多數掲載ナキモ所犯ノ事實ニ依リ數百圓ニ至ルモノニ付全違警罪ノ範圍內ニ在ラサルモノト解釋致シ可然哉此段仰御內訓候也

內訓　同年十二月廿一日

請訓ノ趣前段見解ノ通但脱税高多額ニシテ貳圓以上ノ罰金ニ該ル可キ者ナルトキハ上告ヲ爲スヿヲ得ヘシ

第九節　輕罪公判

○刑事附帶ノ私訴裁判言渡ニ對スル控訴

秋田始審裁判所檢事請訓　明治十七年四月二日

茲ニ告訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲シタル被告事件アリ裁判官其公訴ヲ裁判シタル後私訴ノ裁判ヲ爲スニ當リ檢察官ニ通報ヲ爲サヽル故同官ノ立會ナクシテ私訴ノ裁判ヲ言渡シタリ此卽チ治罪法第三十五條ノ法典ニ背キタルヲ以テ檢察官ニ於テ同法第三百六十五條第四項越權ノ處置アルヲ理由トシ控訴ヲ爲シ得ルハ勿論ト存候得共同法第三百六十五條第四項ハ刑ノ言渡ニ關シ越權等ノ處分アリタル場合ニ限リ適用スヘキモノニシテ檢察官カ刑事附帶ノ私訴裁判言渡ニ對シ控訴スル如キハ本項ノ規定スル所ニアラスト云フ反對論者アリ聊カ疑義ニ渉リ乞御內訓候也

內訓　同年四月十七日

請訓ノ趣ハ後段解釋ノ通此旨及內訓候也

第十節　重罪公判

○重罪被告ニ對スル接見願

大阪控訴裁判所檢事伺　明治十七年三月十日

重罪被告事件ニ付豫審判事ニ於テ之ヲ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ治罪法第二百二十七條ニ從ヒ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置シ檢事ニ於テハ右言渡確定シタル時ハ治罪法第二百六十條ニ從ヒ其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ニ於テハ重罪裁判所開廳ノ期ニ至リ治罪法第二百六十條第二項ニ從ヒ被告人ヲ某重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命スルノ手續ニ有之處茲ニ豫審判事ニ於テ之ヲ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ確定ノ上檢事ヨリ書類ヲ檢事長ニ送致シ未タ重罪裁判所開廳ノ期ニ至ラスシテ被告人ハ仍ホ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ留置中其親屬等被告人ト面接願ヲ申請シタル者アランニ治罪法第三百八十二條第三項ニ依ルニ辨護人ヲ除クノ外何人ト雖重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヿヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラスト有之就テハ右但書ニ被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長トアルハ

譬ヘハ前顯ノ如ク豫審ノ言渡確定スルモ未タ管轄重罪裁判所開廳ノ期ニ至ラス單ニ書類ノミ檢事長ニ送致シ被告人ハ猶ホ原裁判所管内ノ監倉ニ留置ノ場合ニ在テハ原裁判所卽チ豫審ヲ爲シタル輕罪裁判所長ノ允許ヲ受クル儀ナルヤ果シテ然ラハ該裁判所長ニ在テハ固ヨリ其管掌ニ屬セサル事件ノ何タルヤ未タ曾テ與カリ知ラスシテ且ツ書類モ既ニ檢事長ニ送致シアル者ナレハ該裁判所長ニ於テハ之ヲ許否スルニ由ナキ者ト愚考セリ又未タ重罪裁判所開廳ノ期ニ至ラサルモ檢事長ノ指揮ニ依リ豫テ被告人ヲ其開廳ス可キ重罪裁判所ノ下ト=在ル監倉ニ移シ留置シ猶ホ未タ重罪裁判所開廳セサル場合ハ何レノ裁判所長ニ於テ之レカ允許ヲ得ル儀ニ有之哉若クハ猶ホ原裁判所卽チ輕罪裁判所長ノ允許ヲ受ルノ手續ナル哉

指令　同年三月廿五日

伺ノ趣被告人豫審ヲ受ケタル裁判所附ノ監倉ニ在ル時ハ其裁判所長ノ允許ヲ受ケ己ニ開廳スヘキ重罪裁判所附ノ監倉ニ移シタル時ハ其開廳スヘキ始審又ハ控訴裁判所長ノ允許ヲ受クル儀ト心得可シ

第十一節　上告

○他ノ裁判所ヘ移サレタル被告人送致ノ手續及保釋取消

岡山始審裁判所檢事請訓　明治十七年四月十日

第一條　甲裁判所ノ重罪公判ニ對シ上告ヲナシ大審院ニ於テ之ヲ破毀シ乙裁判所ニ移サレタル時ノ場合被告事件一切ノ書類ヲ送致スヘキ手續別段ノ正條ナキヲ以テ或ハ甲裁判所ヨリ直チニ其移サレタル乙裁判所ノ管轄檢事長ヘ送致スルモアリ或ハ乙裁判所檢事ヘ被告人ト共ニ送致シ乙裁判所ノ檢事ニ於テ更ニ治罪法第二百六十條ノ例ニ原キ其控訴裁判所檢事長ヘ送致スルモアリ其取扱區々ニ有之輕罪ニ於テハ原裁判所ヨリ直チニ其移サレタル裁判所ヘ送致スルヲ以テ例トナスモ重罪事件ニ於テハ必檢事長ヲ經サルヘカラサルモノニ付何レノ手續ニ從フヘキヤ前說ノ如キハ其管轄ニアラサル裁判所ヨリ他ノ管轄ノ檢事長ヘ送致スルハ或ハ事ノ順序ヲ逐ハサルモノヽ如シ然ラハ後說ノ手續ニ從フヲ以テ穩當トナス乎

第二條　輕罪事件上告中被告人ヲ保釋又ハ責付シタル場合破毀ノ上他ノ裁判所ニ移サレタルトキハ其責付保釋ハ當然取消ヘタルモノトシ更ニ勾留ノ上一件書類ト共ニ送致スヘキモノナル哉

右仰御内訓候也

内訓　同年五月十日

請訓ノ趣第一條ハ甲裁判所検察官ヨリ直ニ乙裁判所ヲ開クヘキ裁判所ノ検察官ニ送致ス可シ第二條原裁判所ニ於テ保釋責付ノ取消ヲ必要トスルトキハ之ヲ取消スハ勿論ナレモ當然取消シタル者トナス為スヿヲ得ス

○上告ヲ為シ全部ヲ破毀セラレタルトキ私訴裁判

秋田始審裁判所検事請訓　明治十七年三月七日

詐欺取財事件ニ付甲裁判ニ於テ公訴私訴ヲ併セテ裁判ヲナシタル處被告ハ其裁判ニ不服シテ上告ヲナシタリ然ルニ大審院ニ於テハ法律ニ依リ理由ヲ付セサリシハ不法ナリトシ其全部ヲ破毀シ更ニ乙裁判所ニ移サレタルヲ以テ乙裁判所ハ本按詐欺取財事件ニ付テハ公訴私訴併セテ適當ノ判決ヲナサヽルヘカラサルハ論ヲ俟タザル義ト被相考如何トナレハ原裁判ノ全部ヲ破毀セラルレハ即原裁判ノ無効ニ属スルヲ以テナリ然ルニ反對ノ論者アリ大審院ニ於テ原裁判ノ全部ヲ破毀シタルハ刑事ノ公訴ニ對スル裁判ノミニシテ私訴ニ及サルモノナレハ乙裁判所ハ刑事ノ公訴ニ對スル判決ヲ為スニ止マリ私訴ノ裁判ヲ與フルノ限リニアラサル旨主張スト雖モ刑事ニ附帯シテ刑事裁判所ニ私訴ヲナシタル場合ハ即本按裁判ノ無効ニ属セハ隨テ從タル附帯ノ私訴モ効力ヲ失スルハ當然ナルヲ以テ乙裁判所ハ大審院ノ破毀ニ係ル公訴私訴ヲ併セ判決ヲナスハ至當ト存候得共為念御内訓ヲ仰候也

但シ被告等カ上告ノ當時ニ殊更私訴ノ裁判ニ對シ何等申立サル義ニ付御參考迄申添候也

内訓　同年三月廿四日

請訓ノ趣ハ乙裁判所ニ於テ更ニ私訴ノ裁判ヲ為スニ及ハス此旨及内訓候也

○哀訴ニ關スル書類遞送

京都始審裁判所検事請訓　明治十六年九月廿六日付

治罪法第四百三十七條ヲ按スルニ哀訴ヲ為サントスル者ハ大審院ノ書記局ニ其申立ヲ為スヘキヿ明瞭タリト雖モ哀訴者タルヤ罰金及拘留科料ノ刑ニ處セラレタル者ヲ除クノ外多クハ收監シアルヲ以テ大審院所在ノ地ニ住セサル訴訟關係人ハ直ニ該院ノ書記局ニ之ヲ申立ツルヿ甚タ難シトス而シテ茨城縣ノ伺ニ對スル明治十五

年五月三十一日ノ御指令ニ依レハ在監ヨリ差出シタル哀訴狀ハ司獄官吏ヨリ其書類ヲ大審院書記局ヘ回送スヘキ旨趣ナルヲ以テ是ノ點ニ對シ聊カ疑訝ヲ生ス何トナレハ哀訴ノ申立書ヲ司獄官吏ヨリ大審ヘ送付セハ原裁判所ノ檢察官ハ其哀訴アリシヿヲ覺察セサルニヨリ法律上執行ヲ停止スヘキ日時卽治罪法第四百三十八條ニ定メタル三日間ヲ經過スレハ刑ヲ執行スヘキ指揮書典獄ヘ發セサルヘカラス夫レ之ヲ發付スルモ哀訴アリタル上ハ實際執行ハ停止スヘキモノナルニ付既ニ發シタル指揮書ハ事實ニ牴觸スルヲ如何セン且不在監ノ訴訟關係人ニシテ哀訴ノ申立ヲ爲スハ遠隔ノ地方ニ住スルモノト雖モ已レ自カラ大審院ニ出頭シ其書記局ヘ哀訴ノ申立ヲ爲スヘキ儀ニ之レアルヘシ然レハ其手續タルヤ頗ル迂遠ニ渉リ實際ニ徵シテハ施行シ難キ場合ナシト概言スヘカラス故ニ哀訴ニ關スルモノト雖モ其書類ノ遞送ハ渾テ原裁判所書記局ノ取扱ニ屬セシムル時ハ哀訴ノアリタルヿハ書記局ヨリ檢察官ニ通報スルハ難キニアラス加之拘留不拘留人ノ區別ナク哀訴申立ノ手續ハ同一ニ期シ實際ニ於テモ其宜キヲ得法律ニ矛盾スル所ナシ因テ哀訴ニ關スル書類ノ遞送ハ原裁判所書記局ノ取扱ニ屬スヘキ儀ト相

心得可然哉此段仰內訓候也

內訓　同年十月九日付

請訓ノ趣哀訴ハ本人ヨリ代言人ヲ差出スカ又ハ重罪事件ニ係リ大審院ヨリ其代言人ヲ撰任セシ場合ニ非サレハ之ヲ爲ス可カラス但シ治罪法第四百卅八條ニヨリ大審院ノ言渡ハ三日間執行ヲ停止スヘキ者ナレハ其執行ヲ爲シ得ヘキニ至リ檢事長ヨリ執行ヲ命スヘキニ付原裁判所ノ檢察官ニ於テ哀訴アリシヿヲ知ラスシテ命令書ヲ發スルカ如キ場合カカルヘシ

○哀訴期限

京都府伺　明治十六年十二月十七日

刑ノ執行停止ノ儀ニ付本年九月廿六日京都始審裁判所檢事請訓ニ對シ御訓示之次第モ有之候處右ニテハ當府ノ如キ大審院ト所在地ヲ異ニスル土地ニ在リテハ治罪法第四百三十八條ニアル處ノ三日間ハ右言渡書送達ノ時間中ニ已ニ經過シ被告人ニ送達スルヤ否直ニ刑ノ執行ヲセサルヲ得サルカ如キ場合アリテ甚タ不穩當ト相考候付テハ右御訓示ノ旨趣ハ大審院ノ言渡ノ原裁判所等ニ着シ之レヲ被告人ニ送達ヲリシ翌日ヨリ三日間ヲ經テ刑ヲ執行スヘキモノ

ト相心得可然哉疑義ヲ生シ候ニ付何分ノ御指令相成度此段相伺候也

指令　同年十二月廿八日

伺ノ趣裁訴ハ大審院言渡ノ翌日ヨリ起算スヘキニ付本人ヨリ同院ヘ代言人ヲ差出シ置クカ又ハ重罪事件ニ係リ同院ヨリ其代言人ヲ撰任セシ場合ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得サルモノトス

第十二節　再審ノ訴

○死者ニ對スル再審ノ訴

大審院檢事長請訓　明治十七年四月十五日

治罪法第四百四十條第五ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬ヨリ再審ノ訴ヲナシ得ヘキ旨ヲ規定セラレ其第四百四十六條ニ於テハ死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲナシタル場合ニ於テ云々ト記載シアツテ檢察官ヨリ再審ノ訴ヲ起シタル場合ノ規定アルヿナケレハ該文面上ヨリ之ヲ見ルトキハ死者ニ對スル再審ノ訴ハ其親屬ニ非サレハナシ得ヘカラサル者ノ如ク解釋セラレ候得共既ニ其親屬ニ於テ訴權ヲ有スル以上ハ檢察官ニ於テモ訴權ヲ有スルノ道理ナレハ聊カ疑義ニ渉リ相決シ兼候ニ付御内訓ヲ仰キ候也

内訓　同年四月二十一日

請訓ノ趣檢察官ニ於テモ再審ノ訴ヲ爲スヿヲ得可キ儀ト心得可シ此旨及内訓候也

第三十六章　陸軍刑法

○十四年十二月二十八日布告第六拾九號

陸軍刑法別冊ヲ通改定シ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

右奉　勅旨布告候事

陸軍刑法目錄

第一編　總則
第一章　法例（自第一條至第十四條）
第二章　刑例（自第十五條至第三十五條）
第三章　加減例（自第三十六條至第四十五條）
第四章　數罪俱發
第五章　數人共犯
第六章　未遂犯罪
第四十六條（自第四十七條至第四十八條）
第二編　重罪輕罪
第四十九條

第一章　反亂　（自第五十條至第六十五條）
第二章　抗命
第三章　擅權
第四章　辱職　（自第六十六條至第六十八條）
第五章　暴行
第六章　侮辱　（自第七十九條至第七十一條）
第七章　違令
第八章　逃亡　（自第七十二條至第七十五條）
第九章　詐僞　（自第七十六條至第九十二條）
陸軍刑法
第一編　總則
第一章　法例
第一條　此刑法ニ於テ罰ス可キ罪別テ二種ト爲ス
一　重罪
二　輕罪
第二條　此刑法ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスヿヲ得ス
若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ
（自第九十三條至第九十六條）
（自第九十七條至第百十六條）
（自第百十七條至第百二十條）
（自第百二十一條至第百廿四條）

輕キニ從テ處斷ス

第三條　軍人ト稱スルハ將官及ヒ同等官上長官士官下士諸卒ヲ謂フ

第四條　軍屬ト稱スルハ陸軍出仕ノ文官其他總テ宣誓若クハ讀法ノ式ニ由リ陸軍ニ從事スル者ヲ謂フ

第五條　司令官ト稱スルハ一軍一團其他一部隊ト雖モ總テ其司令ニ任スル者ヲ謂フ

第六條　哨兵ト稱スルハ儀仗若クハ警戒ノ爲メ守地ニ在ル者ヲ謂フ

第七條　上官ト稱スルハ官等ノ上ナル者ヲ謂フ同等ト雖モ命令ヲ下ス可キ權ヲ有スル者其部下ニ於テハ上官ニ同シ上等卒及ヒ上等卒ノ職ヲ奉スル者其部下ニ於ル亦之ニ準ス

第八條　將校同等ノ軍人ハ總テ將校ニ同シ

第九條　軍屬及ヒ陸軍所屬ノ諸生徒ハ總テ軍人ニ同シ

第十條　親屬ト稱スルハ普通刑法第百十四條第百十五條ニ記載スル者ヲ謂フ

第十一條　豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ召集中ノ外此刑法ニ依テ處斷スルヿヲ得ス但此刑法ニ特例アル者ハ此限ニ在ラス

第十二條　第八十條第八十一條第八十六條第八十七條第八十八條第

八十九條第九十條第一項第九十五條第百十一條第百十二條第百十三條第百十四條第百十五條第百十六條ニ掲クル所ノ罪ヲ犯ス者ハ軍人ニ非スト雖モ此刑法ニ依テ處斷ス

第百六條第百七條第百十八條第百十九條第百二十條ノ罪ヲ犯サシムル者ハ軍人ニ非スト雖モ亦軍人ト同ク論ス

第十三條　敵前軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テ第五十三條第五十四條第五十六條第五十七條第五十八條第五十九條第六十條第六十一條ニ掲クル所ノ罪ヲ犯ス者ハ軍人ニ非スト雖モ此刑法ニ依テ處斷ス但其豫備若クハ陰謀ニ止マル者ハ第六十二條第六十三條ニ照シテ處斷ス

第十四條　此刑法ノ罪ヲ犯スニ因リ人ヲ殺傷スル者ハ普通刑法第三編第一章ニ照シ重キニ從テ處斷ス但此刑法ニ特例アル者ハ此限ニ在ラス

第二章　刑例

第十五條　刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

主刑ハ之ヲ宣告ス

附加刑ハ此刑法ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第十六條　左ニ掲クル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一　死刑

二　無期徒刑

三　有期徒刑

四　無期流刑

五　有期流刑

六　重懲役

七　輕懲役

八　重禁獄

九　輕禁獄

第十七條　左ニ掲クル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一　重禁錮

二　輕禁錮

第十八條　左ニ掲クル者ヲ以テ附加刑ト爲ス

一　剝奪公權

二　剝官

三　停止公權

四　禁治産
五　監視
六　沒收

第十九條　陸軍法術ニ於テ死刑ニ處スル者ハ皆之ヲ銃殺ス

第二十條　死刑ハ陸軍卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フヿヲ得ス
軍中若クハ合圍ノ地ニ於テ特權ヲ有スル者アル時ハ其命令ヲ以テ之ヲ行フヿヲ得

第二十一條　徒刑ハ無期有期ヲ分タス嶋地ニ發遣シ定役ニ服ス
有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第二十二條　流刑ハ無期有期ヲ分タス嶋地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ服セス有期流刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第二十三條　懲役ハ懲役場ニ入レ定役ニ服ス
重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十四條　禁獄ハ獄ニ入レ定役ニ服セス
重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十五條　禁錮ハ禁錮場ニ入レ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス

禁錮ハ重輕ヲ分タス十一日以上五年以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十六條　普通刑法第十四條第十五條第十六條第十八條第十九條第二十一條第二十二條第二十五條ニ記載スル所ノ主刑處分ノ例ハ此刑法ニ於テ之ヲ適用ス

第二十七條　陸軍法術ニ於テ普通刑法ニ依リ罰金科料ニ處スル者限内納完セス禁錮拘留ニ換フル時ハ更ニ裁判ヲ用ヒス理事ノ求メニ因リ裁判長之ヲ命ス

第二十八條　剝奪公權ハ普通刑法第三十一條ニ記載スル所ノ權ヲ剝奪ス

第二十九條　重罪ノ刑ニ處スル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス終身公權ヲ剝奪ス

第三十條　剝官ハ宣告シテ將校ノ官職ヲ褫奪ス
下士上等卒軍屬其他ノ官吏此刑法ノ罪ヲ犯シ將校ニ在テ剝官ヲ附加スル刑ニ該ル時ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其官職ヲ失フ

第三十一條　禁錮ニ處スル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其刑期間公權ヲ行フヿヲ停止ス

第三十二條　普通刑法第三十四條第三十五條第三十六條第三十七
第三十八條第三十九條第四十條第四十一條第四十三條第四十四條
ニ記載スル所ノ附加刑處分ノ例ハ此刑法ニ於テ之ヲ適用ス
第三十三條　下士上等卒ハ此刑法及ヒ普通刑法若シクハ海軍刑法ニ
依リ禁錮ニ處シ官職ヲ失フト雖モ兵役ヲ免セス其失フ所ノ官職ハ
主刑終ルノ日ヨリ六月ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ之ヲ復ス
ルコトヲ得
第三十四條　下士諸卒ハ此刑法及ヒ普通刑法海軍刑法ノ輕罪ヲ犯シ
監視ニ付シ若クハ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付ス可キ時ト雖モ監視
ニ付セス
第三十五條　普通刑法第四十九條第五十條第五十一條第五十二條第
五十三條第五十四條第五十五條第五十六條第五十七條第五十八條
第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條
第六十五條ニ記載スル所ノ刑期計算假出獄期滿免除復權ノ例ハ此
刑法ニ於テ之ヲ適用ス

第三章　加減例

第三十六條　此刑法ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ掲ク
ル所ノ例ニ照シテ加減ス但加ヘテ死刑ニ入ルコトヲ得ス
第三十七條　第八十七條第八十八條第八十九條第百二十一條ニ掲ク
ル所ノ重罪ノ刑加減ス可キ時ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス
一　死刑
二　無期徒刑
三　有期徒刑
四　重懲役
五　輕懲役
第三十八條　第二編第一章第二章第三章第四章第七章第八章及ヒ第
七十七條第七十八條第七十九條第八十條第八十一條第八十二條第
八十三條第八十六條ニ掲クル所ノ重罪ノ刑加減ス可キ時ハ左ノ等
級ニ照シテ加減ス
一　死刑
二　無期流刑
三　有期流刑
四　重禁獄
五　輕禁獄

第三十九條　輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

第四十條　重罪ノ刑ヲ減輕シテ禁錮ニ處スル時將校ハ剝官ヲ附加ス

第四十一條　禁錮ニ該ル者加重ス可キ時ハ其刑期四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス其減輕ス可キ時亦四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲ス

禁錮ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルヲ得ス但加ヘテ七年ニ至リ減シテ十日以下ニ降スヲ得其減シ盡ス時ト雖モ仍ホ一日以上十日以下ノ禁錮ニ處ス

若シ減輕シテ十日以下ニ處スル時ハ重禁錮ト雖モ定役ニ服セス

第四十二條　禁錮ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數ヲ生シ一日ニ滿サル者ハ之ヲ除棄ス

第四十三條　剝官ハ其主刑ヲ減輕スル時ト雖モ仍ホ之ヲ附加ス但十日以下ノ禁錮ニ處スル時ハ此限ニ在ラス

第四十四條　普通刑法第七十五條第七十六條第七十七條第七十八條第七十九條第八十條第八十一條第八十二條第八十五條第八十九條第九十條第九十一條第九十二條第九十四條第九十五條第九十七條第九十八條第九十九條ニ記載スル所ノ不論罪減輕再犯加重加減順序ノ例ハ此刑法ニ於テ之ヲ適用ス但此刑法ニ特例アル者ハ此限ニ在ラス

第四十五條　再犯加重ハ再ヒ此刑法ノ罪ヲ犯スニ非サレハ之ヲ論スルヿヲ得ス

第四章　數罪俱發

第四十六條　二罪以上俱ニ發スル時若クハ一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經餘罪後ニ發スル時ハ普通刑法第百條第百一條第百二條第百三條ニ記載スル所ノ數罪俱發ノ例ヲ適用ス但此刑法剝官ヲ附加セサル禁錮ノ罪ト剝官ヲ附加スル禁錮及ヒ海軍刑法剝官ヲ附加スル禁錮若クハ普通刑法ノ禁錮ノ罪ト俱ニ發シ剝官ヲ附加セサル禁錮ニ處スル時ト雖モ將校ハ仍ホ剝官ヲ附加シ下士上等卒軍屬其他ノ官吏ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其官職ヲ失フ

第五章　數人共犯

第四十七條　軍人二人以上共ニ此刑法ノ罪ヲ犯ス時ハ普通刑法第百

四條第百五條第百六條第百七條第百八條第百九條第百十條ニ記載スル所ノ數人共犯ノ例ヲ適用ス但第六十七條第七十七條第七十八條第八十一條第八十三條第八十四條第八十五條第百十九條ニ掲クル所ノ罪ヲ論スル時從犯ハ首魁ニ非サル正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス

第四十八條　軍人ト軍人ニ非サル者ト共犯ニ係ル時軍人ハ此刑法ニ依リ處斷スト雖モ軍人ニ非サル者ハ普通刑法ニ照シテ其罪ヲ論ス但第十二條第十三條ニ依リ此刑法ヲ以テ處斷ス可キ者ハ此限ニ在ラス

第六章　未遂犯罪

第四十九條　此刑法ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ普通刑法第百十一條第百十二條第百十三條ニ記載スル所ノ未遂犯罪ノ例ヲ適用ス

第二編　重罪輕罪

第一章　反亂

第五十條　軍人黨ヲ結ヒ擅ニ兵器ヲ執リ反亂ヲ爲ス者首魁敎唆者及ヒ群衆ノ指揮ヲ爲シ若クハ樞要ノ職務ニ從事スル者ハ死刑ニ處ス其指揮ヲ爲シ樞要ノ職務ニ從事スト雖モ情狀輕キ者ハ無期流刑ニ處ス諸般ノ職務ヲ司リ若クハ兵器彈藥其他軍需ノ物品ヲ資給スル者ハ有期流刑ニ處シ其情狀輕キ者ハ重禁獄ニ處ス

第五十一條　軍人反亂ヲ爲スコトヲ謀リ兵器彈藥其他軍需ノ物品ヲ劫掠スル者ハ前條ノ刑ニ同シ

第五十二條　軍人前二條ノ罪ヲ犯スニ因リ故ラニ鎮撫ノ官吏ヲ殺ス者ハ死刑ニ處ス

第五十三條　軍人敵ヲ利スル爲メ部下ノ兵隊若クハ軍事ニ關スル土地家屋船舶及ヒ兵器彈藥其他軍需ノ物品ヲ敵ニ付スル者ハ死刑ニ處ス

第五十四條　軍人敵ヲ利スル爲メ土地道路ノ要害險夷ヲ指示シ若クハ攻守ノ用ニ供ス可キ圖書及ヒ暗號記號ヲ開示シ其他軍機軍情ヲ漏洩スル者ハ死刑ニ處ス

第五十五條　軍人敵圍ヲ受クルノ地ニ於テ其司令官ヲ要シ敵ニ降ラシメントシテ黨ヲ爲ス者ハ死刑ニ處ス

第五十六條　軍人敵前ニ在テ隊兵ノ潰走ヲ誘起シ若クハ其連絡集合ヲ妨害スル者ハ死刑ニ處ス

第五十七條　軍人敵ノ爲メニ兵ヲ募ル者ハ死刑ニ處ス

第五十八條　軍人敵ヲ利スル爲メ軍事ニ關スル家屋船舶及ヒ壘柵兵器彈藥其他軍需ノ物品若クハ戰鬪ノ用ニ供ス可キ道路橋梁森林滊車電線ヲ毀壞シ若クハ火ヲ放テ之ヲ燒燬スル者ハ死刑ニ處ス

第五十九條　軍人敵ヲ利スル爲メ兵器彈藥其他軍需物品ノ缺乏ヲ致ス者ハ死刑ニ處ス

第六十條　軍人敵ヲ利スル爲メ叫呼喧噪シ若クハ造言飛語ヲ爲ス者ハ死刑ニ處ス

第六十一條　軍人敵ノ間諜ヲ誘導助成隱匿シ若クハ敵ヲ利スル爲メ俘虜降人ヲ逃走セシメ及ヒ劫奪スル者ハ死刑ニ處ス敵ヲ利スル爲メ音信ヲ敵ニ通スル者亦同シ

第六十二條　軍人前數條ニ掲クル所ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者及ヒ其豫備ヲ爲ス者ハ各本條ニ照シ一等ヲ減ス

其陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ二等ヲ減ス

第六十三條　軍人前數條ニ掲クル所ノ罪ヲ犯サントシテ其豫備若クハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ自首スル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第六十四條　軍人情ヲ知テ前數條ニ掲クル所ノ犯人集會ノ爲メ家屋ヲ貸ス者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第六十五條　軍人此章ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第二章　抗命

第六十六條　軍人命令ヲ下ス可キ權アル者ノ命令ニ抗シ若クハ服從セサル者敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其他ノ地ニ在テハ二年以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第六十七條　軍人二人以上共ニ前條ノ罪ヲ犯ス者敵前ニ在テハ皆死刑ニ處ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ首魁ハ重禁獄ニ處シ其他ノ犯人ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其他ノ地ニ在テハ首魁ハ輕禁獄ニ處シ其他ノ犯人ハ二月以上二年以下ノ輕禁獄ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第六十八條　軍人暴行ヲ爲スニ當リ上官之ヲ制止シ其命ニ從ハサル者ハ二月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第三章　擅權

第六十九條　司令官講和ノ告示若クハ停戰ノ命令ヲ受ケ仍ホ戰鬪ノ所爲ヲ止メサル者ハ死刑ニ處ス

第七十條　司令官命令ニ背キ若クハ權外ノ事ニ於テ已ムコヲ得サルノ理由ナクシテ擅ニ兵隊ヲ進退スル者ハ死刑ニ處ス

第七十一條　司令官擅ニ人ヲ募リ部伍ニ充ル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

第四章　辱職

第七十二條　要塞司令官若クハ要塞特命司令官其盡ス可キ所ヲ盡サスシテ敵ニ降リ若クハ所轄ノ地ヲ敵ニ付スル者ハ死刑ニ處ス

保砦ノ地ニ於テ其司令官之ヲ犯ス者亦同シ

第七十三條　司令官野戰ノ時ニ在テ隊兵ヲ率ヒ敵ニ降ル者ハ一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

若シ其盡ス可キ所ヲ盡サスシテ降ル者ハ死刑ニ處ス

第七十四條　將校敵前ニ在テ盡ス可キ所ヲ盡サスシテ遁走スル者ハ死刑ニ處ス

第七十五條　將校其部下ノ兵徒黨犯罪ノ事アルニ當リ鎮定ノ方ヲ盡サヽル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

第五章　暴行

第七十六條　軍人上官ニ對シ暴行ヲ爲ス者ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第七十七條　軍人二人以上共ニ前條ノ罪ヲ犯ス者首魁ハ重禁獄ニ處シ其他ノ犯人ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第七十八條　軍人上官ノ公務ヲ行フニ當リ前二條ノ罪ヲ犯ス者ハ各一等ヲ加フ

第七十九條　軍人上官ニ對シ兵器若クハ兇器ヲ用ヒ暴行ヲ爲ス者ハ死刑ニ處ス

上官ノ軍務ヲ行フニ當リ之ニ對シ暴行ヲ爲ス者亦同シ

第八十條　軍人哨兵ニ對シ暴行ヲ爲ス者ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用フル者ハ有期流刑ニ處ス

第八十一條　軍人二人以上共ニ前條ノ罪ヲ犯ス者首魁ハ重禁獄ニ處シ其他ノ犯人ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用フル者首魁ハ死刑ニ處シ其他ノ犯人ハ有期流刑ニ處ス

首魁自ラ兵器若クハ兇器ヲ用ヒスト雖モ指示シテ之ヲ用ヒシムル時ハ死刑ニ處ス

第八十二條　軍人同等若クハ下等ノ者軍務ヲ行フニ當リ之ニ對シ暴行ヲ爲ス者ハ三月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用フル者ハ重禁獄ニ處ス

第八十三條　軍人二人以上共ニ前條ノ罪ヲ犯ス者首魁ハ輕禁獄ニ處シ其他ノ犯人ハ三月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用フル者首魁ハ有期流刑ニ處シ其他ノ犯人ハ重禁獄ニ處ス

首魁自ラ兵器若クハ兇器ヲ用ヒスト雖モ指示シテ之ヲ用ヒシムル時ハ有期流刑ニ處ス

第八十四條　軍人多衆相集リ暴行ヲ爲ス者首魁ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ其他ノ犯人ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第八十五條　軍人多衆結合シテ相鬪毆スル者首魁ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ其他ノ犯人ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第八十六條　軍人俘虜降人ヲ劫奪シ若クハ暴行脅迫ヲ以テ其逃走ヲ助クル者ハ重禁獄ニ處ス

第八十七條　軍人戰場ニ於テ創傷人ノ衣服財物ヲ褫奪スル者ハ重懲役ニ處シ因テ殺傷スル者ハ死刑ニ處ス

第八十八條　軍人軍用ノ工廠船舶及ヒ軍需ノ物品ヲ貯藏スル倉庫若クハ現ニ戰鬪ノ用ニ供スル家屋壘柵橋梁鐵車電線ヲ毀壞スル者ハ重懲役ニ處シ火ヲ放テ之ヲ燒燬スル者ハ死刑ニ處ス

第八十九條　軍人敵前軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ於テ火ヲ放チ露積スル所ノ兵器彈藥軍糧陣營具被服ヲ燒燬スル者ハ死刑ニ處ス

其他ノ地ニ在テハ重懲役ニ處ス

時ハ有期流刑ニ處ス

第九十條　軍人兵器彈藥軍糧陣營具被服ヲ棄毀シ若クハ軍用ノ馬匹ヲ殺傷スル者ハ一月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其官給ニ係ル物品ヲ棄毀スル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第九十一條　哨兵衛兵妄リニ銃砲ヲ發スル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第九十二條　軍人操練ノ際若クハ禮砲號砲ヲ發スル時瓦石等ヲ裝塡シテ發射スル者ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

此條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第六章　侮辱

第九十三條　軍人上官ヲ罵詈若クハ侮慢スル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

上官ノ公務ヲ行フ時ニ於テスル者ハ一等ヲ加フ

第九十四條　軍人文書圖畫ヲ流布シ若クハ多衆ヲ會シ演說ヲ爲シテ上官ヲ誹毀スル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第九十五條　軍人哨兵ヲ罵詈若クハ侮慢スル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第九十六條　軍人同等若クハ下等ノ者軍務ヲ行フニ當リ之ニ對シ罵詈若クハ侮慢スル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第七章　違令

第九十七條　軍人哨兵ニ對シ哨令ヲ犯ス者敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ一年以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其他ノ地ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第九十八條　軍人擅ニ哨令ヲ變更シ若クハ之ニ違フ者敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ一年以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其他ノ地ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第九十九條　哨兵擅ニ其守地ヲ離ルヽ者敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ一年以上三年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其他ノ地ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百條　哨兵睡眠若クハ酩酊シテ事ヲ肯セサル者敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其他ノ地ニ在テハ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百一條　軍人現ニ軍務ニ服シ擅ニ其地ヲ離ルヽ者敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其他ノ地ニ在テハ一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

長官之ヲ犯ス時ハ各一等ヲ加フ

第百二條　軍人戰時軍中若クハ合圍ノ地ニ在テ急呼ノ號報アル時故ナク來會セサル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第百三條　軍人戰時軍中若クハ合圍ノ地ニ在テ兵器彈藥軍糧ノ運搬

支給ヲ掌リ故ナク其缺乏ヲ致ス者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第百四條　司令官命令ニ從フヿヲ得サル時部署若クハ其命セラルヽ所ノ事ヲ變更シ直チニ之ヲ申報セサル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其事變ニ因リ喈號記號ヲ改メ直チニ之ヲ申報セサル者亦同シ

第百五條　軍人職務ニ因リ與リ知ル所ノ軍事ノ機密ヲ漏洩スル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第百六條　軍人允許ヲ得テ他方ニ赴キ故ナク歸着ノ期ニ後レ十日ヲ過ル者ハ二月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

戰時ニ在テ五日ヲ過ル者ハ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百七條　徵兵故ナク徵集ノ期ニ後レ十日ヲ過クル者ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ戰時ニ在テ五日ヲ過クル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者故ナク召集ノ期ニ後レ十日ヲ過クル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ戰時ニ在テ五日ヲ過クル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百八條　軍人前條ノ罪ヲ犯サシムル者ハ數人共犯ノ例ニ照シテ處斷ス

第百九條　軍人反亂ノ罪ヲ犯サントスル者アルヲ知テ申告セサル者ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第百十條　軍人政治ニ關スル事項ヲ上書建白シ又ハ講談論説シ若シクハ文書ヲ以テ之ヲ廣告スル者ハ一月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百十一條　軍人敵前軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テ造言飛語ヲ爲ス者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第百十二條　軍人俘虜降人ヲ逃走セシムル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

看守護送者之ヲ犯ス時ハ重禁獄ニ處ス

第百十三條　軍人俘虜降人ヲ逃走セシムル爲メ兵器其他ノ器具ヲ給與シ若クハ逃走ノ方法ヲ指示スル者ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

看守護送者之ヲ犯ス時ハ輕禁獄ニ處ス

第百十四條　軍人前二條ニ掲クル所ノ輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケ

サル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百十五條　軍人俘虜降人ヲ看守若クハ護送シ懈怠ニ因リ其逃走ヲ致ス者ハ十一日以上一月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百十六條　軍人逃走ノ俘虜降人タルヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシムル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス但犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第八章　逃亡

第百十七條　軍人擅ニ職役若クハ屯營本隊ヲ離レ六日ヲ過クル者ハ逃亡ト爲シ二月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

新兵入營三月ニ滿サル者ハ一等ヲ減ス

戰時軍中若クハ合圍ノ地ニ在テ三日ヲ過クル者ハ逃亡ト爲シ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第百十八條　軍人敵前ニ在テ擅ニ職役若クハ屯營本隊ヲ離ルヽ者ハ逃亡ト爲シ輕禁獄ニ處ス

第百十九條　軍人四人以上共ニ逃亡ノ罪ヲ犯ス者首魁ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス將校ハ剝官ヲ附加ス戰時軍中若クハ合圍ノ地ニ在テハ輕禁獄ニ處シ敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

其他ノ犯人ハ第百十七條第百十八條ニ照シテ處斷ス

第百二十條　軍人敵ニ奔ル者ハ死刑ニ處ス

第九章　詐僞

第百二十一條　軍人糧食ノ支給ヲ掌リ健康ヲ害ス可キ食料飲料ヲ配付スル者ハ輕懲役ニ處シ因テ死ニ致ス者ハ有期徒刑ニ處ス

第百二十二條　軍人斥候偵察ノ命ヲ受ケ詐僞ノ報告ヲ爲シ若クハ傳令使命令ヲ詐リ傳フル者ハ五月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第百二十三條　陸軍醫官其職務ヲ以テ疾病傷痍及ヒ身體强弱ノ僞證ヲ爲ス者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

其囑託ヲ爲シタル軍人亦同シ

第百二十四條　軍人疾病ヲ作爲シ身體ヲ毀傷シ兵役ヲ免ルヽヿヲ圖ル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者戰時ニ於テ前項ノ所爲ヲ以テ召集ヲ免ルヽヿヲ圖ル者亦同シ

第三十七章　陸軍治罪法

○明治十六年八月四日布告

第二十四號

陸軍治罪法別冊ノ通制定シ明治十六年八月十五日ヨリ之ヲ施行ス

右奉　勅旨布告候事

〔別冊〕

陸軍治罪法目錄

第一章　總則　自第一條至第六條
第二章　軍法會議ノ搆成　自第七條至第十二條
第三章　軍法會議ノ權限　自第十三條至第十八條
第四章　陸軍檢察　自第十九條至第二十四條
第五章　審問　自第二十五條至第三十五條
第六章　判決　自第三十六條至第五十四條

陸軍治罪法

第一章　總則

第一條　陸軍軍人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

軍法會議ハ刑事附帶ノ民事ヲ受理セス但官物ノ損害ニ係ルノ賠償ハ此限ニ在ラス

第二條　軍法會議ハ傍聽ヲ許サス但其宣告ヲ爲ス時ハ軍人ニ限リ之

ヲ許ス

第三條　軍人ト稱スルハ陸軍刑法第三條第九條ニ掲クル者ヲ謂フ

第四條　司令官ト稱スルハ軍團長師團長旅團長軍管司令官營所司令官及ヒ合圍ノ地ノ司令官ヲ謂フ

第五條　普通治罪法第九條第十一條第十三條第十四條第十八條第百一條ノ規則ハ此治罪法ニ於テモ之ヲ適用ス

第六條　歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ軍法會議ニ於テ審判スヘキ時ノ外軍人ノ例ニ依ルコトヲ得ス

第七條　軍法會議ハ各軍管ニ一箇若クハ數箇ヲ設ク

軍中ニ於テハ軍團師團旅團ニ軍法會議ヲ設ケ合圍ノ地ニモ亦軍法會議ヲ設ク

第八條　軍法會議ニハ判士長判士理事理事補審事審事補錄事ヲ置ク

第九條　軍法會議ハ佐官一名ヲ判士長ト爲シ尉官三名理事理事補ノ內一名ヲ以テ判士トス

但被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ左ノ表ニ照シテ判士長判士ヲ更フ

判士長	判士	被告人
佐官一名	尉官三名 理事一名	陸海軍少尉准士官及ヒ同等ノ軍人軍屬
佐官一名	大尉中尉少尉一名 理事一名	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
中佐一名	大尉少尉一名 理事一名	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
大佐一名	少佐中佐一名 理事一名	陸海軍少佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
少將一名	大佐中佐一名 理事一名	陸海軍中佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
中將一名	少將大佐一名 理事一名	陸海軍大佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
中將一名	中將少將一名 理事一名	陸海軍少將及ヒ同等ノ軍人軍屬
大將一名	中將三名 理事一名	陸海軍中將及ヒ同等ノ軍屬
大將一名	大將中將一名 理事一名	陸海軍大將及ヒ同等ノ軍屬

第十條　將官ヲ以テ判士ト爲ス時ハ陸軍卿ノ奏請ニ依リ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

佐官ヲ以テ軍士長ト爲ス時ハ陸軍卿之ヲ命ス尉官ヲ以テ判士ト爲ス時モ亦同シ

第十一條　軍團長及ヒ獨立師團長ハ部下ノ將校ニ其軍法會議ノ判士長判士ヲ命スルコトヲ得又理事審事缺員スル時ハ部下ノ將校ニ命シテ其職務ヲ行ハシメ錄事缺員スル時ハ下士ニ命シテ其職務ヲ行ハシムルコトヲ得

臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官部下ノ將校若クハ其地ニ在ル將校中ヨリ撰ミ專任判事ヲ置キ被告人ノ官等ニ拘ハラス之ヲ審判セシム但將校缺乏ノ場合ニ於テハ他ノ官吏ヲ以テ之ヲ補充スルコトヲ得

第十二條　軍管軍法會議ニ於テ判士長ニ充ツ可キ將校缺員スル時ハ軍管司令官ノ上申ニ依リ陸軍卿他ノ將校ヨリ之ヲ命シ若クハ被告人ヲ他ノ軍法會議ニ移シテ其審判ヲ爲サシム

第三章　軍法會議ノ權限

第十三條　軍法會議ハ其軍管若クハ師管ノ所管地方ヲ以テ管轄ト爲ス

第十四條　軍人管轄地外ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ其地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得

第十五條　軍人數箇ノ軍法會議ノ管轄地內ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ被告人ヲ逮捕シタル地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第十六條　軍團師團旅團軍法會議ハ其團所屬軍人ノ犯シタル重罪輕罪ヲ審判ス

第十七條　俘虜降人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第十八條　軍人任官若クハ就役ノ前罪ヲ犯シ在官現役中發覺スル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其在官現役中罪ヲ犯シ免官若クハ免役ノ後發覺スル者ハ司法裁判ニ付ス

歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺スル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其召集中ノ犯罪解散ノ後發覺スル者ハ司法裁判ニ付ス

第十九條　軍人二人以上共ニ重罪輕罪ヲ犯シ各其管轄ヲ異ニスル時ハ先キニ審問ニ着手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス海軍々人軍屬ト共犯ニ係ル時モ亦同シ

第二十條　軍人ト軍人ニ非サル者ト共ニ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十一條　陸軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス餘罪俱ニ發シタル者モ亦同シ

第二十二條　軍法會議ハ重罪輕罪ト俱ニ發シタル違警罪モ亦之ヲ審判ス

第二十三條　軍中若クハ合圍ノ地ノ軍法會議ヲ廢スルニ當リ既ニ審判ニ着手シタル者ハ陸軍卿ノ指定スル軍法會議若クハ其事件ヲ管理ス可キ官司ニ送致ス可シ

第四章　陸軍檢察

第二十四條　陸軍檢察ハ陸軍ニ關スル犯罪ヲ搜査シ證憑ヲ拾收ス

第二十五條　左ニ記列スル諸官ハ司令官ノ命令ヲ受ケテ陸軍檢察ノ職務ヲ行フ

要塞副官若クハ衛戍副官

憲兵ノ將校下士

衛兵司令

砲兵工兵ノ監護

第二十六條　要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長及ヒ各所管ノ長官ハ各其管スル所ノ事ニ就キ犯罪アルヿヲ知リタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ處分ヲ爲シ若クハ陸軍檢察官ニ委シテ其處分ヲ爲サシムルヿヲ得

審事其職務ヲ行フノ際現行犯アルヿヲ知リタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二十七條　何人ヲ論セス軍人ノ犯罪ニ因リ損害セラレタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ陸軍檢察官被告人所屬ノ長官隊長若クハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

第二十八條　何人ヲ論セス軍人ノ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ第二十七條ニ記載シタル官吏ニ告發スルコトヲ得

第二十九條　陸軍所屬ノ官吏職務ヲ行フニ因リ軍人ノ重罪輕罪ヲ犯スヿアルコトヲ知リタル時ハ其職務ヲ行フ地ノ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長ニ告發ス可シ

第三十條　軍人ノ重罪輕罪現行犯アル時ハ何人ヲ論セス直ニ之ヲ逮捕スルコトヲ得

其犯罪人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ陸軍檢察官司法警察官憲兵卒若ク

ハ巡査ニ交付ス可シ

第三十一條　司法警察官憲兵卒及ヒ巡査現行犯人軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタル時ハ速ニ之ヲ陸軍檢察官ニ引致ス可シ

第三十二條　司法警察官軍人ニ係ル告訴告發ヲ受ケタル時ハ速ニ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長ニ交付スヘシ

第三十三條　告訴人告發人ハ願下ヲ爲シ若クハ其陳述ヲ變更セントスルコトヲ請求スルコトヲ得

第三十四條　陸軍檢察官軍人ノ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ直ニ犯所ニ臨檢シ犯罪人ヲ逮捕シ訊問ヲ爲シ其調書ヲ作ルヘシ

其引致ヲ受ケタル時モ亦同シ

第三十五條　陸軍檢察官要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長各所管ノ長官檢察ノ處分ヲ爲シタル時ハ調書ヲ作リ證憑文書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第五章　審問

第三十六條　司令官被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ左ノ諸項ヲ除クノ外事件ノ難易ニ從ヒ理事ニ下付シ審事ヲシテ其審問ヲ爲サシメ若クハ直ニ其判決ニ付ス可シ

被告人上長官以上ナル時ハ軍管司令官ハ之ヲ陸軍卿ニ具申スヘシ

管所ニ於テ被告人士官以上ナル時ハ營所司令官之ヲ軍管司令官ニ具申ス可シ

第三十七條　陸軍卿審問ノ命令ヲ下ス時ハ其事件ヲ司令官ニ交付シ司令官ハ之ヲ理事ニ下付スヘシ

第三十八條　臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官被告人ノ官等ニ拘ハラス直ニ其審問ノ命令ヲ下スコトヲ得

第三十九條　審事審問ヲ爲ス時ハ先ツ召喚狀ヲ發ス其被告人出廷シタル時ハ即日之ヲ訊問ス可シ

第四十條　審事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第四十一條　審事ハ重罪被告人ニ對シ又ハ其他ノ被告人罪證ヲ湮滅シ若クハ逃走ノ恐アル時若クハ未遂罪脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂クルノ恐アル時ハ直ニ勾引狀ヲ發ス可シ

第四十二條　審事ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ陸軍檢察官若クハ審事若クハ司法警察官ニ其處

分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十三條　審事ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事故アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ証明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十四條　審事ハ被告人ノ所在ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ理事ヲ經テ之ヲ司令官ニ具申スヘシ

司令官ハ各軍管司令官營所司令官及ヒ各控訴裁判所ノ檢事長ニ人相書ヲ送リ其逃捕ヲ求ムヘシ

第四十五條　審事ハ被告人禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ發スルコトヲ得

收禁狀ヲ發シタル後若シ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ス又收禁ヲ要セサル者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ解ク可シ

第四十六條　審事ハ事實審明ノ爲メ臨檢家宅搜索物件押收ノ處分ヲ爲スコトヲ得其處分ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作ルヘシ

若シ其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十七條　審事ハ事實審明ノ爲メ驛遞電信鐵道ノ官署及ヒ諸會社ニ事由ヲ通知シテ被告人ニ關係アル往復文書電報及ヒ物件ヲ收受開披スルコトヲ得若シ其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ第四十六條第二項ノ例ニ依ル

第四十八條　審事ハ証人及通事ヲ呼出スコトヲ得

證人皇族若クハ勅任官ナル時ハ審事其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ証人疾病其他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ証明シタル時ハ審事其所在ニ就テ之ヲ訊問スヘシ

証人若シ遠隔ノ地ニ住スル時ハ其地ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十九條　審事ハ被告人及ヒ証人ノ訊問ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作リ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人若クハ証人ニ讀示セシメ其陳述シタル所ニ違ハサルヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ記ス可シ

被告人及ヒ証人其陳述ヲ變更增減センコトヲ請求スルコトヲ得

第五十條　審事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ要スル時ハ學術又ハ職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者ニ

命シテ其鑑定ヲ爲サシムヘシ

鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其方法結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記シ署名捺印ス可シ

第五十一條　審事ハ証人鑑定人通事正當ノ事故ヲ証明セスシテ其呼出ニ應セサル時ハ二圓以上拾圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ但審事ハ其証人ニ對シ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

証人陳述ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百八十條ニ依リ又鑑定人鑑定ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百七十九條ニ依リ罰金ヲ科ス可シ

第五十二條　証人鑑定人通事ニ罰金ヲ科スル時ハ普通刑法第二拾七條ニ從フ但罰金ヲ禁錮ニ換フル時亦審事之ヲ命ス

第五十三條　審事審問ニ於テ餘罪ヲ覺舉シタル時ハ直ニ本件ト共ニ審問スヘシ

共犯ヲ覺舉シタル時ハ理事ヲ經テ之ヲ司令官ニ具申スヘシ

第五十四條　審事審問ヲ終リタル時ハ其報告書ヲ作リ意見書ヲ添ヘ訴訟文書ト共ニ之ヲ理事ニ交付シ理事ハ意見書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ上申スヘシ

第六章　判決

第五十五條　司令官ハ軍法會議ヲ開ク可キ命令書ヲ判士長ニ下シ其謄本ヲ訴訟文書ト共ニ理事ニ下付シ理事ハ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ

第五十六條　軍法會議ヲ開ク時ハ判士長判士錄事各其席ニ著キタル後判士長被告人ヲ出廷セシム

判士長ハ先ツ被告人ノ官位勳等隊號職名氏名族籍年齡ヲ問ヒ訊問ヲ爲スノ旨ヲ告示シ錄事ヲシテ審事報告書ヲ朗讀セシム

其朗讀終リタル後判士長ハ被告事件ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ其訊問ヲ爲サシム

第五十七條　判士長ハ開廷ヨリ判決ニ至ルマテ令狀ヲ發スルコトヲ得

判士長ハ法廷ニ於テ警戒ノ爲メ其處置ヲ爲スコトヲ得

法廷ニ於テ罪ヲ犯ス者アル時ハ判士長其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ証人鑑定人及ヒ通事ヲ要スル時第五章ノ例ニ依ル

第五十八條　禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人出廷ノ命ニ應セサル時ハ之ヲ引致ス可シ但疾病若クハ正當ノ事故ニ因リ出廷スル能ハサ

ルコトヲ証明シタル時ハ判士長ハ其審判ヲ延期スルヿヲ得

第五十九條　禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人逃走シテ審判ノ日時ニ出廷セス若クハ逃走シテ召喚狀ヲ送達スルヿヲ得サル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第六十條　罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人召喚狀ヲ受ケ審判ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第六十一條　數人共犯ノ審判ヲ爲ス時ハ被告人中闕席シタル者アリト雖モ出廷シタル者ニ對シ審判ヲ爲ス可シ

第六十二條　判士長ハ被告人ヲ訊問シタル後証人ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ訊問セシム可シ

証人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ判士長ハ収禁狀ヲ發シ更ニ訊問ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ訊問ヲ爲サシメ之ヲ司令官ニ具申スベシ

其處分ヲ爲シタル時ハ判士長ハ本件ノ審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十三條　法廷ニ於テ更ニ檢証ノ處分ヲ要スルコトアル時ハ判士長ハ其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ其犯ヲ覺舉シタル時ハ判士長ハ之ヲ司令官ニ具申スヘシ

若シ餘罪ヲ覺舉シタル時ハ本件ト共ニ其審判ヲ爲ス可シ但判士長ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第六十四條　被告人及ヒ証人ノ訊問終リタル時ハ判士長ハ更ニ被告人ニ對シ他ニ陳述ス可キ事件ナキヤ否ヲ問ヒ訊問終リタルノ旨ヲ告ケ被告人ヲ退廷セシム可シ

第六十五條　判決書ハ判士事實ト法律トニ依リ左ノ條件ニ照シテ之ヲ作リ判士長判士錄事共ニ署名捺印シ判士長之ヲ理事ニ交付ス理事ハ訴訟文書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ上申ス可シ

一　有罪ノ判決書ニハ犯罪ノ証憑及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ記ス

二　無罪ノ判決書ニハ被告事件罪ト成ラサルコト及ヒ其理由ヲ記シ犯罪ノ證憑備ハラサル時ハ其旨ヲ記ス

三　免訴ノ判決書ニハ公訴ノ期滿免除ト爲リタルコト大赦アリタルコト法律ニ於テ其罪ヲ全免スルコト及ヒ其理由ヲ記ス

四　被告人ノ官位勳等隊號職名氏名族籍年齢住所及ヒ軍法會議判決ノ年月日ヲ記ス

第六十六條　司令官ハ左ニ記列スルノ事件ハ陸軍卿ニ上申シテ命ヲ請ヒ其他ハ之ヲ專決ス

但營所司令官ハ士官以上ノ犯罪ハ軍管司令官ニ上申ス可シ

死刑

上長官以上ノ重罪輕罪

士官ノ重罪

第六十七條　司令官其判決ヲ不適當ト思量スル時其專決ノ權アル事件ハ直ニ之ヲ再議セシムルヿヲ得

其專決ノ權ナキ事件ハ意見ヲ附シテ陸軍卿ニ上申ス可シ

第六十八條　陸軍卿ハ司令官ヨリ具申スル所ノ判決ヲ不適當ト思量スル時ハ直ニ司令官ニ下シテ之ヲ再議セシムルコトヲ得

陸軍卿ハ死刑並ニ上長官以上ノ重罪輕罪及ヒ士官ノ重罪ニ係ル者ハ上奏シテ命ヲ請フ可シ

第六十九條　宣告執行ノ命令アリタル時ハ判士長判士錄事法廷ニ臨ミ被告人ヲ出廷セシメテ判士長其宣告ヲ爲ス可シ

第七十條　關席裁判ニ係ル刑ノ宣告書ハ軍法會議ノ門前ニ掲示ス可シ

第七十一條　臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官ハ第六十六條ノ權限ニ拘ハラス直ニ其宣告執行ノ命令ヲ下スコトヲ得

第七十二條　軍團師團旅團ノ長若クハ合圍ノ地ノ司令官ハ輕罪ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ニ戴罪服務ヲ命スルコトヲ得但戴罪服務ノ日數ハ刑期ニ算入セス

其戴罪服務中功績アル者ハ司令官其刑ヲ減免スルコトヲ得

第七十三條　行刑ニ關スル方法ハ陸軍卿別ニ之ヲ定ム

第七十四條　臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官ハ時宜ニ依リ此治罪法ノ條目ヲ省畧執行セシムルコトヲ得

第三十八章　罪犯取扱手續幷ニ書式

○明治十六年十月八日陸軍省達

乙第百二號

罪犯取扱手續幷書式左之通相定候條此旨相達候事

罪犯取扱手續幷書式

第一條　陸軍檢察官要塞司令官衛戍司令官諸隊長分遣隊長各所管ノ長官監獄長陸軍治罪法ニ從ヒ檢察ノ處分ヲ終リタル時ハ左ノ書類物品ヲ添ヘ（司令官ノ部下ニ屬セサル諸隊長ニ在テハ各其所管長官ヲ經）司令官ニ具申スヘシ

一　被告人調書
二　被害屆
三　證人調書
四　證據物品其他參考書類
五　鑑定書
六　檢證調書
七　書類及物品目錄書

被告人所屬ノ長官隊長檢察ノ處分ヲナシ具申ヲナストキハ被告人ノ前科素行調書ヲ添フ可シ

第二條　司令官被告事件ヲ審辨シ若クハ理事ノ意見ヲ問ヒ被告事件審問ノ命令ヲ下スヘキ者トナストキハ命令書ヲ訴訟書類ト共ニ理事ニ下付スヘシ

裁判管轄ニアラサル者及ヒ審問ノ命令ヲ下スヘカラサル者ハ其書類ヲ返還スヘシ

審判ノ命令アリタルトキハ理事ハ錄事ヲシテ其事件及ヒ所管隊號氏名等ヲ帖簿ニ登記セシメ之ヲ審事若クハ判士長ニ交付スヘシ

第三條　審事召喚狀ヲ發スル時被告人軍人軍屬ナル時ハ其所屬ノ官廨若クハ本隊ニ移シテ送付ノ處分ヲ求ムヘシ若シ逃走等ノ恐レアルトキハ護送ヲ求ムルヿヲ得但營外居住ノ者ニ係ルトキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシムルヿヲ得

其地ニ所屬官廨若クハ本隊アラサルトキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシムヘシ

召喚狀ヲ受ケ出廷シタル被告人ハ其召喚狀ヲ携ヘ之ヲ軍法會議ニ出スヘシ

第四條　審事勾引狀收禁狀ヲ發スルトキハ憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシムヘシ憲兵卒之ヲ執行シ若クハ執行スル能ハサルトキハ其旨ヲ審事ニ報告スヘシ

第五條　被告人營內若クハ隊伍ニ在ルトキハ憲兵卒ハ該隊長ニ賴リ勾引狀收禁狀ノ執行ヲ求ムヘシ

隊長ハ速ニ之ニ應セシムヘシ

被告人既ニ監倉ニ在ル者ナルトキハ審事收禁狀ヲ監獄長ニ送付シ監獄長ハ速ニ其處分ヲ爲シ之ヲ審事ニ報告スヘシ

第六條　召喚狀勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ニ收禁狀ヲ發シ若シクハ留置ヲ命シタルトキハ監獄附屬ノ會計卒若クハ憲兵卒ヲシテ監

獄ニ護送セシムルヿヲ得勾引狀ヲ以テ監獄ニ付スルトキ又同シ

第七條　審事ハ罰金以下ノ刑ニ該ル者ト認ルトキト雖モ其被告人遠隔ノ地ニアル軍人ナルトキハ監獄ニ留置クヿヲ得

第八條　審事被告人ニ收禁留置ヲ命シ若クハ之ヲ解キタルトキハ被告人所屬ノ官廨若クハ本隊及ヒ監獄ニ通報スヘシ委任以上及ヒ帶勳者ニ係ルトキハ理事ヲ經由シ司令官ニ上申スヘシ

司令官ハ之ヲ陸軍卿ニ上申スヘシ但帶勳者ニ係ルトキハ勳章年金褫奪及ヒ停止取扱手續第九條ニ依リ其處分ヲ爲スヘシ

第九條　証人鑑定人通事ヲ要スル時其証人鑑定人通事ト爲スヘキ者軍人軍屬ナル時ハ其所屬ノ官廨若クハ本隊ニ呼出狀ヲ移シテ其出廷ヲ求ムヘシ但營外居住ノ者ニ係ルトキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシムルヿヲ得

其地ニ所屬官廨若クハ本隊アラサルトキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシムヘシ

呼出ニ應シ出廷シタル者ハ其呼出狀ヲ携ヘ之ヲ軍法會議ニ出スヘシ

第十條　審事ハ被告人所屬ノ官廨若クハ本隊ニ調書ヲ送リ前罰科平素ノ行狀事實相違ノ有無等ヲ問フヘシ但所屬官廨本隊ノ具申ニ係リ事實明瞭ナルモノハ此限ニ在ラス

第十一條　司令官審問終結ノ上申ヲ受ケ其事件不問ニ付スヘキ者ト認ムルトキハ命令書ヲ理事ニ下付シ理事ハ錄事ト共ニ法廷ニ臨ミ之レヲ被告人ニ讀示スヘシ

第十二條　法廷ニ於テ審問ヲ要スル事件發覺スルトキハ判士長審事ニ付シ其取調ヲ爲サシムルヿヲ得

審事取調ヲ終リタルトキハ更ニ報告書意見書ヲ出スヘシ

第十三條　軍法會議ノ判決ハ多數ヲ以テ之ヲ決スヘシ

第十四條　被告人証人ノ陳述前ニ陳述シタル所ト異ナルトキハ錄事其要領ヲ記錄シ理事ト共ニ署名捺印シ訴訟書類ニ添置クヘシ

第十五條　再議ノ命令ヲ受ケタル軍法會議ニ於テ事實明瞭ニシテ更ニ被告人証人ノ訊問ヲ要セサル者トナストキハ直ニ判決ヲ爲スヿヲ得

其宣告ハ命令ヲ下シタル陸軍卿若クハ司令官宣告書ヲ被告人所在ノ地ノ軍法會議ニ移シテ之ヲ爲サシムヘシ

第十六條　判士長令狀ヲ發シ若クハ之ヲ解キタルトキハ第三條第四條

第八條ノ例ニ從フ

第十七條　贓物犯人ノ手ニ在ルトキハ被害者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スヘシ

損害陸軍官署ニ係ルトキハ請求ヲ待タス返還賠償ノ處分ヲ爲スヘシ

第十八條　裁判宣告ノ時傍聽人ノ席ハ左ノ三區ニ別ツ

一　將官及同等官

二　上長官及ヒ士官

三、下士及卒

軍屬奏任ハ上長官士官ノ席ニ判任以下ハ下士卒ノ席ニ於テ傍聽セシムヘシ

第十九條　無罪免訴若クハ罰金科料ノ宣告アリタルトキハ理事直チニ犯人ヲ放免シ收禁留置ニ係リタル者ナルトキハ其旨ヲ監獄ニ通報スヘシ

禁錮拘置ノ宣告アリタルトキハ監獄ニ交付スヘシ

懲役若クハ剝官ヲ附加スル禁錮若クハ普通刑法ニ依リ禁錮ニ處スル將校軍屬及ヒ懲治場ニ留置スル者ハ普通監獄則定ムル所ノ區別ニ從ヒ地方監獄ニ交付シ軍人軍屬ニ非サルトキハ禁錮拘留ニ處スル

時ト雖モ又地方監獄ニ交付スヘシ

徒流禁獄ノ宣告アリタルトキハ監獄ニ交付シ之ヲ司令官ニ具申シ司令官ハ之ヲ陸軍卿ニ上申スヘシ

前數項ノ處分ヲ爲ストキハ裁判宣告書ノ謄本ヲ添フヘシ收禁ニ係ラサル囚人ヲ監獄ニ交付シ其他地方監獄ニ交付スルトキハ第六條ニ從ヒ護送セシムヘシ

第二十條　監視ニ付シタルトキハ監獄長主刑滿限ノ後宣告書ノ謄本ヲ添ヘ犯人ヲ地方警察署ニ交付ス主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタルトキハ理事其處分ヲ爲スヘシ

第二十一條　有罪無罪ヲ問ハス裁判宣告アリタルトキハ理事宣告書ノ謄本ヲ添ヘ本人所屬ノ官廨若クハ本隊ニ通報スヘシ

罰金科料ノ宣告アリタルトキハ理事期限內ニ之ヲ納完セシムヘシ

其犯人營內居住ノ者ニ係ルトキハ所屬隊長ニ照會シテ納完セシメ其監獄ニ在ルトキハ監獄長ニ照會シ監獄長之ヲ隊長ニ照會スヘシ

重罪及ヒ剝官ノ宣告アリタルトキ若クハ將校軍屬其他ノ官吏官職ヲ失フ刑ニ處セラレタルトキハ理事裁判宣告書ノ謄本ヲ以テ所管ノ府縣ニ通報シ死刑ニ處セラレタル者ニ係ルトキハ第三十條ニ照シ榜示

公告スヘキヿヲ照會スヘシ

第二十二條　罰金科料ヲ限内納完セサルトキハ理事禁錮若クハ拘留ニ換ヘンヿヲ判士長ニ求メ言渡書ヲ作リ錄事ト共ニ法廷ニ臨ミ之ヲ言渡スヘシ

犯人遠隔ノ地ニ在ルトキハ言渡書ヲ其所屬ノ長官若クハ隊長監獄長ニ送致シ執行ヲ求ムヘシ長官隊長監獄長ハ其地ノ營倉若クハ監獄ニ於テ執行スヘシ禁錮拘留限内罰金科料ヲ納完シタルトキハ理事放免ノ處分ヲ爲シ之ヲ判士長ニ通知スヘシ長官隊長監獄長ノ執行シタル者ニ係ルトキハ長官隊長監獄長之ヲ放免シ其金圓ヲ理事ニ送致シ理事之ヲ判士長ニ通報スヘシ

第二十三條　罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル前ニ於テ犯人死去シタルトキハ之ヲ徵收セス

第二十四條　錄事ハ宣告ノ年月日及ヒ刑名刑期等ヲ遺漏ナク簿冊ニ登記スヘシ

第二十五條　死刑ヲ執行スルトキハ犯人ヲ刑場ニ護送シ理事錄事醫官之ニ會同シ理事死刑ヲ執行スル旨ヲ犯人ニ告示シタル後小銃ヲ以テ之ヲ射殺ス其護送及ヒ執行ハ本人所屬ノ隊兵一小隊ヲ以テシ警

外若クハ其地ニ所屬ノ本隊アラサルトキハ鎮臺歩兵一小隊ヲ以テ之ニ充ツ死刑執行ノ期日定ル時ハ理事豫メ之ヲ司令官ニ具申シ司令官前項ニ照シ隊兵出場ノ處分ヲ爲スヘシ

第二十六條　死刑ヲ行フトキハ憲兵ヲシテ刑場ノ警戒ヲ爲サシメ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルヿヲ許サス但理事ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第二十七條　死刑執行畢リタルトキハ錄事其始末書ヲ作リ會同ノ官吏ト共ニ之ニ署名捺印シ軍法會議ニ納ムヘシ

第二十八條　左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フヿヲ禁ス

元始祭　孝明天皇祭　紀元節
春季皇靈祭　仁孝天皇祭　神武天皇祭
六月大祓　秋季皇靈祭　神宮神嘗祭
天長節　後桃園天皇祭　新嘗祭
光格天皇祭　十二月大祓

第二十九條　死刑ニ處セラレタル者ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アルトキハ之ヲ下付ス

第三十條　死刑ヲ執行シタルトキハ左ノ各所ニ榜示公告スヘシ

刑ヲ宣告シタル軍法會議ノ門前
犯罪地ノ掲示場
犯人原籍所在地ノ區戸長役場ノ門前

第三十一條　証人鑑定人通事旅費日當止宿料ヲ要求スルトキハ刑法附則第四十九條ニ從ヒ支給スヘシ

第三十二條　理事審事錄事ノ職務ハ理事ハ判決書ヲ作リ會議ニ列シ且軍法會議ニ係ル一切ノ庶務ヲ擔當シ審事ハ被告人証人ヲ訊問シ證憑ヲ拾収シ錄事ハ口供其他犯罪ニ關スル一切ノ書類ヲ作リ及ヒ之ヲ保存スヘシ

第三十三條　司令官事變ニ際シ若クハ戰時ニ在テハ此手續及ヒ書式ヲ變更省略執行セシムルヿヲ得

書式

第一號

被告人調書

府(縣)國區(郡)町(村)何番地住
華士族平民某長男(次男)(弟)
宗門

犯罪事實云々(問答體或ハ供述體)、、、、、、官給品賣却投棄ノ犯ナレハ給與年月日襠袢袴下等ニ係ルトキハ保存期限盜犯ナレハ賍物ノ存不存存セサレハ其品ノ原價買入年月日品質等之ヲ詳記スヘシ但調書中ニ記載シ難キ事項ハ之ヲ別紙ニ記入スルモ妨ケナシ

年月日

兵種隊號(所管)
職官位勳氏名
當何月何年何ケ月
被告人氏名印

第二號

證人調書

何某何々事件云々(問答体或ハ供述体)

兵種隊號(所管)
證人職官氏名印

第三號

鑑定書

何々事件ニ付何々ノ鑑定ヲ命セラレタルニ由リ左ノ如ク鑑定ス

一何々(診斷手續)シタル處何々(理由)ナルニ付何々(結果ヲ得サルトキハ推測)ナルヿ明白ナリ此

他傷ノ輕重大小休業日數現場ノ景況將來治不治ノ徵候等ヲ詳記スルヲ要ス

年月日　　鑑定人職官（職官ナキ者ハ住所）氏名印

第四號

前科素行書

一何年月日何々ノ所爲ニ依リ何年月日刑法何條ニ依リ何刑（刑名刑期）ニ處セラル

一何年月日何々ノ所爲ニ依リ何罰（懲罰科目日數）ニ處セラル

一平素行狀云々

年月日　　（調書ヲ作リタル者）職官氏名印

第五號

被告事件具申書

兵種隊號（所管）職官氏名

右何々之件ニ付取調候處本犯及證人ノ陳述其他證據物件等別紙目錄ノ通リニ候間相當ノ御處分相成度候也

年月日　　職官氏名印

某鎮臺營所）司令官氏名殿

第六號

審問命令書

兵種隊號（所管）職官位勳氏名

右之者何々（訴名）之件訴訟書類并證憑差廻候條審問可致候事

年月日　　軍法會議中　　某鎮臺營所）司令官氏名印

第七號

召喚狀

兵種隊號（所管）職官位勳氏名

右ハ何々事件ニ付訊問之儀有之候條何月何日常軍法會議ニ出廷可致者也

年月日　　某鎮臺營所）軍法會議　　審事（判士長官）氏名印

第八號

勾引狀

兵種隊號(所管)
職官位勳氏名

右ハ何々事件訊問之儀有之候條當軍法會議ニ勾引スヘキ者也
但本人潛匿スル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

某鎭臺(營所)軍法會議
審事(判士長官)氏名印

年月日

第九號
收禁狀

兵種隊號(所管)
職官位勳氏名

右何々事件禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ者ト認ルヲ以テ何所監倉ニ收禁スル者也
但本人潛匿スル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

審事(判士長官)氏名印

年月日

第十號
收禁(留置)并ニ解放通報書

兵種隊號(所管)
職官位勳氏名

右何々之件ニ付取調中月日收禁(留置)ノ處分ニ及ヒ(收禁留置致シ候處月日解放候間此段及御通報候也

某鎭臺(營所軍法會議
審事(判士長官)氏名印

年月日

何官廨(何隊)
御中

第十一號
收禁並解放上申書

兵種隊號(所管)
職官位勳氏名

右何々之件ニ付取調中月日收禁致シ(收禁候處月日解放致シ)候間此段及上申候也

某鎭臺(營所)司令官氏名殿

年月日

第十二號

審事(判士長)氏名印

共犯發覺上申書

兵種隊號(所管)

職官位勲氏名

右ハ兵種隊號(所管)職官氏名被告事件取調候處其共犯ナルヿヲ覺擧致シ候間何分ノ御下命有之度此段及上申候也

年月日

審事(判士長官)氏名 印

某鎮臺營所司令長官氏名殿

第十三號

事實前罰科素行照會書

兵種隊號(所管)

職官氏名

右被告事件取調候處別紙訊問書之通致供述候事實相違無之哉(且前罰科及平素ノ行狀等)御申越有之度此段及御照會候也

年月日

某鎮臺營所軍法會議

審事氏名印

何官廨(何隊)

御中

第十四號

被告人訊問書

本管、、、、、、、

、、、、、、第一號書式ニ同シ

兵種隊號(所管)

職官位勲氏名

年齢

問 其方ノ本官等ハ前ニ示シタル通ニ相違ナキヤ

答 然リ

問 其方ハ前ニ罪ヲ犯シ刑法ノ處分ヲ受ケシヿアリヤ

答 云々

問 勲章從軍記章ヲ賜リタルヿアリヤ

答 云々

問 何々(犯罪事實)

答 云々

問 、、、、、、、

答 、、、、、、、

證憑物件ヲ示シ

問此品々ハ何々ニ用ヒシ者ナリヤ又ハ其所ニテ盗ミ取リシ物ナリヤ(其方ノ所有ナリヤ)、、、、、、、、

答、、、、、、、、

問右陳述ノ外申立ツヘキコトナキヤ

答、、、、、、、、

年月日

氏名印

右被告人某ニ讀聞カセタル處陳述シタル所ニ相違ナキ旨相答署名捺印セシニヨリ本官等左ニ署名捺印スル者也

審事氏名印

錄事氏名印

被告人其陳述ヲ增減變更スヘキコトヲ申立タルトキハ右被告人ニ讀聞カセタル所其陳述ヲ增減(變更)スヘキコトヲ申立タルニ付更ニ其問答ヲ記載スル左ノ如シ

問、、、、、、、、

答、、、、、、、、

以下總テ前書式ニ同シ

第十五號

檢證調書

某何々事件ニ付年月日時檢證ノ爲メ何所家屋ニ到リ之ヲ檢スルニ其家屋ハ何々(方面描造等)而何方ノ墻壁ハ何形ニ破壞シ何器ヲ以テ之ヲ毀チタル者ノ如ク以テ人ノ出入ヲ容易ナラシムヘク而足跡泥痕ヲ留メ何所ヨリ何室ニ連接スルニヨリ立會人其他何々ト共ニ其室ニ入リ之ヲ査スルニ何々(室内ノ景況立會人ノ陳述等)由此觀之其盜ハ何々(墻壁ヲ破壞シ之ヨリ入リ又ハ他ヨリ盜ノ入リタル者ノ如クヲ爲シタルナシ等)ヲ明瞭ナリ因テ何室ニ於テ見出シタル證據物件何々ヲ押收シ其受領證ヲ何々ニ付シ何時檢證處分ヲ終リ本官等署名捺印スル者也

年月日

審事氏名印

錄事氏名印

第十六號

報告書

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

右之者被告事件審問ヲ遂ケ候處某年月日時兵營ヲ脫シ何町古着商ニ官給品ヲ賣リ其代金若干ヲ旅費ニ充テ某所ニ趣キ某日時某所ニ

於テ警察官ニ捕ヘラル自首或ハ歸投又某年月日或ハ夜或ハ二人以上或ハ兇器ヲ持ス等某所ニ入リ門戸墻壁ヲ踰越損壞シ鎖鑰ヲ開キ等何々ヲ竊ミ取リ又某年月日哨兵ニ對シ口論ヲ爲スモ暴行ヲ爲サヽル旨被告人陳述スト雖モ証人氏名ノ陳述及ヒ何々ノ證ニ依ルニ暴行ヲ爲シタルヿ明瞭ナリ因テ訴訟書類證憑相添此段報告候也

年月日

第十七號

審事意見書

審事氏名印

右之者被告事件別紙報告書之通ニ有之其何々ノ所爲ハ陸軍刑法第何條ニ該リ何々ノ所爲ハ何々ノ證憑ニ依レハ何々シタル者ナリト雖モ何々ナルヲ以テ刑法ニ問フ可カラサル者(又何々ノ所爲ハ確定裁判ヲ經或ハ法律ニ於テ其罪ヲ全免ス可キ者等)トス此段意見申陳候也

年月日

第十八號

理事意見書

兵種隊號(所管)　職官位勳氏名

理事氏名印

右之者訴訟書類ニ依リ之ヲ審按スルニ逃亡六日ヲ過キ緝捕セラルヽハ陸軍刑法第何條ニ該シ何々ヲ竊取スルハ普通刑法第何條ニ該ス可キモノトス依テ判決ニ付シ(何々ノ所爲ハ何々ニ因リ罪トナラス或ハ何年月ヲ經ルヲ以テ公訴期滿免除ニ屬ス或ハ確定裁判ヲ經或ハ法律ニ於テ其罪ヲ全免スヘキ者等トス依テ免訴被告人收禁留置ニ係ルトキハ且放免)可然此段意見上申候也

年月日

第十九號

判決命令書

某鎮臺(營所)司令官氏名殿

兵種隊號(所管)　職官位勳氏名

右之者何々之件別紙訴訟書類並ニ證憑差廻シ候條判決可致候事

年月日

軍法會議中

某鎮臺(營所)司令官氏名

第二十號

證人呼出狀（鑑定人通事呼出狀亦之ニ準ス）

兵種隊號（所管）

職官氏名

何々（被告人住所氏名）何々事件ニ付年月日時證人トシテ當軍法會議ニ出廷可致者也

正當ノ事故ヲ證明セスシテ呼出ニ應セサル時ハ法律ニ依リ罰金ヲ科シ又勾引スルヿアルヘシ

證人共任以上ニ係ル片ハ可致ヲ可有之ト爲シ職官氏名ヲ殿宛ト爲ス

某鎮臺（管所）軍法會議

審事（理事）氏名印

年月日

第二十一號

證人訊問書

兵種隊號（所管）（何時際何國區郡町村番地）（身分職業氏名）

職官氏名

年齡

問兵種隊號（所管）本管等ハ前ニ示シタル通相違ナキヤ

答然リ

問事實、、、、

答、、、、

證據物件アレハ之ヲ示シ

問、、、、

答、、、、

以下被告人訊問書ニ準ス

第二十二號

證人罰金言渡書（鑑定人通事之レニ準ス）

本管、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、（第一號書式ニ同シ）

兵種隊號（所管）

職官位勳氏名

年齡

右年月日某被告事件ニ付證人トシテ出廷ヲ命シタル所故ナク呼出ニ應セス因テ陸軍治罪法第五十一條（準用ナ背セサルトキハ普通刑法第百八十條ヲ加フ）ニ依リ罰金何圓ニ處ス

年月日

第二十三號

免訴命令書

某鎮臺(營所)軍法會議

審事(判士長官)氏名印

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

右之者何々ノ件罪トナラス(法律ニ於テ其罪ヲ全免ス)(期滿免除ヲ經)(大赦)等云々因テ免訴(收禁留置ニ係ルトキハ)且放免スル者也

年月日

某鎮臺(營所)司令官氏名印

第二十四號

犯人交付添書

兵種隊號(所管)

職官氏名

右之者別紙宣告書之通處分相成候間本犯及御交付候也

年月日

某鎮臺(營所)軍法會議

監獄長氏名殿

理事氏名印

第二十五號

判決書卽宣告書(無罪免訴判決書之ニ準ス)

本管、、、、、、、、、(第一號書式ニ同シ)

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

年齡

右被告(宣告書ナレハ其方)ハ何々(犯罪事實)何々(證據)ニ依リ明瞭ナリ(又何々陳述)スト雖(証拠)ニ依レハ(何々ノ所爲アリタルヿ明瞭ナリトス)之ヲ法律ニ照スニ何々ニ掲クル所ノ罪ヲ犯シタル者因テ同條ニ依リ何刑ニ處ス(刑官若クハ罰金ヲ附加ス)(沒收品何々法律ニ於テ禁制シタル物件ナルヲ以テ之ヲ沒收ス)(贓物犯人ノ手ニ在ルトキハ)(何々ハ盜品ニシテ犯人ノ手ニ在ルヲ以テ徵收シテ被害者ニ還付ス)(損害賠償物ニ係ルトキハ)(何々ノ損害ハ金若干ヲ賠償スヘシ)(沒收徵收等ノ事項ハ別項ニ記載スルモ妨ケナシ)

年月日

某鎮臺(營所)軍法會議

判士長官氏名印

判士官氏名印

判士官氏名印
判士官氏名印
理事氏名印
錄事氏名印

第二十六號

裁判通報及罰金科料納完照會書

兵種隊號(所管)

職官氏名

右之者別紙宣告書之通處分相成候間此段及御通報候(管内居住ノ者ニシテ罰金ノ宣告アリタルトキハ)一月內ニ罰金納完セシメ(科料ナレハ)十日內ニ科料納完セシメ)候樣御取計相成度此段及御照會候也

年月日

某鎭臺(營所)軍法會議

理事氏名印

何官廨(何隊)

御中

下士上等卒及軍屬禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失フトキハ追テ本犯ハ陸軍刑法第三十條(普通刑法第三十三條)ニ依リ官職ヲ失ヒ候間爲念此段申添候也

第二十七號

重罪及剝官ヲ附加シ若クハ官職ヲ失フ刑ニ處セラレタルトキハ

府縣ヘ通報書

本管、、、、、、
、、、、、、(第一號書式ニ同シ)

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

右之者別紙裁判宣告書之通何日致處分候條此段及御通知候也

年月日

某鎭臺(營所)軍法會議印

府(縣)

御中

第二十八號

罰金科料ヲ禁錮ニ換ユル言渡書

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

右之者何々之罪ヲ犯シタルニ依リ年月日若干ノ罰金(科料)申付ル處一月(十日)ヲ過ルモ未タ納完セサルヲ以テ陸軍刑法第二十七條ニ依

リ普通刑法第二十七條第三十條（附加ノ罰金ナル時ハ第四十二條ヲ加フ）ニ照シ輕禁錮（拘留）何日ニ換フル者也

年月日

某鎭臺（營所）軍法會議

判士長官氏名印

第二十九號

死刑執行始末書

本管、、、、、、、、

、、、、、（第一號書式ニ同シ）

職官位勳氏名

年齢

右之者年月日何所ニ於テ何罪ニヨリ死刑ヲ執行スルニヨリ臨場撿視シ其始末ヲ錄スル左ノ如シ

一何時何分某軍法會議ニ於テ宣告ヲ爲シ何時何分何隊犯人ヲ護送シ刑場ニ來ル

一理事某犯人ニ死刑ヲ執行スル旨ヲ告ケ等外吏ニ命シ何々ヲシテ其準備ヲ爲サシム須臾ニシテ準備整フヲ報ス理事乃チ之ヲ小隊長ニ告ケ小隊長射手ニ令ス射手進ンテ何歩ノ地ニ立（或ハ跪シ）一發兩眉ノ間ヲ洞ス醫官親接反覆熟視絶命ヲ報ス理事更ニ撿査シ之ヲ隊長ニ告ケ隊長整列ヲ解キ理事何々ニ命シ埋葬ノ手續ヲ爲サシメ（現場某ニ下付ス）何時執行處分全ク畢ル因テ其始末ヲ錄シ署名捺印スル者也

年月日

醫官氏名印

理事氏名印

錄事氏名印

第三十號

死刑掲示

本管、、、、、、

、、、、、（第一号書式ニ同シ）

兵種隊號（所管）

職官位勳氏名

年齢

宣告全文ヲ掲ク、、、、、、、、、、、、、、

右之通宣告候ニ付公告スル者也

年月日

某鎭臺（營所）軍法會議

第三十一號

人相書

本管、、、、、、、、、、、、第一号書式ニ同シ

兵種隊號(所管)

氏名

年齢

丈

顔

色

頭

髪

眼

眉

鼻

口

耳

歯

音聲

疵痕

疵所

鬚髯ノ有無

其他特徴

長所

父母妻子

逃走ノ際着用衣服

同上ノ際持去物品

同上ノ際殘置ク物品

犯罪事件ノ概畧

他ニ處分ヲ求ムル時ト管下ニ達スル時トニ依リ別紙ニ照シテ之ヲ記入ス

（別紙）

他ニ處分ヲ求ムル時

右之者何々ノ犯罪有之候處所在分明ナラサルニ依リ（或ハ何獄何所ヘ收禁拘引中何年何月何日何時何分逃走候ニ付）捜索ノ上逮捕之御處分有之度候也

明治　年　月　日　　某鎮臺（營所）司令官　氏名印

某鎮臺（營所）司令官

某控訴裁判所檢事長　氏名殿

管下ニ達スル時

右之者何々ノ犯罪有之所在分明ナラサルニ依リ（或ハ何獄何所ヘ收禁拘引中何年何月何日何時何分逃走候ニ付）（他ヨリ請求ニ係ルトキハ捜査ノ上逮捕方囑託有之候ニ付）嚴密捜索ヲ遂ケ見當次第逮捕スヘキ者也

但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ捜索スヘシ

明治　年　月　日　　某鎮臺（營所）司令官　氏名印

第三十三號　判士長以下列席圖

○罪四（此位置ハ將校下士等ヲ分タス）
○證人
○證人

○判士少將
○判士大將
○判士長中佐若クハ少佐
○判士中將
○判士理事

○參事
○證人

○判士少將
○判士大將
○判士長中佐若クハ少佐
○判士中將
○判士理事

○書記
○書記
○書記
○書記

上ニ掲クル所ノ書式ハ二三概略ノ例ヲ示ス者ニシテ凡百文書ノ式ヲ枚舉シ盡スモノニ非ル也然ヘ陸軍人ノ例ヲ擧ケテ平民ニ及ハス證人ヲ例シテ鑑定人通事ヲ例セス若事ニ關スルモノヲ掲ケテ判士長檢察官ニ關スルモノヲ掲ケス若クハ檢察官命スル所ノ醫師ノ鑑定書ヲ擧ケテ除若クハ判決ニ於テ命スル鑑定書ヲ示サス竊盜ノ檢證書ヲ掲ケテ其他ニ及ハス照會書通報書ノ如キモ甲ヲ擧ケ乙ヲ省クノ類是ナリ況ヤ變態百出ノ事物發行書式ノ能ク盡スニ非ルハ固ヨリ論ヲ待タサルニ於テヤ夫ノ範圍ノ中ニ拘々シ爲メニ行文澁滯シ若クハ事務煩雜ニ失スル若キハ則書式ヲ設クル所以ノ旨趣ニ非ルヲ以テ實際事ニ當ル者頻ヲ推シ列ニ從ヒ簡易明瞭ヲ主トシ詳略宜シキヲ得セシムヘシ

第三十九章　陸軍監獄則

○明治十六年十月廿四日陸軍省達乙第九號

陸軍監獄則別冊之通相定候條此旨相達候事

陸軍監獄則目錄

第一章　總則
第二章　監署ノ規程
第三章　監獄ノ構造
第四章　役法及ヒ工錢
第五章　通信接見
第六章　賞譽
第七章　懲罰

陸軍監獄則

○罰例
第七章　懲罰
第四十一條　已決囚此第一條ノ陸軍監獄ヲ別テ右ノ三種ト爲ス
獄則其他獄內若ハ
一　監倉　未決者ヲ拘禁スル所トス
服役ノ爲メニ設ル所
二　禁錮場　禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁
ノ規則ヲ犯ス時ハ其
輕重ニ從リ左ノ罰例
三　拘留場　拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留
ニ從テ處分ス
一絕信　親屬故舊ト

○監獄則

第一章　總則

又各兵營內及ヒ憲兵部ニ留置場ヲ置キ未決者ヲ

通信接見ヲ絶ス

一時留置スル所トス但時宜ニ依リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルヿヲ得

二屏禁　晝夜他ノ監房若クハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ倘ホ座作ノ役ヲ科ス

第二條　監獄ハ軍法會議所在ノ地ニ置キ鎮臺ニ在テハ軍管司令官所ニ在テハ營所司令官ニ屬ス

第三條　監獄ハ會計一等軍吏ヲ以テ監獄長トシ會計二三等軍吏ヲ以テ監獄副長トシ會計書記ヲ以テ看守長及ヒ書記トシ會計卒ヲ以テ看守トシ其他二三等軍醫看護長看病卒及ヒ押丁ヲ置ク

三減食　常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス

第四條　軍管司令官及ヒ營所司令官ハ臨時監獄ヲ巡閲スヘシ

理事及ヒ審事モ亦臨時監倉ヲ巡閲スヘシ

四閤室　閤室ニ獨居セシメ常食

第五條　在監人ト稱スル者ハ未決已決ノ者ヲ謂フ

第六條　十六歳未滿六十歳以上ノ者及ヒ婦女ヲ入監スルヿアル時ハ普通監獄則ノ例ニ照シテ之ヲ區處スヘシ

第七條　第二章　監署ノ規程

在監人ハ左ノ區別ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ寢具ヲ禁ス

但已決囚ハ各刑名ニ從ヒ仍ホ其監房ヲ別異スヘシ

一　准士官以上及ヒ同等ノ軍屬

二　下士及ヒ同等ノ軍屬

三　諸卒諸生徒等外以下ノ軍屬

第八條　在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ傳告者誘工者ト爲ス傳告者ハ官吏ノ命令ヲ在監人ニ傳ヘ誘工者ハ工場ニ在テ服役者ヲ勸誘セシム但傳告者ハ有限若クハ無限トシテ滿六月以上之ヲ繼續セシムルヿヲ得ス

第四十二條　絶信屏禁ハ減食閤室ハ七晝夜ヲ限リトス減食閤室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキ時ハ一旦之ヲ免シ更ニ之ヲ科スルヿヲ得

傳告者誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若クハ凌辱スル所爲アルヲ許サス

第九條　刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期ノ翌日午前第十時ヲ過クヘカラス

第十條　死刑ニ處セラレタル者若クハ在監中死去スル者ノ所有ニ屬スル貨物ハ親屬若クハ故舊ニ下付スヘシ

第四十三條　未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ

親屬故舊遠隔ノ地ニ在リ許多ノ遞送費ヲ要スル

若教令ニ順ハス或ハ同監ノ者ヲ煽惑シ其他規則ヲ犯ス時ハ所犯ノ軽重ニ量リ第四十一條ニ準據シ減食スルヿヲ得

第四十四條　賞表ヲ有スル者處罰ヲ受クル時ハ賞表一個若クハ數個ヲ褫奪ス

第四十五條　減食若クハ閉室ノ罰ニ處ス可キ者アル時ハ醫官ヲシテ診視セシメ身体ニ妨ナキヲ證シ然後之ヲ行フヘシ

第四十六條　罰則ニ處シ其代價ヲ送致スルヿヲ得遞送ノ費用ハ領収スル者之ヲ償フヘシ其貨物若シハ代價ヲ受クヘキ親屬故障ナキトキハ之ヲ没収ス

第十一條ニ在監人病死スル者アルトキ其遺骸ハ親族若クハ故舊ノ請フ者ニ下付ス若シ請フ者ナキトキハ之ヲ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建ツヘシ但下士以下別ニ定メル所ノ規則ニ依リ處分スヘキ者ハ其規則ニ從フヘシ

第十二條　在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ第十條ノ例ニ依テ處分スヘシ但没収ハ逃走ノ日ヨリ滿一箇年ヲ經ルノ後ニ非レハ之ヲ處分スルヿヲ得ス

營内居住ノ者ニ於テハ之ヲ本隊ニ送致スヘシ

第十三條　監獄ノ近傍ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ獄吏其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避ケシムヘシ

水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ遑ナキ時ハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルヿヲ得

未決者ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服セラレタル者改悛ノ狀ヲ表スル時ハ之ヲ免スルヿヲ得

第十四條　寢具若クハ飲食物ヲ贈ラント請フ時ハ之ヲ許シ酒類烟草其他攝生ニ害アル者ハ之ヲ許サス但書籍ハ内務書及ヒ操典若クハ修身營業ニ必用ナル者ニ限リ飲食物ハ炊烹ヲ要セサル者ニシテ一人一食ノ量ニ限ルヘシ

第十五條　已決者ニハ前條ニ掲クル書籍及ヒ用紙ノ外差入品ヲ許サス

第三章　監獄ノ構造

第十六條　監倉禁錮場一區域内ニ在ル者ハ墻壁ヲ以テ之ヲ區畫ス

拘留場ハ禁錮場ノ監房ヲ分チテ之ニ充ツ

第十七條　病室ハ監獄内ニ設ケ傳染病室ハ之ヲ區別ス

閉室ハ禁錮場内ニ設ク閉室ハ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシメサルヲ要ス

第十八條　甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼此交談シ又ハ物件ヲ交通スルノ便ヲ得サラシムヘシ

第十九條　接見室ハ監獄内ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ之レニ縱横ノ格子ヲ懸メ在監人ハ格子内ニ立タシメ外人ハ格子外ノ柵柵ニ倚ラシム其柵柵ハ格子ヨリ三尺ヲ距ルヘシ

第四章　役法及ヒ工錢

第二十條　定役ニ服スル者ノ作業ハ毎四一日ノ科程ヲ定メ服役セシム若シ病後ノ疲勞等ニ因リ勞作ニ堪ヘサル者ハ其体力ニ應シ科程ヲ寛恕ス

第二十一條　左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス

父母ノ喪ニ遭フ者亦一日免役ス

一月一日　一月二日　紀元節　元始祭
孝明天皇祭　春季皇靈祭
神武天皇祭　秋季皇靈祭
天長節　神嘗祭
新嘗祭　十二月三十一日

第二十二條　定役ニ服スル囚徒現役十日ヲ經レハ始メテ各自ノ工錢ヲ料定シ之ヲ十分シテ其八分ヲ監署ニ收納シ二分ヲ與フ定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決者ニシテ作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三分ヲ監署ニ收メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒當日ノ科程ヲ畢テ仍ホ作業スル者科程外ノ工錢亦之ニ準ス

第二十三條　服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期一百日以内ハ工錢ヲ給與セス

第二十四條　在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ領置シ毎月ノ首ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第二十五條　各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應シテ之ヲ定ムヘシ

第二十六條　監署ニ領置ノ工錢ハ本人ノ請ヒニ由リ親屬ニ贈與スルヲ許シ又必用ノ物品及ヒ第十四條ノ書物若クハ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヲ得

第二十七條　在監人死去スル時其領置ノ工錢ハ第十條ノ例ニ照シ處分スヘシ

第二十八條　在監人逃走スル時其領置ノ工錢已決四ニ係ル者ハ之ヲ沒收スヘシ

未決者及ヒ定役ニ服セサル囚徒若クハ定役ニ服スル者ト雖モ科程外ノ勞作ニ依リテ得タル工錢ハ親屬ニ下付シ親屬ナキ時ハ之ヲ沒收ス

營内居住ノ者ニ在テハ第十二條ノ例ニ照シテ處分スヘシ

第五章　通信接見

第二十九條　已決囚其親屬故舊ニ書信ヲ贈ルハ六月間ニ一次トシ一次一通ニ過ルヿヲ得ス但官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ若クハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ司獄官吏必用ト認ムル時ハ此限ニ在ラス

第三十條　未決者ニ係ル信書ハ定限ナシ但審事若クハ理事ノ閲檢ヲ經ルニ非レハ贈答セシムルヿヲ得ス

第三十一條　在監人ノ發スル信書ハ監獄長之ヲ閲檢スヘシ若シ書中忌諱ニ渉ル等ノ文意アル時ハ通信スルヿヲ許サス

第三十二條　外人ヨリ在監人ニ贈リ來ル信書ハ監獄長之ヲ閲檢シ適正ノ事項ヲ述ヘ若クハ遷善ノ論示ヲ主トスル者ニ限リ之ヲ本人ニ附與ス可シ書中忌諱ニ渉リ若クハ在監人ノ改悛ヲ妨ル者ト認ルトキハ之ヲ附與スヘカラス親屬故舊ノ信書ハ監獄署ニ宛差出サシムヘシ

第三十三條　在監人ニ接見セント請フ者アル時ハ監獄長先ツ之ニ面接シテ族籍職業氏名等ヲ訊ヒ其緣由旨趣ヲ詳悉シ已ムヲ得サルノ事狀アリテ形狀ノ疑フ可キフナキトキハ之ヲ許シ看守長看守並ヒ監ンテ面會セシム但未決者ニ係ルトキハ監獄長之ヲ理事若クハ審事ニ照會シテ之ヲ許否スヘシ

面會ノ時間ハ三十分時ヲ過クルヿヲ得ス若シ最初陳述シタル面會ヲ請フノ旨趣ニ違ヒタル談話ヲ爲ス時ハ直チニ之ヲ停止ス

第三十四條　死刑執行ノ以前又ハ徒流禁獄ノ刑ヲ受ケタル囚徒ヲ集治監ニ押送スル以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ前條ノ規則ニ從ヒ面會セシム但其時間ハ五十分時ヲ過ルヿヲ得ス

第六章　賞譽

第三十五條　已決囚獄則ヲ識守シ且改悛ノ狀著キ者ト監獄長ニ於テ認ムルトキハ之ヲ賞與スヘシ

第三十六條　賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣ノ左袖肩臂間ノ表面ニ方二寸ノ藍色布ヲ縫着スヘシ

第三十七條　賞表ハ特赦ヲ具狀スルノ參考ト爲スヿヲ得

第三十八條　賞表ヲ得タル者ニハ一月間ニ一次親屬故舊ニ接見及ヒ通信スルヿヲ許ス

第三十九條　已決囚在監人ノ逃走ヲ密告若クハ捕獲シ或ハ監獄ニ稟

ル水火災ヲ防禦シ或ハ人命ヲ救援スル者アルトキハ金弐拾五錢以下ヲ賞恤ス其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請求アルトキハ必用品若クハ食物ヲ購ヒ之ヲ給スヘシ

第四十條　未決監ニ在ル者前條ノ勞動アル時ハ之ヲ錄シテ軍法會議ノ參考ニ供スヘシ

（第七章以下上段ニ在リ）

第一節　監獄署設置

○明治十六年十月廿四日陸軍省達

乙第百十一號

各鎮臺及青森金澤丸亀小倉ノ四營所ヘ監獄署ヲ置キ某地名陸軍監獄署ト相稱候條此旨相達候事

第三節　監獄署定員表

○明治十六年十一月一日陸軍省達

乙第百十三號

陸軍監獄署定員別表之通相定候條此旨相達候事

陸軍監獄署定員表

官名 / 地名	一等軍吏	二等軍吏	三等軍醫	一等書記	二等書記	三等看護長	會計卒	看病卒	計
監獄長	監獄制長	醫官	看守長	書記	看守				
東京	一	三	一	六	六	一	二十四	二	四十三
仙臺	一		一	三	三	一	八	一	十八
青森	一		一	二	二	一	五	一	十三
名古屋	一		一	三	三	一	八	一	十八
金澤	一		一	二	二	一	五	一	十三
大阪	一	一	一	四	四	一	十六	一	二十九
廣嶋	一		一	三	三	一	八	一	十八
丸亀	一		一	二	二	一	五	一	十三
熊本	一		一	三	三	一	十	一	二十

小倉	一	二	一	五	一	十三
十	三	十	十	九十四	十一	百九十八
三十	十	三十	十	九十四	十一	百九十八

備考　看守長看守ノ定員ハ最上限ヲ示スモノナリ故ニ四人寡少ノ時ニ在テハ減少スルヿアルヘシ

第四節　陸軍監獄署官員服務概則

○明治十六年十月廿四日陸軍省達乙第百十號

陸軍監獄署官員服務概則別冊之通相定候條此旨相達候事

但明治九年九月達第百四十號達ハ廢止ト可相心得事

第一條　新ニ入監スル者アル時ハ監獄長先ツ拘引狀収禁狀裁判宣告書等ノ文書ヲ査閲シテ之ヲ領収シ其領収ノ証ヲ引致シ來ル者ニ交付ス其文書ナキ者ハ之ヲ入監スヘカラス其入監者ノ名籍ハ軍法會議ノ報知ヲ得テ書記ヲシテ其要項ヲ錄セシム

第二條　監房ニ入ルヽ物品ハ監獄長之ヲ檢査シ其危險ノ慮アル者ハ之ヲ禁スヘシ

第三條　定役ニ服セサル囚徒ト雖モ監獄長之ヲ勸誘シ自ラ勞作センヿ請フニ至ラシムルヿヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ監獄長ノ指示ニ依ル

第四條　監獄長ハ不時ニ監房ノ内外ヲ巡視シ或ハ物件ヲ査閲スヘシ

第五條　監獄長ハ看守長及看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ錄セシメ以テ賞罰ヲ行フノ參考ト爲スヘシ

賞罰ヲ行ヒタルトキハ第四十四條ノ例ニ依リ在監人ニ示スヘシ

賞表ヲ與ヘタル時ハ賞表簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ若シ褫奪シタル時ハ之ヲ刪除スヘシ

第六條　在監人滿刑ノ者アル時監獄長ハ其本人ノ所管ヘ其旨ヲ滿期三日前ニ通報スヘシ

第七條　共犯ニ係ル未決者ハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法廷ニ押送スル時亦同行セシムルヿヲ得ス但犯狀ニ依リ之ヲ別異セサルヿヲ得

第八條　要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル監倉ニ於テハ其氏名ヲ呼ハス

番號ヲ以テ之ニ換フヘシ其着衣ノ外襟ニ白布ヲ縫着シ番號ヲ墨書シ監房ヲ出入スル毎ニ皂布ヲ以テ覆面シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿チ其犯者ヲシテ共ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スルヿヲ得サラシム

第九條　前二條ハ理事若クハ審事ノ報ヲ得テ監獄長其指揮ヲナスヘシ

第十條　入監人ノ携有スル財物若クハ物品ハ看守長悉ク點檢シテ其名數ヲ簿冊ニ記載シ監獄長證印シテ之ヲ領置シ解放ノ時還附スヘシ但點檢ノ際隱匿スル貨物ハ之ヲ沒收ス

其領置ノ貨物ヲ以テ親屬ヲ扶助シ其他正當ノ費用ニ充ント請フ時ハ之ヲ許ス未決者ニ係ルトキハ理事審事ニ照會シテ之ヲ行フ

第十一條　看守長ハ入監者ノ全身ヲ檢査シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒クヘシ

第十二條　看守長ハ總テ在監人ノ姓名ヲ簿冊ニ記載シ之レニ番號ヲ付シ監房ノ出入ヲ明瞭ニスヘシ

第十三條　看守長ハ日夜監房ノ内外ヲ巡視シ或ハ物件ヲ査閲スヘシ

第十四條　看守長ハ毎日終役ノ際工業ノ諸器械ヲ牒簿ニ照シテ點檢スヘシ

第十五條　看守長書記ハ月末毎ニ諸工業ニ關スル需用品ノ檢査ヲ遂ケ其費消高及殘餘等ヲ監獄長ニ申報スヘシ

第十六條　在監人ヲ軍法會議其他ヘ護送スル時看守長ハ監獄長ノ達ヲ受ケ看守ヲシテ護送セシムヘシ若シ病囚アレハ醫官ノ診斷ニ依リ乘車セシムルヿアリ

第十七條　在監人ヲ他監ニ移ス時ハ其名籍若クハ處刑ノ宣告其他必用ノ文書及領置ノ貨物ヲ具シ看守長ヲシテ其引渡シヲナサシム

第十八條　毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整列セシメ看守長及ヒ看守點檢スヘシ可シ還房セシムル時亦同シ

第十九條　看守長ハ日々製造品ノ檢査ヲナシ翌日ニ至リ其物品ヲ監獄長ニ差出スヘシ

第二十條　看守長ハ被服寢具ノ欠乏アルトキハ監獄長ニ請求シ之ヲ受取リ囚徒ノ姓名及ヒ被服ノ番號ヲ牒簿ニ記載シテ貸與スヘシ

第二十一條　書記ハ日々遺漏ナク已決未決ノ名籍ヲ調査シ滿刑放免ノ期日ヲ計算シ報告書ヲ作リ監獄長ニ差出スヘシ又記錄ヲ明瞭ニシ文書ノ錯雜ナカラシメンヿヲ要ス

第二十二條　書記ハ毎月囚徒ノ製造セル物品ノ數量價位等ヲ牒簿ニ

詳記シ監獄長ノ閲檢ヲ受クヘシ

第二十三條　看守ハ晝夜間斷ナク獄舍內外ヲ巡視シ破牢越獄等ノナカラシメンヿヲ要ス又獄則ニ違フ者アル時ハ其旨ヲ看守長ニ申告スヘシ

第二十四條　在監人法廷ニ出ル時及運動入浴其他都テ獄舍ヲ出入スル時ハ看守之ヲ監視シ毫モ怠慢スヘカラス

第二十五條　看守ハ工役ノ督責ニ任シ日々ノ製造高ヲ牒簿ニ記シ調印シテ其物品ト共ニ看守長ノ檢印ヲ受クヘシ

第二十六條　囚徒ノ製造品賣却代價ノ中ヨリ器械費及需用費等ヲ引去リ其利益金ハ毎月官納スヘシ

第二十七條　在監人ヨリ發スル信書ハ必ス書信用紙ヲ用ヒシメ司獄官吏之ヲ檢シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某陸軍監獄署ト記シ之ヲ遞送ス但郵便稅ハ自辨セシム其自辨スル資力ナキ者ニハ之ヲ許サス

第二十八條　門ノ開閉ハ日出日沒タルヘシ其鑰ヲ宿直官吏之ヲ領置シ開門ノ時々門番ヘ授クヘシ

第二十九條　門ノ通行ハ陸軍ノ徽章アル者ノ外ハ姓名及其事由ヲ問

ヒ之ヲ許ス已決未決監ノ門ハ陸軍徽章アル者ト雖モ監獄長ノ達ニ非サレハ通行セシムルヿヲ得ス

第三十條　司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ秉リ劃令ニ照シ處分スルノ外恣ニ責罰スルヿヲ得ス

第三十一條　在監人書籍ヲ看ント請フ者アルトキハ內務書及操典若クハ修身營業ニ必用ナル者ノミ之ヲ許スヘシ

第三十二條　未決者法廷ニ出ル時制服ヲ所持セル者ハ之ヲ着セシム但帶劍ヲ許サス

第三十三條　未決者及定役ニ服セサル已決囚ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム又毎日一時間以內監房外ニ於テ運動セシム

第三十四條　定役ニ服スル者ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢テ喫飯セシム其起床ヨリ約ヲ一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前第十時前後ニ於テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休役ス午飯後暫時休憩シ再ヒ就役日沒前役ヲ罷メシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム但時宜ニヨリ其時間ヲ伸縮スルヿヲ得

起床還房及就役休役其他動止ヲ令スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監

一齊ニ動止セシム

第三十五條　囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業手若クハ工業殊等ノ囚ヲシテ之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授クルヿヲ要ス

第三十六條　科程ヲ畢リタル者ハ時間ニ拘ハラス役ヲ罷メシム午飯ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヤヲ驗視シ若シ怠役スル者ハ飯後ノ休憩ヲ許サス

第三十七條　工業勉勵シテ食費ヲ償フ可キ工錢ヲ得ル者ニハ其請ヒニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヿヲ得但一日金三錢ニ過クルヿヲ得ス

定役ニ服セサル者ニハ其請ヒニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヿヲ得但一日金五錢ニ過クルヿヲ得ス

第三十八條　在監人各自ノ工錢ヲ以テ物品ノ需用ヲ願フ時ハ一週日毎ニ買辨支給スルモノトス

第三十九條　浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月ニ至ルマテハ三日毎ニ一次十月ヨリ五月ニ至ルマテハ七日毎ニ一次トス

第四十條　已決囚ノ髮ハ之ヲ短薙スヘシ

第四十一條　衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ澣ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クヿヲ要ス但病者ノ物品ト混一ニシテ之ヲ曝洗ス可カラス

第四十二條　燈火ハ監房外ニ置キ危險ノ虞ナカラシム

第四十三條　監房ニハ常ニ左ノ器具ヲ備ヘ置クヘシ

一時水器　木製
一洗手盥　木製
一飲器　木製
一唾器　木製
一便器　木製　但監房ニ厠圊アルモノハ此器ヲ用ヒス
一鼻箒
一雜巾

第四十四條　特赦ヲ受ケタル者アル時ハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ於テ他ノ囚徒ニ其旨ヲ告達シ仍ホ之ヲ掲示スヘシ

第四十五條　各監房內ニ於テ左ノ諸款ヲ掲示シ傍訓釋義シテ解シ易カラシム可シ若シ文字ヲ知ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十四時內ニ於テ之ヲ讀示スヘシ但未決監ニハ第二款第九款ヲ掲示セス

掲示

一在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スヘシ

一平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就ク時ハ愼テ容止ヲ正フスヘシ

一毎朝父母若クハ其墳所在ノ方位ニ向テ禮拜ス可シ

一毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及席壁厠圃等ヲ掃除スヘシ

一空壁若クハ物件ヲ汚損シ唾壺外ニ唾シ貯水ヲ濫用スルヿヲ禁ス

一監外ニ出タル時其途上ニ於テ同行ノ者ト交談シ及手ヲ交ヘ或ハ路人ニ聲語スルヿヲ禁ス

一夜間ハ最鎮靜ヲ主トシ談話或ハ發聲或ハ濫リニ起歩スルヿヲ禁ス晝間ト雖モ放歌喧噪或ハ高聲ニ誦讀シ又ハ隣房ノ者ト談話スルヿヲ禁ス

一許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ或ハ賭博類似ノ惡戲ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ渉ルカ如キ所爲アルヿヲ禁ス

一服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩ノ時間部外ノ工場ニ到ルヿヲ禁ス

一許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヿヲ禁ス

一總テ顧問官吏巡視ノ際申出ヘシ

一監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ヲ拘ハラス直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一日沒後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非サレハ翌朝ニ至テ醫療ヲ乞フ可キ者トス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタル時ハ監房ヨリ看守所ニ架スル所ノ繩器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ

一病者アル時ハ同房ノ者共ニ介抱ニ力ヲ致ス可キハ勿論其看護人タラシムル者ハ切實ニ之ヲ看護スヘシ

一水火風震ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時内ニ監獄署或ハ憲兵部又ハ警察署ニ其旨ヲ首出スヘシ

右ノ諸款ニ違フ者アルヿヲ知テ告ケサル者ハ其情狀ヲ量リ處分ス可キ者ナリ

年號月日

第四十六條　滿刑歸隊歸鄉ノ者ヘハ旅次証書ヲ付與ス可シ其証書ニ

某陸軍監獄署

ニハ某陸軍監獄署ト記シ署印ヲ捺ス可シ

第四十七條　在監人醫官ノ診斷ヲ頗フ時ハ看守長其姓名ヲ牒簿ニ記載シ醫官ニ申報スヘシ

第四十八條　醫官ハ在監人一般ノ健康ヲ保全シ毎日囚徒就役時限前病者ヲ診察シ輕役休業監房入室等ヲ區分シ看守長ニ指示スヘシ

第四十九條　病者ノ攝養ニ害アル飲食物若クハ湯婆等ヲ用ユルヿヲ要スル時ハ醫官其旨ヲ證明シ監獄長之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第五十條　傳染病侵襲ノ兆ヲル時其消毒豫防ヲ愼密ニス可シ若シ在監人中傳染病者アル時ハ直ニ病性及感染ノ形狀ヲ詳悉シ醫官ノ診斷書ヲ副ヘ所屬ノ長官ニ申報ス可シ

第五十一條　在監人死去スル時ハ監獄長醫官看守長會同檢屍ス可シ檢屍畢リハ其狀況及月日時限ヲ記載シ醫官ノ診斷書ヲ附ヘ本人所屬ノ長官ニ申報ス可シ該隊不在ノモノハ監獄署ニ於テ陸軍墓地ヘ埋葬シ其費用ハ本隊ヨリ償還セシム若シ軍人屬ニ非サル者ハ本籍ノ戸長（戸長ナキ地ハ區長）及近地ノ親屬著クハ故舊ニ通知スヘシ

未決者又ハ已決囚ニシテ再ヒ訊問ニ係ル者ハ會軍法會議ニハモ之ヲ通知スヘシ

第五十二條　看守長ハ調劑及治療器械ノ磨拭等ヲナシ又患者ノ被服其他需用ノ物品ハ監獄長ニ請求シテ之ヲ受授セシム

第五十三條　若病卒ハ患者ヲ切實ニ看護シ又常ニ病室ヲ清潔ニ掃除スヘシ

用紙美濃紙

監獄長（檢印）未決者名簿　主檢　何等書記　氏名　印

隊號兵種本管	某管下國郡區町村番地住族又ハ某子弟	職業及ヒ親屬	職業ヲ詳記ス可シ父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無	入監ノ年月日時罪件	明治何年月日午前後何時入監
產地族籍氏名	何國郡區町村產	年齡	當何年何月何年何ヶ月	乳兒提携	男或ハ女又盜ノ時何年何ヶ月

官　氏　名

某年月日生

身材　長何尺何寸何分肥瘠强弱

容貌音聲　面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑(アバタ)猴子(イボ)癩(コブ)瘤(ナマス)黑痣(ホクロ)癤風(アザ)天疱瘡(キヤスアト)創瘢(キヤスアト)ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス

教育宗門　文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス何宗或ハ宗門不詳

入監中勞動及ヒ處罰　明治何年月日何々ノ勞動アリ明治何年月日何罰ヲ行フ

書信贈答ノ年月日　明治何年月日國郡町村住親屬若クハ朋友ニ書信發來

當該官ノ氏名　判士長及審事ノ名

事變　明治何年月日病死或ハ變死或ハ脫監

終結　明治何年月日放免若クハ刑ノ宣告執行又ハ他監押送

用紙美濃紙

監獄長(檢印)已決囚名簿　主檢官何等書記氏名印

隊號兵種本管　某管下國郡區(町村)番地住族又ハ某子弟

產地族籍氏名　何國郡區(町村)產　隊號職名　官氏名

年齡　某年月日生　當何年何月何年何ケ月

職業及ヒ親屬　職業ヲ詳記ス可シ父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無

刑名及ヒ宣告ノ月日軍法會議ノ名稱　何刑若干年月日明治何年月日何軍法會ニ於テ宣告

入監ノ年月日　明治何年月日午(前後)何時入監

犯由ノ大略及ヒ犯數　財物ヲ竊取シ或ハ人ヲ毆傷スル等犯罪ノ大略ヲ記ス若シ再三犯ナレハ往年何罪ヲ犯シ某軍法會議ニ於テ何刑ニ處セラル

身材　長何尺何分肥瘠强弱

容貌音聲　面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑(アバタ)猴子(イボ)癩(コブ)瘤(ナマス)黑痣(ホクロ)癤風(アザ)天疱瘡(キヤスアト)創瘢(キヤスアト)ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス

教育及ヒ宗門　文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲ爲スヲ得或ハ善ク讀書ヲ爲ス何宗ハ或宗門不詳

入監中ノ賞罰　明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ

書信贈答ノ年月日　明治何年月日何國郡町村住親属若クハ朋友ニ書信發來

假出獄　明治何年月日假出獄

事變　明治何年月日病死或ハ變死或ハ脫監或ハ何ノ罪ヲ犯シ復ヒ決監ニ入ル

終結　明治何年月日滿期放免又ハ特赦

監獄署在監人書信紙明治　年　月　日

一在監人ヨリ其親属故舊ニ送ル書信ハ此紙ニ書寫スヘシ

一書信ノ文句規則ニ背キタルトアル時ハ其送致ヲ止メ仍ホ相當ノ罰ニ處スルトアルヘシ

四徒服役時限表

月名／時限	起床	就役	小憩	午飯	罷役	晩飯	還房	服役時間合計
一月	午前七時〇二分	午前八時〇二分	午前第十時ヨリ十分時間	正十二時ヨリ午後五時十分時間	午後三時三十分	一時二十八分間	午後四時五十八分	六時二十八分間
二月	六時三十八分	七時三十八分	第十時ヨリ十五分時間	十二時ヨリ一時間	三時五十分	一時三十二分間	五時二十七分	六時五十七分間
三月	六時〇六分	七時〇六分	同上	同上	四時	一時五十四分間	五時五十四分	七時十四分
四月	五時三十二分	六時三十二分	第九時四十分時ヨリ二十分時間	同上	四時三十分	一時五十八分間	六時二十八分	八時〇四分間
五月	五時〇二分	六時〇二分	第九時ヨリ三十分時間	十二時ヨリ一時三十分時間	五時	一時五十八分間	六時五十八分	八時五十九分間
六月	四時四十九分	五時四十五分	同上	十二時ヨリ一時三十分時間	五時二十七分	一時五十四分間	七時十四分	九時〇五分間
七月	四時五十分	五時五十一分	同上	同上	五時十分	一時五十九分間	七時〇九分	八時四十九分間
八月	五時十六分	六時十六分	同上	同上	四時五十分	一時五十四分間	六時四十四分	八時〇四分間
九月	五時四十八分	六時四十八分	第九時五十分ヨリ二十分時間	十二時ヨリ一時間	四時二十分	一時五十一分間	六時十一分	八時十二分間
十月	六時二十二分	七時二十二分	第十時ヨリ十五分時間	同上	三時四十分	一時四十九分間	五時三十七分	七時〇三分間
十一月	六時五十二分	七時五十二分	同上	同上	三時二十分	一時四十八分間	五時〇八分	六時十三分間
十二月	七時〇八分	八時〇八分	第十時ヨリ十分時間	十二時ヨリ五十分時間	同上	一時三十二分間	四時五十二分	六時十二分間

約テ日出ノ時刻ヲ以テ起床ノ時刻トナス然ルニ年々季節ニ早晩

約テ日沒ノ時刻ヲ以テ入監ノ時刻トナス

右之時間ニシテ工器ヲ併理シ及ヒ餐浴等ヲ爲サシム

アリ日々差加ニ刻分ア秒リ
ルニ東國ノ別國ニ西ア此ニ向テリ地方ニ於テモ分ノ秒ナキノ差異ナ保ツ能ハス故ニ月毎ニ大約之ヲ均シテ平ク其時刻ヲ起床登載スル各地ノ官司ハ此表ノ獄ノ區分ニ準ト宜シク該酌シテ役囚ヲ過スベシ

第四十章　海軍刑法

○明治十四年十二月二十八日布告第七拾號

海軍刑法別冊ノ通改定シ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

右奉勅旨布告條事

海軍刑法目錄

第一編　總則

第一章　法例（自第一條至第五條）

第二章　刑例（自第六條至第二十九條）

第一節　刑名

第六條ヨリ

第二節　主刑處分

第十條ヨリ

第三節　附加刑處分

第十六條ヨリ

第四節　刑期計算

第二十六條

第五節　假出獄

第二十七條

第六節　期滿免除

第二十八條

第七節　復權

第二十九條

第三章　加減例（自第三十條至第三十六條）

第四章　不論罪及ヒ減輕（自第三十七條至第四十條）
第一節　不論罪及ヒ宥恕減輕（第三十七條第三十八條）
第二節　自首減輕
第三節　酌量減輕　第三十九條
第五章　再犯加重　第四十條（第四十一條第四十二條）
第六章　加減順序　第四十三條
第七章　數罪俱發（自第四十四條至第四十六條）
第八章　數人共犯（第四十七條第四十八條）
第九章　未遂犯罪　第四十九條
第十章　名稱例　（自第五十條至第五十五條）
第二編　重罪輕罪
第一章　反亂（自第五十六條至第七十二條）
第二章　辱職（自第七十三條至第八十五條）
第三章　抗命（第八十六條第八十七條）
第四章　暴行（自第八十八條至第九十九條）
第五章　侮辱（自第百條至第百三條）
第六章　燒燬毀壞（自第百四條至第百九條）
第七章　擅權（第百十條）
第八章　違令（自第百十一條至第百十二條）
第九章　逃亡（自第百十三條至第百十五條）
第十章　詐僞（自第百十六條至第百十九條）

海軍刑法

第一編　總則

第一章　法例

第一條　此刑法ニ於テ罰ス可キ罪別テ二種ト爲ス

一　重罪

二　輕罪

第二條　此刑法ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスヿヲ得ス若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊兩法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

第三條　第九十二條第九十三條第九十八條第九十九條第百二條第百四條第百七條第百八條第百二十七條第百二十八條第百二十九條第百三十條第百三十一條第百三十二條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ此刑法ニ依テ處斷ス

教唆若クハ幇助シテ第百三十三條第百三十四條第百三十五條ノ罪ヲ犯サシメタル者ハ軍人ニ非スト雖モ亦軍人ト同シク論ス

第四條　敵前軍中ニ在テ第五十九條第六十條第六十一條第六拾二條第六十三條第六十四條第六十五條第六十七條第六十八條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ此刑法ニ依テ處斷ス但其豫備若クハ陰謀ニ止マル者ハ第六十九條第七十條ニ照シテ處斷ス

第五條　此刑法ノ罪ヲ犯スニ因リ人ヲ殺傷シタル者ハ普通刑法第三編第二章ニ照シ重キニ從テ處斷ス但第五十八條第九十九條第百三十七條ニ記載シタル者ハ此限ニ在ラス

第二章　刑例

第一節　刑名

第六條　刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

第七條　左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一　死刑

二　無期徒刑

三　有期徒刑

四　無期流刑

五　有期流刑

六　重懲役

七　輕懲役

八　重禁獄

九　輕禁獄

第八條　左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一　重禁錮

二　輕禁錮

第九條　左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス

一　剝奪公權

二　剝官

三　停止公權

四　禁治產

五　監視

六　沒收

第二節　主刑處分

第十條　主刑ハ之ヲ宣告ス

第十一條　死刑ハ銃ヲ以テ射殺ス普通刑法ニ從ヒ海軍法術ニ於テ死刑ニ處スル者亦同シ

第十二條　海軍法術ニ於テ死刑ニ處スル者ハ海軍卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フヿヲ得ス

若シ臨時死刑ヲ行フ權ヲ付與セラレタル者アル時ハ其命令ヲ以テ之ヲ行フヿヲ得

第十三條　前二條ニ記載シタルノ外死刑ノ處分ハ普通刑法第十四條第十五條第十六條ノ例ニ同シ

第十四條　徒刑流刑懲役禁獄及禁錮ハ普通刑法第十七條第十八條第十九條第二十條第二十一條第二十二條第二十三條第二十四條ノ例ニ同シ

第十五條　定役ニ服スル囚人ハ工錢ヲ分與スルノ法ハ普通刑法第二十五條ノ例ニ同シ

第三節　附加刑處分

第十六條　附加刑ハ此刑法ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第十七條　剝奪公權ハ普通刑法第三拾一條第三拾二條ノ例ニ同シ

第十八條　剝官ハ將校ノ刑トシ之ヲ宣告ス

軍屬其他ノ官吏剝官ヲ附加スル刑ニ該ル時ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其官職ヲ失フ

第十九條　將校重禁錮ニ處スル者ハ剝官ヲ附加ス輕禁錮ニ處スル者ハ各本條ニ記載シタルノ外之ヲ附加スルヿヲ得ス

其剝官ヲ附加スル者ハ主刑ヲ減輕スル時ト雖モ仍ホ之ヲ附加ス

第二十條　普通刑法及ヒ陸軍刑法ニ從ヒ禁錮ニ處スル者ト雖モ下士卒ハ其職役ヲ免セス

第二十一條　禁錮ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其刑期間公權ヲ行フヿヲ停止ス

第二十二條　禁治產ハ普通刑法第三十五條第三十六條ノ例ニ同シ

第二十三條　監視ハ普通刑法第三十七條第三十八條第三十九條第四十條第四十一條ノ例ニ同シ

輕罪ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者及ヒ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル者ハ普通刑法第三十四條ノ例ニ同シ

第二十四條　下士卒ハ此刑法及ヒ普通刑法陸軍刑法ノ輕罪ヲ犯シ監視ニ付シ若クハ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付ス可キ時ト雖モ監視ニ

付セス

第二十五條　沒收ハ普通刑法第四十三條第四十四條ノ例ニ同シ

第四節　刑期計算

第二十六條　刑期計算ハ普通刑法第四十九條第五十條第五十一條第五十二條ノ例ニ同シ

第五節　假出獄

第二十七條　假出獄ハ普通刑法第五十三條第五十四條第五十五條第五十六條第五十七條ノ例ニ同シ

第六節　期滿免除

第二十八條　期滿免除ハ普通刑法第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條ノ例ニ同シ

第七節　復權

第二十九條　復權ハ普通刑法第六十三條第六十四條第六十五條ノ例ニ同シ

第三章　加減例

第三十條　此刑法ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ記載シタル例ニ照シテ加減ス但加ヘテ死刑ニ入ルヿヲ得ス

第三十一條　第九十九條第百四條第百五條第百六條第百七條第百三十七條ニ記載シタル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一　死刑
二　無期徒刑
三　有期徒刑
四　重懲役
五　輕懲役

第三十二條　前條ニ記載シタル各條ノ外重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一　死刑
二　無期流刑
三　有期流刑
四　重禁獄
五　輕禁獄

第三十三條　輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一等トス

輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

ルヲ以テ一等ト爲ス

第三十四條　禁錮ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ記載シタル刑期四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲シ其加重ス可キ時ハ亦四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス但加ヘテ重罪ニ入ルヲ得ス

禁錮ハ加ヘテ七年ニ至リ減シテ十日以下ニ除スヲ得其減シ盡ス時ト雖モ仍ホ一日以上十日以下ノ禁錮ニ處ス但重禁錮ト雖モ十日以下ニ處スル時ハ定役ニ服セス

第三十五條　禁錮ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數ヲ生シ一日ニ滿サル時ハ之ヲ除棄ス

第三十六條　重罪ノ刑ヲ減輕シテ禁錮ニ處スル時將校ハ剝官ヲ附加ス輕罪ノ刑ヲ減輕スル時ト雖モ本刑剝官ヲ附加スル者ハ仍ホ之ヲ附加ス但減シテ十日以下ノ禁錮ニ處スル時ハ此限ニ在ラス

第四章　不論罪及ヒ減輕

第一節　不論罪及ヒ宥恕減輕

第三十七條　不論罪及ヒ宥恕減輕ハ普通刑法第七十五條第七十六條第七十七條第七十八條第七十九條第八十條第八十一條第八十二條ノ例ニ同シ

第三十八條　此節ニ記載シタルノ外特別ノ不論罪ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス

第二節　自首減輕

第三十九條　自首減輕ハ普通刑法第八十五條第八十八條ノ例ニ同シ

第三節　酌量減輕

第四十條　重罪輕罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルヲ得

此刑法ニ於テ本刑ヲ加重シ又ハ減輕ス可キ者ト雖モ其酌量ス可キ時ハ仍ホ之ヲ減輕スルヲ得

其酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第五章　再犯加重

第四十一條　再犯加重ハ普通刑法第九十一條第九十二條第九十四條第九十五條第九十七條第九十八條ノ例ニ同シ

第四十二條　再犯ハ初犯ノ罪此刑法ニ從ヒ處斷シタル者ニ非サレハ之ヲ論スルヲ得ス

第六章　加減順序

第四十三條　加減順序ハ普通刑法第九十九條ノ例ニ同シ

第七章　數罪俱發

第四十四條　數罪俱發ハ普通刑法第百二條第百三條ノ例ニ同シ

第四十五條　此刑法ノ罪ト普通刑法又ハ陸軍刑法ノ罪ト俱ニ發シタル時亦一ノ重キニ從テ處斷ス

第四十六條　此刑法ノ剝官ヲ附加セサル禁錮ニ該ル罪ト剝官ヲ附加スル禁錮及ヒ陸軍刑法ノ剝官ヲ附加スル禁錮若クハ普通刑法ノ禁錮ニ該ル罪ト俱ニ發シタル時ニ在テハ剝官ヲ附加セサル禁錮ニ處スルト雖モ仍ホ剝官ヲ附加シ軍屬其他ノ官吏ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其官職ヲ失フ

第八章　數人共犯

第四十七條　數人共犯ハ普通刑法第百四條第百五條第百六條第百七條第百八條第百九條第百十條ノ例ニ同シ但此刑法第八十七條第八十九條第九十條第九十三條第九十五條第九十六條第九十七條第百三十四條ニ記載シタル罪ヲ論スル時從犯ハ首魁ニ非サル正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス

第四十八條　軍人ト軍人ニ非サル者ト共犯ニ係ル時軍人ハ此刑法ニ依リ處斷スト雖モ軍人ニ非サル者ハ普通刑法ニ照シテ其罪ヲ論ス

但第三條第四條ニ依リ此刑法ヲ以テ處斷スヘキ者ハ此限ニ在ラス

第九章　未遂犯罪

第四十九條　未遂犯罪ハ普通刑法第百十一條第百十二條第百十三條ノ例ニ同シ

第十章　名稱例

第五十條　軍人ト稱スルハ將官及同等官上長官士官下士卒ヲ謂フ將校同等ノ軍人ハ總テ將校ニ同シ

第五十一條　軍屬ト稱スルハ海軍出仕ノ文官其他海軍ニ從事スル者ヲ謂フ

軍屬及ヒ海軍所屬ノ生徒ハ總テ軍人ニ同シ

第五十二條　司令官ト稱スルハ數隻又ハ一隻ノ艦船數所又ハ一所ノ屯營ヲ指揮スル者及ヒ分遣ノ兵隊若クハ數隻ノ端舟ヲ指揮スル者ヲ謂フ

第五十三條　上官ト稱スルハ官等ノ上ナル者ヲ謂フ同等ト雖モ命令ヲ下ス可キ權ヲ有スル者其部下ニ於テハ上官ニ同シ卒ニシテ臨時下士ノ職ヲ奉スル者其部下ニ於ル亦之ニ準ス

第五十四條　守兵ト稱スルハ儀仗若クハ警戒ノ爲メ守地ニ在ル者ヲ

謂フ

第五十五條　親屬ト稱スルハ普通刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ同シ

第二編　重罪輕罪

第一章　反亂

第五十六條　軍人黨ヲ結ヒ擅ニ兵器ヲ執リ反亂ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　首魁教唆者及ヒ群衆ノ指揮ヲ爲シ若クハ樞要ノ職務ニ從事シタル者ハ死刑ニ處ス其指揮ヲ爲シ樞要ノ職務ニ從事スト雖モ情狀輕キ者ハ無期流刑ニ處ス

二　諸般ノ職務ヲ司トリ若クハ艦船兵器彈藥其他軍需ノ物品ヲ資給シタル者ハ有期流刑ニ處シ其情狀輕キ者ハ重禁獄ニ處ス

三　附和シテ其事ニ服行シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第五十七條　軍人反亂ヲ爲スヿヲ謀リ艦船兵器彈藥其他軍需ノ物品ヲ劫掠シタル者ハ前條ノ刑ニ同シ

第五十八條　軍人前二條ノ罪ヲ犯スニ因リ故サラニ鎮撫ノ官吏ヲ殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第五十九條　軍人敵ヲ利スル爲メ艦船兵隊港灣堡塞造船所造兵所武庫火藥庫兵器彈藥糧餉其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵ニ付シタル者ハ死刑ニ處ス

第六十條　軍人敵ヲ利スル爲メ軍事ニ關スル緊要ノ圖書ヲ敵ニ付シ若クハ土地道路ノ要害險夷ヲ指示シ又ハ暗號軍機軍情ヲ漏洩シタル者ハ死刑ニ處ス

第六十一條　軍人敵ヲ利スル爲メ艦船屯營造船所造兵所兵器彈藥糧餉其他軍用ニ供ス可キ物件ヲ毀壞シ又ハ火ヲ放テ之ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第六十二條　軍人敵ヲ利スル爲メ兵器彈藥糧餉其他軍需物品ノ缺乏ヲ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第六十三條　軍人敵ノ爲メニ兵ヲ募リタル者ハ死刑ニ處ス

第六十四條　軍人敵ヲ利スル爲メ音信ヲ敵ニ通シタル者ハ死刑ニ處ス

第六十五條　軍人敵ノ間諜ヲ誘導助成隱匿シ若クハ敵ヲ利スル爲メ俘虜降人ヲ逃走セシメ又ハ劫奪シタル者ハ死刑ニ處ス

第六十六條　軍人黨ヲ結ヒ司令官ヲ殺シ敵ニ降ラシメントシタル者ハ死刑ニ處ス

第六十七條　軍人敵ヲ利スル爲メ艦船若クハ兵隊ノ潛走ヲ謀起シタル者ハ死刑ニ處ス

第六十八條　軍人敵ヲ利スル爲メ叫呼喧噪シ若クハ造言飛語ヲ爲シタル者ハ死刑ニ處ス

第六十九條　軍人前數條ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者及ヒ其豫備ヲ爲シタル者ハ本條ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

其陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

第七十條　軍人前數條ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ其豫備若クハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ自首シタル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第七十一條　軍人情ヲ知テ前數條ニ記載シタル所ノ犯人藪會ノ爲メ家屋ヲ貸シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第七十二條　軍人此章ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第二章　辱職

第七十三條　司令官猶ホ防守スルヲ得可キ時ニ於テ敵ニ降リ又ハ其艦船若クハ守地ヲ敵ニ付シタル者ハ死刑ニ處ス

第七十四條　司令官戰爭ノ際ニ於テ其盡ス可キ所ヲ盡サスシテ艦船若クハ兵隊ヲ率ヰ遁走シタル者ハ死刑ニ處ス

第七十五條　司令官若クハ艦船ノ乘員其艦船ヲ破亡沈沒シタル者ハ死刑ニ處ス其怠慢ニ出タル時ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第七十六條　司令官其艦船破亡沈沒スル時ニ當リ故ナク衆ニ先タチテ其艦船ヲ退去シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

二　軍中ニ在テハ有期流刑ニ處ス

三　其他ノ場合ニ在テハ輕禁錮ニ處ス

第七十七條　司令官若クハ艦船ノ乘員其艦船ヲ擱岸坐礁其他危險ニ付シ之ヲ損壞シタル者ハ重禁獄ニ處ス其怠慢ニ出タル時ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第七十八條　司令官其艦船擱岸坐礁其他危險ノ時ニ當リ救護ノ方策ヲ講サスシテ之ヲ沈沒セ若クハ損壞シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第七十九條　司令官敵ノ船舶ヲ拿捕ス可キ時ニ於テ故ナク其事ヲ爲サヽル者ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

敵前ニ在テ我船舶ヲ救援ス可キ時故ナク其事ヲ爲サヽル者亦同シ

第八十條　司令官若クハ當直士官怠慢ニ因リ敵ヲシテ其艦船ニ乘入ラシメタル者ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第八十一條　司令官船舶ヲ護備スルノ命ヲ受ケ其船舶ヲ委棄シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

二　軍中ニ在テハ重禁獄ニ處ス

三　其他ノ場合ニ在テハ一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第八十二條　前條ノ所爲其怠慢ニ出タル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　敵前ニ在テハ一年以上四年以下ノ輕禁錮ニ處ス

二　軍中ニ在テハ三月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

三　其他ノ場合ニ在テハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第八十三條　將校其部下ノ兵徒竊犯罪ノ事アルニ當リ鎮定ノ方ヲ盡サヽル者ハ一月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

第八十四條　軍人職務ニ因リ與リ知ル所ノ軍機若クハ軍事ニ關スル秘密ノ圖書ヲ漏洩シタル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第八十五條　司令官內外國ノ船舶擱岸坐礁其他危險ノ時救援ノ請求ヲ受ケ故ナク之ヲ肯セサル者ハ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第三章　抗命

第八十六條　軍人命令ヲ下ス可キ權アル者ノ命令ニ抗シタル者若クハ服從セサル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

二　軍中又ハ擱岸坐礁其他艦船救護ノ爲メ緊要ノ方畧ヲ爲ス時ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

三　其他ノ場合ニ在テハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第八十七條　軍人二人以上相黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

二　軍中又ハ擱岸坐礁其他艦船救護ノ爲メ緊要ノ方畧ヲ爲ス時ニ在テハ首魁ハ重禁錮ニ處ス其他ノ者ハ二年以上五年以下ノ輕

禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

三　其他ノ場合ニ在テハ首魁ハ輕禁錮ニ處ス其他ノ者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第四章　暴行

第八十八條　軍人上官ニ對シ暴行ヲ爲シタル者ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第八十九條　軍人二人以上相黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者首魁ハ重禁獄ニ處ス其他ノ者ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第九十條　軍人上官ノ公務ヲ行フニ當リ前二條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第九十一條　軍人上官ニ對シ兵器若クハ兇器ヲ用ヒ暴行ヲ爲シタル者ハ死刑ニ處ス

戰場ニ於テ上官ノ公務ヲ行フニ當リ暴行ヲ爲シタル者亦同シ

第九十二條　軍人守兵ニ對シ暴行ヲ爲シタル者ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用ヒタル者ハ有期流刑ニ處ス

第九十三條　軍人二人以上相黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者首魁ハ重禁獄ニ處ス其他ノ者ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用ヒタル者首魁ハ死刑ニ處シ其他ノ者ハ有期流刑ニ處ス

首魁自ラ兵器若クハ兇器ヲ用ヒスト雖モ指示シテ之ヲ用ヒシメタル時ハ死刑ニ處ス

第九十四條　軍人戰場ニ於テ同等若クハ下等ノ者ノ公務ヲ行フニ當リ暴行ヲ爲シタル者ハ三月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用ヒタル者ハ重禁獄ニ處ス

第九十五條　軍人二人以上相黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者首魁ハ輕禁獄ニ處ス其他ノ者ハ三月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用ヒタル者首魁ハ有期流刑ニ處シ其他ノ者ハ重禁獄ニ處ス

首魁自ラ兵器若クハ兇器ヲ用ヒスト雖モ指示シテ之ヲ用ヒシメタ

ル時ハ有期流刑ニ處ス

第九十六條　軍人多衆相集リ暴行ヲ爲シタル者首魁ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ其他ノ者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第九十七條　軍人多衆結合シテ相鬪毆シタル者首魁ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ其他ノ者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第九十八條　軍人俘虜降人ヲ刼奪シ若クハ暴行脅迫ヲ以テ其逃走ヲ助クタル者ハ重禁獄ニ處ス

第九十九條　軍人戰場ニ於テ創傷人ノ衣服財物ヲ被奪シタル者ハ重懲役ニ處シ因テ殺傷シタル者ハ死刑ニ處ス

第五章　侮辱

第百條　軍人上官ヲ罵詈若クハ侮慢シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

上官ノ公務ヲ行フニ當リ罵詈若クハ侮慢シタル時ハ一等ヲ加フ

第百一條　軍人文書圖畫ヲ流布シ若クハ多衆ヲ會シ演說ヲ爲シテ上官ヲ誹毀シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百二條　軍人守兵ヲ罵詈若クハ侮慢シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百三條　軍人戰場ニ於テ同等若クハ下等ノ者ノ公務ヲ行フニ當リ罵詈若クハ侮慢シタル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第六章　燒燬毀壞

第百四條　軍人火ヲ放テ艦船屯營造船所造兵所武庫火藥庫其他戰鬪ノ用ニ供スル屋舍若クハ軍用ニ供スル物品ヲ貯藏シタル倉庫ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第百五條　軍人火ヲ放テ露積シタル兵器彈藥機械船具糧餉其他軍用ノ物品ヲ燒燬シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　敵前若クハ軍中ニ在テハ死刑ニ處ス

二　其他ノ場合ニ在テハ重懲役ニ處ス

第百六條　軍人火藥其他激發ス可キ物品又ハ蒸氣罐ヲ破壞セシメテ前二條ニ記載シタル物件ヲ毀壞シタル者ハ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第百七條　軍人艦船屯營造船所造兵所武庫火藥庫其他戰鬪ノ用ニ供スル屋舍若クハ軍用ニ供スル物品ヲ貯藏シタル倉庫ヲ毀壞シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百八條　軍人兵器彈藥機械船具糧餉其他軍用ノ物品ヲ棄毀シタル者ハ一月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百九條　軍人官給ノ物品ヲ棄毀シタル者ハ十一日以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第七章　擅權

第百十條　司令官講和ノ告示若クハ停戰ノ命令ヲ受ケタル後仍ホ戰鬪ノ所爲ヲ止メサル者ハ死刑ニ處ス

第百十一條　司令官命令ニ背キ若クハ權外ノ事ニ於テ已ムヲヲ得サルノ理由ナク擅ニ艦船若クハ兵隊ヲ進退シタル者ハ死刑ニ處ス

第八章　違令

第百十二條　司令官艦船若クハ兵隊ヲ率ヰ故ナク其守地若クハ配置セラレタル地ヲ離去シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

二　軍中ニ在テハ一年以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

三　其他ノ場合ニ在テハ二月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

第百十三條　將校艦船ノ直ニ在テ其直ヲ離レ若クハ守兵守所ヲ離レ其他軍人緊要ノ職務ニ服シ擅ニ其職務ヲ離レタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

二　軍中又ハ攔岸坐礁其他艦船救護ノ爲メ緊要ノ方策ヲ爲ス時ニ於テハ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

三　其他ノ場合ニ在テハ一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第百十四條　將校艦船ノ直ニ在テ睡眠若クハ酩酊シテ事ヲ省セサル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

二　軍中又ハ航海中ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百十五條　守兵守所ニ在テ睡眠若クハ酩酊シテ事ヲ省セサル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

二　軍中ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

三　其他ノ場合ニ在テハ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百十六條　軍人艦船ノ攔岸坐礁其他危險ノ時ニ當リ司令官ノ命ヲ